

---

# 神殺し

雷禅 神衣

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神殺し

### 【Nコード】

N9783G

### 【作者名】

雷禅 神衣

### 【あらすじ】

裏社会の最深部にある「魔界」その魔界で繰り広げられる「魔界No.1」の座を争う狂人と化した殺人鬼たちの壮絶な死闘。

## 1・神殺し「ウル」

仕事が終わった後に乗るエレベーターと言うのは実に心地悪い。何処かでシャワーでも浴びれば石鹸の香りに包まれて気分も良いのだが

生憎とそのような時間を持たないこの男は、いつもこの血生臭いエレベーターの個室が嫌だった。

男が押した先は地下4階。エレベーターは起動の音を静かに響かせ下へと向かった。

男は革ジャンのジッパーを下に降ろすと、真っ白だったTシャツが真っ赤に染まっているのを見て、口元を歪ませた。

無論、それは自分の血ではない。これはあくまで返り血であって男は無傷だ。

革ジャンの内ポケットは改良されており、小型の斧や鉞、サバイバルナイフなどが納まっている。

そのどれもが血で染まっており、ポタポタとエレベーターの床に滴り落ちた。

床には以前にも同じように血が落ちた跡がいくつも残されており、どれも赤と言うよりはドス黒く染まっている。

もはや床は本来の色彩を失っており、床からも血生臭い異臭が漂っている。

見飽きた光景だが、この光景こそが男の仕事を象徴する証でもあった。

エレベーターが目的の地下4階を告げると、鋼鉄の扉が開いた。男はすぐ目の前にある緑色のドアを開き、中に入った。

「お疲れさん、ウル。仕事はどうだった？」

「まずまずだ。目的は達成した」

「そうみたいだね。さっき銀行の口座に約束の金が全額振り込まれていたよ。」

それにしても相変わらず酷い姿だね」

「俺の見た目はお前の心の中と同じだろ？紅」

「アハハ、まあそうだけどね」

男の事を「ウル」と呼んだこの青年の名は「矢吹 紅」（やぶき くれない）歳は27歳とまだ若い青年だ。

目鼻立ちの整った美青年で、髪の毛はセミロング。ブラウンに染めた髪の毛は潤いがあり

背後から彼を見ると男なのか女なのか判別が付かない容姿となる。

頭脳面積でいつもパソコンと向かい合っており、殺し屋を背負うウルの良きパートナーだ。

そして「ウル」と呼ばれたこの大柄な男の本名は「鉄 麗」（くろ がね うるは）歳は34歳。

紅は麗のうるを取ってニツクネームの「ウル」と彼を呼んでいる。

「それで今回は何人殺ったんだっけ？」

「20人だ」

「わお！後11人殺ってたらギネス更新だったね」

「そうなのか？」

「そうだよ、惜しいな〜もつと殺せば良かったのに」

「俺は依頼主のターゲットしか殺らない。それが殺し屋の信念つてもんだ。ちよつとシャワーを浴びてくる」

そう言うウルは別の部屋から着替えを持ち、浴室へと消えて行った。

とても尋常ではない会話だが、紅とウルは「そういう世界」にいるのだ。

光溢れる表の世界とは似ても似付かぬ裏の世界。

そう、彼ら裏社会ではこの世界の事を「魔界」と呼び合っている。一般的に裏社会と言えば闇の売買やヤクザ、暴力団などが挙げられるが

紅やウルのいる世界は、それよりも更に極悪な世界。魔界に比べた

らヤクザや暴力団など子供のような存在に過ぎない。  
裏社会を「悪」とするのなら、魔界は「魔」である。

既に人間である事を超越し、残虐な行為に対し何の抵抗を持たなくなつた狂人たちが始めて踏み込む世界  
それが「魔界」である。

この魔界では殺人など日常茶飯事だ。そもそも人を殺す事に悪など感じるはずもなく、人間が蟻を踏み潰すのと同じように  
そして人々がゴキブリを殺すのと同じように、人間を殺す事は日常の常だつた。

正常な人間社会に存在する秩序も無ければ優しさもない。そこにあるのは残虐の二文字だけだ。

そんな魔界の頂点に君臨するのがウルなのだ。彼は魔界では「神殺しのウル」と呼ばれており

同じ魔界の殺人鬼たちから恐れられている。ウルが目の前に現れる事、それ即ち「絶対的な死」を意味する。

ウルの手に掛かり、生き延びた人間は誰一人存在しない。

「神殺しのウル」と言う異名は「神さえ殺しかねない」と言う表現から付けられた名である。

そんなウルを支える良きパートナーの一人が紅であり、彼もまた魔界では恐れられている存在だ。

もう一人パートナーがいるのだが、今は席を外しているらしかった。

「金額はどのくらいまで膨れ上がった？」

シャワーから出てきたウルが紅に聞いた。

「総金額136億。そろそろ銀行の口座を増やした方が良くかもね。あまり金額が大きすぎると怪しまれる。

ちなみにこの金額を得るためにウルが殺した人間の合計は・・・398人だね」

「まだ398人か、意外と少ないんだな」

「アハハ、表の世界ではもう列記としたシリアルキラーだよ。だから

「余計にギネスを狙って欲しかったんだよね」

「簡単に言っなよ。殺る方は苦労するんだぜ」

「嘘だあゝいつも笑って殺すくせに」

「ハハハ、それより警察の方はどうなってる」

「調べてみるかい？」

「ああ」

紅は目の前にあるパソコンに居直った。

画面には警視庁のサイトが開かれ、そして本来アクセス出来ないページへ飛んだ。

そこには全国で起こった殺人事件に関する情報がリアルタイムで更新されるという

警視庁内部の人間のみがアクセスできるページだった。

優秀な頭脳を持つ紅のハッキングによって成せる業だ。高度な知識を持つ紅にとって

警視庁の規制サイトにアクセスすることなど動作も無い事だった。

「あつた、これだね」

紅は画面の一部分を指で示した。そこには「20人殺し」と打ち込まれており、事件に関する詳細が掲載されていた。

「やっぱり魔矢が上手くやったんだろうね、ウルに関する情報は一つ得られて無いみたい」

「20人殺しの容疑者に関する目撃情報、未だ無し。犯人像見当付かず・・・か」

ここで言われる「魔矢」（まや）と言う人間こそがウルを慕う最後のパートナーである。

「警察も俺の存在には気付けないか。まあそうだろう。魔矢は警視庁の警視總監だからな」

「凄い話だね。本来人を守るべき警視總監が、実は魔界の住人なんださ」

「ま、だからこそ俺たちの存在は闇に葬られる」

「まあね。魔矢には感謝しなきゃ」

「人が居ないところで感謝されても嬉しくないな」

突然部屋のドアが開いたかと思うと、そこには魔矢が立っていた。

「魔矢。今日はもう仕事は終わりなの？」

紅が聞いた。

「ああ。いくら警視総監と言えどある程度帰りの時間を制限しなきゃやってられんからな」

魔矢は少々疲れた様子で言った。

「お疲れだったな、ウル」

「ああ。俺の痕跡は残ってなかっただろ？」

「20人殺しの件だな。勿論だ。俺が現場に到着したときには既にお前は去った後だったし

証拠も一切無かったから、事件調書を書き換える必要も無かったさ。その辺はさすがだな。

んで、今回の殺しでいくら入ったんだ？」

「今回だけで3億入った。なんせ20人と言うデタラメな数だったんでな。それ相応の金額を提示した」

「そうかい。それはそうとお前、先日東京の指定暴力団（山村組）の連中を殺っただろ？」

「そうなの？それは初耳だけど」

紅がウルを見て言った。

「ああ、あの連中か。そうだ、俺が殺った。気に食わなかったもんでな」

「何が気に食わなかったんだ？」

「あの連中、都心で年寄り相手に恐喝をしてたんだよ。ムカツと来てね」

「魔界の神殺しの異名を取るお前が、年寄り一人に同情したのかよ」「俺は子供と年寄りは好きなんだ。なんだ？殺ってまずかったのか？」

「仕事以外であまり殺しをするなよ。特に山村組ほどの巨大な組織を潰すと、他の組の連中が舞い上がるんだ。」

いよいよ自分たちの時代が来たってな感じで。しかもお前、かなり残酷なやり方で殺ったよな？」

「なになに、どう殺したわけ？」

「別に普通さ。首を同体から引き千切って舌を引っこ抜いた。ただそれだけのことさ」

「うへえゝ痛そう」

「まったく頼むぜ。今度暴力団を殺るときは、俺に一声掛けてくれ。揉み消すのが大変なんだ」

「分かったよ、すまんすまん」

「ところでお前たち、この二人組みを知っているか？」

魔矢はそう言う一枚の写真を取り出し、ウルと紅に渡した。

写真には二人組みの男が映っている。

一人は身長190cmほどの男で筋骨隆々のモンスターでヴァンパイアにも見える。

分厚い胸には、鎖を食いちぎる大虎の刺青が刻まれ、背中には赤い女郎蜘蛛が、大きな蜘蛛の巣に乗っている刺青が施されている。

髪はぼさぼさで目はギョロ目。大きな口に、鋭い牙。その姿は、まるで野生の大虎を思わせる重量感と威圧感を放っている。

もう一人は対照的で紅のような美青年だった。身長は175cmほどでその美貌は小悪魔的だ。

すっきりとしたショートヘアに白い素肌。背中から右肩にかけて、怪しげな蜘蛛の巣の上に止まる黒い蝶の刺青があり

左の乳首には黒い茨の刺青があるようだ。

ウルはまったく見覚えが無く写真を紅に渡した。紅の知らないよう  
で首を傾げている。

「この二人がどうかしたのか？」

ウルが魔矢に聞いた。

「その二人はお前のファンだそうだ」

「ファンだって!？」

紅が叫んだ。



「左側に映っている筋骨隆々のモンスターはパイファー（白虎）と言う男。」

右側に映っている美青年は鬼武と言う男だ。二人とも最近魔界に入った新参者だが、なかなかの殺人鬼たちでな。

ウルはやった20人殺しの現場に、ウルが去った後に訪れている姿を目撃されている。

どういう経緯でウルが存在を知ったのかは不明だが、お前とは一度会ってみたいと話していたらしい」

「ほう」

ウルはあまり興味を示していない様子だった。

「それでこの二人はどんな殺しをやるの？」

紅だけは興味を持ったようで魔矢に聞いた。

「パイファーの方はウルと似ていて、武器よりも素手で相手を殺す事のが好きみたいだな。」

特に自分よりも強そうな相手や屈強の男を相手にする性格らしい。

鬼武に関しては詳しい詳細はあまり無いんだが、時折対空ミサイル・

ステインガーFIM-92Aを持ち出したり

ロケットランチャー振り回す事があるらしい」

「なんだかハチャメチャだね」

「だからこそ魔界に入れたんだろう。この二人はウル、お前を尊敬しているらしい」

「そうかい」

「あれ？ウルは興味無さげだね」

「ま、この二人組みが神殺しのウルに喧嘩を売らない事を祈るよ。尊敬しているらしいからその心配は無いだろうけどな」

「でもどうするの？ウル。もし何処かでこの二人と出くわしたら、殺る？」

「別に。俺は依頼主のターゲットを殺す事が仕事だ。関係の無い人間まで巻き込む気は無いが・・・」

「無いが？」

「その二人の出方によつては変わってくる」

「要するにちよつかい出さなければ何もしないと言つわけだな」

「そうだ」

「じゃあもし普通に話し掛けてきたら？」

「その時は普通に話し返すだけさ」

ウルはそう言つと立ち上がりドアへと近づいた。

「何処行くんだ？」

「次の仕事だ。殺しの依頼はもう一件あつてな。そろそろ時間なんだ」

「次は何人殺るんだ？」

「今回は8人だ。じゃあな」

そう言つとウルは様々な武器が仕込んであるジャケットを羽織り、出て行つた。

「ウルを尊敬する二人の男か。僕はちよつと興味あるな」

紅が楽しそうに言つた。

「ウルは相変わらず一匹狼だな」

「うん。それが神殺しのウルたる由縁だからね」

ウルは今日も動き出す。

その先に殺戮と言つ二文字が待っている「地獄の最終地」へ……。

END

## 2 矢吹 紅編

今日はウルも魔矢も出掛けている。

外出の理由は最近魔界に入ってきたパイパー、鬼武両名の動向を探るため。

だが「神殺しのウル」の異名を取るウルが重い腰を上げ、この二人の動向を探る気になったのには訳があった。

「魔界へ侵入してくるのはパイパーと鬼武の二人だけではなさそうだ」

この情報を持つてきたのは魔矢だった。

魔矢の話によると、パイパー、鬼武の両名の他に、「等々力 薫」、  
「鮫島 聖」と名乗る二人の人間が

パイパー、鬼武サイドには存在し、連中が徒党を組む可能性が強いらしい。

別に連中が仕掛けてこない限り何をするわけでもないのだが、慎重派の魔矢はこの四名に神経を尖らせている。

事実上、この話が真実ならまた厄介な殺人鬼たちが増え、さらに数を増やし徒党を組みかねない。

そうなるとその分だけ「神殺し」の地位を狙う殺人鬼たちが増えるという事だ。

最も、紅からすればウルを倒せる人間など存在しないと思っている。何故ならN o . 1 が存在するという事は、当然N o . 2、N o . 3と続く存在があるからだ。

その存在を撃破し、ウルまで辿り着く可能性は極めて低い。

ましてやN o . 2とN o . 3を殺すのは不可能だと断言できる。

何故ならN o . 2とN o . 3は……。

「あれえゝまゝた奇妙な連中がやって来たな」

ヘッドフォンを耳に当てたままの紅が一人呟いた。

ヘッドフォンはこの建物の周辺に設置している盗聴器から流れてくる音声で

紅たちの居るビルから半径200メートル四方の会話を盗聴できる。ヘッドフォンから流れてきた声は以下のような会話だった。

「ここがウルのいるビルだな」

「ああ、そうだ。でも本当に殺るのか？」

「当然だろ？ ウルを殺れば神殺しの異名は俺のものだからな」

「自信はあるのかい？」

「勿論さ。俺を誰だと思ってんだ？ 元陸軍軍曹だぜ」

「さて、じゃあ突入とするか」

会話はそこで途切れた。どうやらウルが不在だと言う事を知らないらしい。

今現在このビルにいるのは紅ただ一人だ。

「しょうがないな」ウルも魔矢もないし、暇潰しで遊んであげようかな」

紅は満面の笑みを浮かべてモニターをオンにした。

そこには完全武装を施した機動隊のような男たち、合計8人がビルへと近づいている姿が映し出された。

その8人の中に一際背の大きな男が映っている。どうやらこの男が先ほど喋っていた軍曹らしい。

「うへへ、なんだか楽しくなってきたぞ！！」

紅は「トラップ」と書かれたボタンを押した。

「さあ、ここまで辿り着けるかな？」

武装した集団はビルの中に入り、エレベーターのスイッチを押した。ウルの居る階はこのビルの地下4階。そこに神殺しのウルがいる。

男たちはエレベーターが下りてくるのを待った。

やがてエレベーターのドアが開くと、突然ビル内に不気味な声が響いた。

「勇敢な戦士たちよ、今日は諸君とゲームがしたい。俺は地下4階

で君たちを待っている。

来れるものなら来てみるが良い」

その音声は機械によって変えられ、誰が喋っているのか分からなかった。

「今のはウルか!？」

「だろうな、ふざけやがって。まあいい、乗るぞ」

武装集団は銃を構えながらエレベーターに乗った。

「へへへ、第一トラップ始動だ!？」

地下4階でモニターを見ながら紅は呟いた。

男たちの乗ったエレベーターは静かに下へと下がっていく。それでも常に何が起こるか分からないため隊員は緊張している。

そして地下2階へ辿り着いた時だった。

突然エレベーターの天井部が開き、開かれた穴から五匹のドーベルマンが落ちてきた。

「な、なんだ!?!」

「うぎゃああああ!?!」

「くそつたれ!?!」

ドーベルマンたちは狂犬と化しており、目に付く全ての男たちに噛み付いた。

慌てた男たちは咄嗟に発砲するが、エレベーターと言う狭い個室の中でターゲットが定まらず、銃弾は仲間に命中した。

「くそ!?!」

軍曹は身を屈め、持っていた銃で応戦する。だが他の仲間たちは噛み殺されたり、仲間同士で撃ち合ったりと無惨な姿を晒した。

エレベーターの個室は血塗れになり、人間の死体と犬の死体が無数に転がった。

地下3階へ辿り着いたときには、8人中5名が死亡した。

「なんてこった・・・」

「やっぱり無謀だったんだよ、ウルに喧嘩を仕掛けるなんて・・・」  
「俺たち殺される・・・」

「泣き言を抜かすな！ウルは俺が殺す」

軍曹のみが平常心を保っているようだった。

やがてエレベーターは地下4階へ辿り着き、ドアが開いた。目の前の壁には紙が貼り付けており、こんな事が書かれていた。

「火の用心」

軍曹がそれを目にした次の瞬間、天井に開いていた小さな穴から凄まじい勢いで火炎が放射された。

「ぎゃあああ！！！」

「ぐうわあああ！！」

軍曹だけが床に腹ばいになり難を逃れたが、他の二人は炎に包まれてしまった。

「くっ！これも罠か！！」

火炎の熱に耐えられなくなった軍曹は、たまらず緑色のドアを開け、中に入った。

「やあ、よくここまで辿り着けたね」

「お前はっ！！」

そこにいたのはあまりにも清楚な美少年だった。これが神殺しのウルなのだろうか・・・。

「お前がウルか？」

「違うよ。ウルは出掛けているんだ。僕は単なるお留守番」

「こんなことしやがったのはお前か」

「そうだよん。楽しかったでしょ？」

「ふざけるな！！」

「あれえゝ良いのかなゝ僕にそんな口の利き方してゝ死んじゃうよゝん」

「クソガキが！！」

軍曹が銃を構えた時だった。紅は一瞬ニヤリと笑みを浮かべ、右手に持っていた遠隔装置のボタンを押した。

「ぐはああああああっ！！！！」

紅がボタンを押した瞬間、軍曹の両側にあつた壁から夥しい数の槍

が飛び出し、軍曹の身体に突き刺さった。

「うはあく痛そう」

「ぐううう・・・」

軍曹に刺さった槍の数は計8本。その全てが致命傷裂けているが、もはや軍曹は立ち上がれないほどのダメージを追っていた。

「ウルを殺すために来たみたいだけど、無駄だったね。君たちがウルに挑もうなんて100年早いよ」

「ううう・・・」

「僕を倒せないんじゃないやウルは程遠いな。あ、そうそう知ってる？ No.1はウルだけど」

その下にはNo.2、No.3って続く人が居るんだけど、誰だか知ってる？」

紅の言葉に軍曹は首を捻った。そんな人間が居るなんて初耳だった。

「No.3は僕たちの仲間の魔矢。そしてNo.2は・・・」

まさか・・・軍曹の目にニヤリを笑う紅が映る。だがもはや軍曹に抵抗する力など残っていない。

「魔界No.2の殺人鬼は、僕なんだよ。神殺しのウル・・・そして僕の名前は・・・処刑の紅だ。相手が悪かったね」

「処刑の紅」・・・軍曹には聞き覚えがあった。

覚えている限りの記憶では、処刑の紅が人を殺す際は必ず処刑の道具を使うという。

その道具は全て現実世界で使われた品々で、中世ヨーロッパの物から東南アジア系の物まであると言う。

「さあ、処刑の始まりだ！！アハハハ！！」

一体いつ持ったのか、紅の手には巨大なノコギリが握られていた。この小さな身体でこんな巨大なノコギリを持つとは尋常ではない。

紅は蹲っている軍曹の身体から服を脱がせ、全裸にすると、別の部屋から両脇を横に固定された鉄棒を持ってきた。

そして軍曹を軽々と持ち上げると、身体を逆様にし、両足を紐で括りつけ、軍曹を逆さ吊りにした。

「これから何をするか分かるかな？」

軍曹はゾツとした。もはや全裸になっている上に逆様に吊り下げられている。抵抗も出来ないが

この場合、どのようにノコギリを使うかは容易に想像が付いたからだ。

「このノコギリを君の股間に当てて、ギコギコしたらどうなるだろうね？」

「や、やめる……やめてくれ……」

「君の身体は縦に真つ二つ」 最高だよ！ 嗚呼、たまらないな」

頭から鋸引きするほうが、刑として苛烈のように思われるが、実はそれは相手への思いやりとも言えた。

というのも、頭から引き始めれば、囚人はすぐに絶命することが出来たが、股間から引き始めた場合はそうではなかったからである。

1) 犠牲者の両足を開き、胸部を下方に位置させることで、出血の速度を緩めることができる。

2) 頭が下方になる事で、血液が脳に流れ込み、脳への酸素の供給を活発にする。

3) 以上により、痛みを鋭敏に感じさせる一方で、来るべき死を引き延すことができる。

以上のような理由からその苦痛は極限とされるのが、このノコギリ刑なのである。

「じゃあ行くよ。イツツ、ショータイム！！イエーイ！！」

「やめろ！！！！があああああああ！！！！」

軍曹の股間にノコギリが突き刺さり、それが左右に揺さぶられる。

「があああつ……ぐががあああああつ！！！！」

凄まじい血しぶきが上がる中、ノコギリは更に加速し、股間から下腹部へと移動する。



「うはあく痛い？痛いよね？ゴメンネ」痛くして　だけど僕に喧嘩を売るからこうなるのさ」

「ああああ・・・ぐうがああ・・・」

「そおら、もう一息だよ」

ノコギリが軍曹の首まで到達したとき、既に軍曹は息絶えていた。やがてノコギリが頭部を切断すると、軍曹の身体は真っ二つに切断された。

異臭を放ちながら血や内臓がこぼれる。

「アハハ、楽しかった。やっぱり殺しは良いよね」

紅は頬に飛んだ血を一舐めすると、口元を大きく歪ませニッコリと微笑んだ。

### 3・く魔界炎上編く

紅がアジトで軍曹の惨殺を楽しんでいる頃、ウルと魔矢はとある現場に辿り着いていた。

「こりや思っていた以上だな」

魔矢は一面に広がる血の海を見渡し呟いた。ウルは表情一つ変えず残っていた武器弾薬の回収をしている。

「ざつと数えても12人は居るな。まあ、いずれも魔界では最下級レベルの殺人鬼たちだが・・・」

魔矢は既に息絶えている死体を見てそう言った。

「殺ったのは噂のあの連中か？」ウルが聞いた。

「パイフーと鬼武に間違いない。お前ほどではないとは言え、なかなか残虐だな」

「フン、この程度なら誰でも出来るけどな」

「それはお前だからこそ言えることだろ」

「ハハハ！まあな」

現場に残っている弾痕や傷跡から判断するに、この殺人鬼たちは四方八方に攻撃を仕掛けている痕跡がある。

それはターゲットが一人ではなかったと言う証拠である。

パイフー、鬼武に加え「等々力 薫」、「鮫島 聖」両名の存在があったかどうかは未だ不明だが

少なくとも一人ではなかったはずだ。

「新参者にしちゃあ、ずいぶん手荒だな。殺し慣れた連中のようにだ」

「何故分かる？」

魔矢が聞いた。

「殺り方の手順が良い。これだけ派手に殺りあって置きながら、連中の足跡は残っていない。

それに死体を見る。獣に引き裂かれたような跡があるが、全て致命

傷を的確に捉えている」

ウルの言ったとおり、死体には全て致命傷となる傷が無数に残っており、どれも鮮明だった。明らかにプロの仕事である。

「なるほど、さすがに最下級殺人鬼じゃ手に負えなかったわけか」

「だろうな。ほとんど秒殺で決つただろう。この分じゃ中級の連中でも手に負えんかも知れないな」

「安心しろ、その辺はもう手は打つてある」

「あれをやるのか？」

「勿論。これは魔界のいわば儀式だからな」

魔界の儀式・・・それは魔界へ足を踏み込んだ者全てに与えられる試練。

ここ魔界では殺人鬼のレベルも大きく分けて4段階に別れている。

まず最下級レベルは魔界で最も地位の低いレベルで、魔界に足を踏み込んで日の浅い殺人鬼たちがこの階級である。

その上は中級レベル。このレベルになると規定があり、魔界に踏み込んで2年以上の者で

尚且つここ魔界で5人以上の殺人鬼を殺した経験を持つ者たちがこのレベルにランクされる。

そしてその上が上級レベル。このランクは魔界に入つた年数は関係ないが

魔界で10人以上の殺人鬼を殺した者だけが得られるランクだ。

更にその上に行くのが最上級レベル。魔界に8年以上生息する人間で

尚且つ一度に10人以上の殺人鬼を相手に出来る者がこのランクに位置する。

大きく分けるとこの4段階に別れる。

そしてそんな最上級レベルの更に上に行くのがS級レベルである。

このS級レベルは魔界に10年以上生息する人間で、一度に15人以上の人間を瞬殺する事が出来

尚且つ武器や弾薬、そして格闘や武術をもマスターするものだけが得られるレベルだ。

このS級レベルになると、S級以下のレベルを持つ者たちを自分の仲間にする事が許されている。

今のところ魔界ではウル、紅、魔矢の3人のみがこのS級レベルを取得している。

つまり事実上、魔界で高レベルにランクしているのはNo.1のウル、No.2の紅、No.3の魔矢だけなのだ。

そして魔界で行なわれる新参者への儀式とは「祝いの宴」である。

システムは至って簡単。魔界に新参者が入ってきた際、最上級以上の殺人鬼たちが

新参者たちに刺客を差し向けるというシステムである。

差し向ける殺人鬼たちのレベルは、撰ぶ側の好みによって変化するが一般的には最下級か中級を多く利用する。人数も2、3人と割りと少数だ。

今回、新参者たちであるパイフー、鬼武たちの刺客は魔矢が担当する事になっている。

「この有様を見た限りでは連中に最下級と中級では手に負えないだろう。」

そうだろうと思って予めそれ以上の階級10人を差し向けておいた」

魔矢が静かに言った。

「振り分けはどうなっただ？」

「上級レベルの殺人鬼が9人。そして最上級の殺人鬼が1人だ。これだけの数が居れば、例え撃退できても無傷では済まないだろう」

「そこに「等々力 薫」、「鮫島 聖」とかう連中が加われば、なんとか倒せるだろうな。最も手を組むかどうかは連中が決める事だが」

「そうだな、パイフーと鬼武の二人だけでは少々苦しいだろう」

「さてさて、連中のお手並み拝見と行こうか。ひょっとしたらNo.4はあの連中になるかも知れないからな」

「フッフ、さすがに俺までは倒せないだろうって?」

魔矢はニヤリと笑いながら言った。

「万が一お前がやられるような事があれば俺や紅も動く。まあそもそもNo.4に届くかどうか不明からんけどな」

「いずれにしてもどうなるかが楽しみだ」

「もう刺客は差し向けたのか?」

「ああ、今頃探し回っているだろう。時期始まるさ、祝いの宴がな」

「じゃあ特等席を取りに行こうぜ」

「そうだな」

二人は闇の中へと消えて行った。

魔界炎上……いよいよその火蓋が切って降ろされる……。

END

#### 4 　もう一つの出会い

魔界の郊外にある古のダウントウン。そのダウントウンの様子を一望できる高台で

ウルと魔矢は望遠鏡とある二人組みを眺めていた。

二人の視線の先にいるのは、想像以上の強さを誇るパイパーと鬼武の姿だった。

10人もの殺人鬼たちを送り込んだのは決して間違いではなかった。何故なら望遠鏡の先では既に7人もの殺人鬼たちがあっさりと殺され、無惨な姿となっているからだ。

「この分じゃヨシミと洋一も時間の問題だな」

望遠鏡から目を話さずに魔矢が言った。

「残りの一人は誰を送ったんだ？」

「ミスター」だ」

ウルの問い掛けに魔矢が静かに答えた。

「ほう、しを向かわせたのか。これは面白くなりそうだな」

「ああ。他の殺人鬼たちは楽に始末できても、しまでそう行くとはいえんからな」

魔矢がそう言った瞬間、視線の先にあった建物から巨大な炎が上がった。

「ヨシミと洋一はオダブツだな」

ウルがにやけながらそう言った。

「ま、あいつらじゃ無理だろうな。だが、果たしてしまでそう上手く行くかな」

魔矢の目は真剣さを保っている。

「最上級レベルでもしはその中級に位置する殺人鬼。連中がどうやって戦つか見物だ」

ウルも楽しそうに望遠鏡で眺めている。

「さて、いよいよしのお出ましだぞ」

鮫島 聖が魔界に降り立ち、ダウントウンでしと出会う30分前、  
鮫島 聖はある場所で奇妙な少年と出会っていた。

「お兄さん ずいぶん物騒な刀持ってるね」

「ああ？」

振り返るとそこにはまだあどけない少年がニコニコ笑いながら立っていた。

目鼻立ちの整った青年だが、見ようによつては少年のようにも見える。

「なにか用か？小僧」

「サメジマ セイさん……だよね？」

その瞬間、鮫島 聖の身体に緊張が走った。彼はたった今魔界に下りたばかりで、誰とも会っていない。

にも関わらず自分の名前を知っているとはどう言う事なのか……

「小僧、なんで俺の名前を知ってやがるんだ？」

「お兄さんだけじゃないよ。そっちの刀さんも知ってる。妖魔刀・鬼三さんでしょ？」

「バカな！何故知っている！？」

今度は鬼三が喋った。

「お兄さんたちの事はいろいろと調べさせてもらったよ。勿論、あつちで戦っているパイパー・鬼武の事も知っているけどね。」

でもパイパーと鬼武にはウルと魔矢が興味を持ったみたいでさ。僕一人になつちやって退屈しているんだ」

「ウルに魔矢だとっ！じゃ、じゃあお前はまさか……」

鮫島 聖の額から嫌な汗が流れた。その同様は妖魔刀・鬼三にも伝わっている。

「自己紹介が遅れたね。僕の名前は矢吹 紅。この魔界でNo.2の人間さ。通称【処刑の紅】」

そんなバカな……鮫島 聖の脳裏にそんな言葉が浮かんだ。

魔界に降り立って早々、まさかその魔界のNo.2が自分の目の前に現れようとは、誰が想像するだろう。

(じよ、「冗談じゃないぜ・・・いきなり紅かよ・・・」)

鮫島 聖の思想が大きく乱れた。

「フフン まあまあそう警戒しないでよ。別に殺しにきたわけじゃないからさ。僕はお兄さんの持っている刀に興味があるんだ」

「鬼三に？」

「うん。妖魔刀・鬼三・・・小ぶりな刀身だけど、名の由来の通り、鬼を三匹、縦に重ねて一気に斬りおとすことが出来る。

その切れ味は、最高にして、残忍、かつ、慈悲深い。鬼三に斬られし犠牲者は、腕が、脚が、胴体が吹き飛ぶ様を見て

初めて斬られた事実を、思い知らされる。そんな、高貴で野蛮な鬼三は、まさに【鬼】を、【魔】を切り裂くべくして、生まれた。

徳川家光の時代に創られし、無敵の切れ味を誇る古い刀・・・ですよ？」

「若いのに良く知ってるな」

鬼三が答えた。

「うん。勉強したからね」

「そうだとしたら何だというんだ？」

今度は鮫島 聖が言った。

「実は僕も刀が好きなんだ。でね、僕と手合わせ願えないかな？と思ってるんだよね」

「手合わせだど？お前刀なんて持ってないじゃないか」

「あるんだな、これが。ジャジャーン！」

そう言うところ紅はどこに隠していたのか一本の刀を取り出した。

「さて問題です。この刀の名前はなんでしょう？」

「あれは・・・まさか！！」

「どうした、鬼三」

「フフン、分かるかな」

紅の取り出した刀を見て、鬼三の様子が変わった。



「聖よ、まずいことになったぞ」

「なにがだ？」

「あの小僧が持っている刀。あれは伝説の名刀【天叢雲剣】（あめのむらくもつるぎ）じゃ！！」

「天叢雲剣だとっ！！！」

「ピンポーン、さすが刀さんだね」

紅は相変わらずニコニコしている。

鬼三は静かに語り始めた。

「【天叢雲剣】……、三種の神器の一つでくさなぎのつるぎ・くさなぎのけんつむが草薙剣・都牟刈の大刀・八重垣剣とも称される

スサノオ（須佐之男命）が出雲国で倒したヤマタノオロチ（八岐大蛇、八俣遠呂智）の尾から出てきた太刀で、天叢雲という名前は、ヤマタノオロチの頭上に常に叢雲が掛かっていたためとしている。

その破壊力は神をも砕く威力と称され、後に出てくる【正宗】【菊一文字則宗】、更には聖剣エクスカリバーをも凌ぐと言われる

伝説の名刀だ」

「そんなバカな、どうしてあんな刀をコイツが……」

「まあいろいろあつてね。廻り廻って僕が手にしているわけさ。どう？僕と戦ってみない？交えるだけで良いから」

「どうする？鬼三」

「良く考えて行動する事だ。あいつは殺さないと言っていた。ここですの機嫌を損ねるのは賢いやり方ではない」

「やるしかないのか……」

鯨島 聖は正直怯えていた。相手が悪すぎる。だがしかし、その一方で刀を持つ者として「戦ってみたい」と言う  
武士の信念のようなものが芽生えているのも事実だった。

天叢雲剣である以上、相手にとって不足は無い。

「そうだ、お兄さんたちって茨木童子のこと探しているんでしょ？」

「そ、そんなことまで知っているのか！？」

「まあね。僕、茨木童子に関する情報ちよつとだけ知ってるんだけ

どな〜例えばどの辺にいますとかあ〜」

「お前とやり合えば教えてくれる・・・と言うわけか」

「ご名答。お兄さん頭良いね」

「良いだろう。我が名刀【鬼三】の破壊力、とくと味わうが良い」

「フフン、そうこなくっちゃね」

鮫島 聖は妖魔刀・鬼三を構え、紅は天叢雲剣を構えた。

「いざ、尋常に・・・」

「勝負!？」

それはまさに一瞬だった。互いの刀がわずかな衝撃と共に交じり合い、中央で火花を散らす。

二人の姿は一直線上に平行移動し、やがて止まった。

「うへへ、さすが鬼三。こりや痛いや」

紅の右手、手の甲がバツサリと裂け、血が流れていた。

だがしかし、負傷したのは紅だけではない。

「天叢雲剣・・・凄まじい破壊力・・・だ・・・」

致命傷には至らなかったが、鮫島 聖の左脇腹に細長い亀裂が入り、血が流れた。

両者痛み分けである。

「ありがとう、いやあ〜斬られるのって痛いよね。でも楽しかった」

「楽しいとは言えないが、正直ここまでの威力とは思わなかった」

鮫島 聖の額から流れる汗は止まらない。

「そうそう、茨木童子のことだけど、僕の知っている情報によると茨木童子は魔界の鍋蓋と言う場所に良く現れるって話だよ」

「魔界の鍋蓋？」

「そう。文字通り魔界の蓋の部分。蓋の下は地獄。ここ魔界の最北端にある魔界と地獄を繋ぐ境界地の事さ」

「魔界と地獄を繋ぐ境界地・・・そこに茨木童子が・・・」

「まああくまで情報だから正確さには欠けるけどね。んじゃ、ありがとう。また今度遊んでね」

そう言っていると紅は片手を振って去って行った。

魔界と地獄を繋ぐ境界地、茨木童子、そして矢吹 紅……。

宿敵が増えそうな予感に駆られながらも、鮫島 聖は魔界の鍋蓋へと向かった……。

END

## 5 音羽 魔矢編

昨日の深夜から降り続いている雨が止む気配は無かった。

所々に出来た水溜りに雨が水溜りを作って群れているのを見ると、魔矢の身体は唸りをあげるように痛み出した。

「こつも雨が續くと疼くな」

左手で右肩を擦りながら、そこに体温が通っていない事を確認する。今や金属で出来た魔矢の右腕は雨に弱い。いくら錆びない特殊な金属を使っているとは言え、雨の日は古傷が痛むのだ。

目的の店に辿り着くと、魔矢は店のドアを開け中に入った。

「いらつしゃい。あら？傘持ってなかったの？」

「ああ。そのうち止むだろうと思ってね」

「昨日の深夜から降り続いているのに、いつか止むだろうって？」

「変かな？」

「そんなこと無いけど、これ使って」

そう言う店のマスターと思われる女は魔矢にバスタオルを投げ渡した。

「すまんな」

魔矢は受け取ったタオルで身体を拭った。おかげで水分は拭い取る事ができた。だが血の臭いだけは拭えるものではない。

「また殺つたのね」

女は魔矢を見ずに言った。

「これが仕事だからな」

「ウルと紅は元気？相変わらずニコニコしながら殺ってるんだろうけど」

「紅はそんな感じだが、ウルはそうでもないさ。ヤツは無愛想で有名だからな」

「座って。いつものヤツで良い？」

「ああ」

魔矢はそう言うとかウンターの席に腰を降ろした。

女の名前は「由佳」ここ魔界でバーを経営する数少ない女だ。

魔界には女の殺人鬼も数名存在するが、由佳は殺人鬼ではなく、一般人である。

だが由佳は決して正常な人間とも言えない。

「あんな光景」を目の当たりにして平然としていた女だ。やはりどこか狂っているのだろう。

懐かしさが漂う中、魔矢は由佳と出会った日の事を思い出した。

それは今から9年前、まだ魔矢が魔界で最上級レベルだった頃に由佳と出会った。

当時、まだウルと親密な関係ではなかった魔矢は「神殺し」の異名を取るウルと殺り合った。

無論、神殺しの肩書きは尋常ではなく、明らかに魔矢は圧されていた。

ほとんどダメージを与える事さえ出来ず、どうにか攻撃だけを防いでたのだが、それでも殺されるのは時間の問題だった。

魔矢は自分が殺られるとは思わなかった。不思議な感触だがウルは自分を殺さないだろうという確証を感じ取っていたのだ。

だがその戦いの最中、ウルではない別の殺人鬼たちが魔矢を狙い始めていたのだ。

殺人鬼たちはウルと戦った事で弱った魔矢を殺す計画を密かに練っていたようだ。

魔矢が次の攻撃に備え、裏路地に差し掛かったとき、無数の殺人鬼たちが魔矢の前に現れ襲い掛かった。

余計なダメージを恐れた魔矢は一気に勝負を決めるつもりだった。金属と化した魔矢の右腕から様々な武器が火を噴いた瞬間、路地から由佳が現れたのだ。

「危ない！！」

そう思ったときには既に遅かった。

殺人鬼へと向けて放った武器の一つが由佳の腹部に命中、己の血と殺人鬼たちの返り血で由佳は全身血塗れになった。

殺人鬼たちは全員死亡。だが由佳だけはまだ息が合った。

魔矢は由佳に駆け寄り、とりえずの応急処置を施した。

「刺されると痛いよね」

全身血塗れになりながらも、由佳は笑いながらそう答えた。

そんな光景を見ていたウルは魔矢にこう言った。

「殺人鬼が人を助ける……。奇妙な事があるもんだな」

ウルも何かしら感じるものがあつたのだろう。それだけ言い残し去って行った。

由佳の部屋で魔矢は看病を続けた。元々魔矢は関係の無い人間を巻き込んだり、無益な殺生を好むような男ではない。

何の罪もない由佳に攻撃を与えてしまった事に深い罪悪感を感じていた。

だが眠りから覚めた由佳は、魔矢の罪悪感とはかけ離れた事を口にしたのだ。

「刺されたときの痛みがわかって良かったわ」

その日以来、由佳と魔矢はどちらとも無く理解し合い、その関係は今日まで続いている。

「貴方のような人間がどうして魔界に？」

いつぞやそんなことを聞かれたのを覚えている。

「それにその右腕、普通じゃないよね」

その質問に魔矢はこう答えた。

「こう見えても家族がいたんだ。妻と子供。それはどこにでも有りそつな家庭だつたけど、幸せだつた。

だけど警視總監と言う仕事上、恨まれる事もあつてね。たまたま俺が関わった事件の犯人に強い恨みを買ったのさ」

「それだけで魔界へ……。ってわけじゃないんでしょ？」

「殺されたのさ」

「殺された？」

「ああ、その犯人に家族をね」

「……………」

「俺は警視總監と言う職務に就きながら家族を守れなかった。家に駆けつけたときには既に遅かった。

その後どうにかして犯人を捕まえたが、許せなくてね。警視總監でありながらヤツを射殺した。

この腕はその償いってやつさ。魔界に入る前、知り合いの精密士に腕を改造させた」

そう言っていると魔矢は右腕を由佳に見せた。

魔矢の右肩は付け根から全て剥ぎ取られており、無数の武器が隠せるいわば「倉庫」のようなものだった。

その金属は特殊なオリハルコンと言う金属で出来ており、自らの意志で動かす事が可能だった。

「オリハルコン・オロチ、それがコイツの名前さ」

オロチには様々な銃器がセットされている。小型の自動小銃からショットガン。マグナム、小型バズーカ。

ミサイル、ナイフ、鎌、斧、鉈……ありとあらゆる武器が納まっている。

「貴方が鬼眼きがんと呼ばれる由縁が分かったわ。銃の腕前は魔界一だものね」

どんなに遠く離れた場所からも明確に標的を射抜く眼。それはまさに鬼さえも射抜く眼と呼ばれ

殺人鬼たちの間で、魔矢は「鬼眼の魔矢」と呼ばれ恐れられている。

「はい、これ」

我に返った魔矢の前にグラスに入ったマティーニが置かれた。由佳が微笑ながらこっちを見ていた。

「ありがとう」

「そう言えばあの話知ってる？」

「あの話？それってパイフーと鬼武の事かい？」

「いえ、違うわ」

魔矢はウルと紅、そして由佳にはパイフーと鬼武の話をしている。そのため彼女がそれを知っていてもおかしくない。

「蘇ったらしい・・・そんな噂を聞いたんだけど」

「蘇った・・・まさか！？・・・」

魔矢の額から冷たい汗が流れ落ちた。

「蘇った」この一言で魔矢には一つ心当たりが合った。もはや二度と思い出したくない黒い過去である。

しかしその黒い過去は魔矢だけに留まらない。それはウルや紅にも、いや魔界全体にも同様の事が言えるだろう。

この話を聞いたらすがのウルも表情を変えるだろう・・・。

「バカなっ！ヤツが蘇ったと言うのか」

「あくまで噂よ。姿をみた連中はまだ誰もいないわ」

「有り得ない・・・あの時確かに抹殺したはずだ。調べる必要が有りそうだ」

「大丈夫よ、きっと。噂だもの」

「君も知っているだろう。ヤツを抹殺するのに俺たちがどれほど苦労したか。」

俺と紅は全治半年の半ば半殺し状態。あのウルですら重症を負わされた相手だ。いくら噂と言っても鵜呑みに出来ん」

そう言くと魔矢はマティーニを一気に飲み干し、店を出た。

「何処行くの！？」

「ヤツの事、調べてみる。ウルと紅にはまだ言うなよ。何か分かったら俺から話す」

降りしきる雨も気にせず、魔矢は飛び出して行った。

「もし、万が一ヤツが蘇っていたとしたら、魔界は・・・」

魔矢の脳裏に浮かんだ「ヤツ」の姿。



その姿は魔界全土を覆い尽くすかのとき勢いで大きくなりつつあった・・・。

E  
N  
D

## 6 新たな刺客、聖魔剣士

都内某所にある関東地方最大の指定暴力団「山村組」の本拠地では、朝からずつと銃声と悲鳴が鳴り響いていた。

「ぎゃああああっ!!」

「なんなんだよ、コイツはっ!!」

「うぎゃああっ!!」

組員たちは自分たちに襲い掛かる男に発砲を続けた。だが銃弾は尽く外れ、一発も当てる事ができなかった。

それだけならまだ良かった。当たらないだけで済むのなら死ぬ事はないのだから。

その男は発砲した瞬間に相手に懷に飛び込み、持っていた刀のような剣で斬り捌いて行く。

その度に悲痛なまでの悲鳴と断末魔が上がり、切り刻まれた部分が切断され鮮血が飛び散った。

「なんや、こんなもんかいな山村組っちゅうのは」

男は慣れた手つきで剣を振り下ろし、組員最後の一人となった男をバラバラに切り裂いた。

「ひいっ!!」

「みいつけた!組長はんやな?」

「や、やめろ、来るんじゃない!!」

「来るな言われても無理やな。ワイはあんさんを殺しに来たんや」  
「来るな!!」

組長は男目掛けて発砲した。しかし弾丸が彼に当たる事はなかった。  
「山村組もこんなもんかいな。けつたいな名前の割にはごつつ弱いわ」

「ぐはあっ!!」

男は組長の首を掴み、そのまま持ち上げた。巨漢の組長を軽々と持ち上げている。だがその手に力を込める事はしなかった。

組長は自分を持ち上げる男を見た。

全身黒い服を纏った金髪の男。身長は180センチくらいはあるだろうが、目鼻立ちの整った顔をしている。

顔立ちから察するに年齢は20代中頃だろう。

まさかこんな幼い顔をした男に自らの組を落とされるとは想像もしていなかった。

男の後ろには無惨にも惨殺された有に200を超える組員のバラバラ死体がそこら中に転がっている。

組長は思わず息を飲んだ。数秒後には自分も同じ姿になるのだから。

「お、お前は一体、誰なんだ・・・」

「ワイか？これから死ぬヤツに名乗っても意味あらへんと思うが、まあええ。教えたるわ。」

ワイの名前は焰ほむら 羅刹らせつちいとくらい聞いたことあるやろ？」

「羅刹！！羅刹だっ！ま、まさか、関西地区最強の暴力団「野山組」を一夜にして壊滅させたあの・・・」

「ハハハ！やつぱ知つとるな。そうその羅刹や」

「ど、どうしてあんたがこんな事を・・・」

「悪霊退治や。お前らみたいながつつ悪い連中を始末するのがワイの仕事や。警察なんて当てに出来へん。」

あの連中はしょっぱいて満足しているらしいが、ワイはそれじゃあかんねん。殺さな気が済まんのや」

関西地方で最強と謳われていた野山組の壊滅は事実上、暴力団の消滅を意味している。

羅刹は現場に和紙に「羅刹」と書いた紙を残して去っている事が知られており、警察でも羅刹の行方を捜しているのだ。

「これで関西と関東を制圧したわけや。ワイに適う者なんておらん。せやからワイが支配者になるんや」

「あ、甘い・・・」

「なんやとっ！」

「お、俺はお前よりも数倍強い連中がウヨウヨいる場所を知ってい

るぞ」

「ほほう、ワイより強いやつがこの世におるんかいな」

「いる・・・確実に・・・」

「んで、そこは何処やねん？」

「ま、魔界だ・・・」

「魔界やとつ！アホか！ワイは死んでないで」

「この裏社会の更に裏側、そしてその最深部に魔界と呼ばれる邪悪な世界がある」

「嘘やない・・・みたいやな」

羅刹は組長の目が笑っていないことを瞬時に悟った。むしろ魔界と言う言葉に恐怖している感もある。

「た、確かにお前は強いだろう。だがそれはあくまでこの裏社会でに過ぎん。魔界に行ったらお前など小物に過ぎんわ！」

「ほほう、ごつつ興味あるな。んで？誰がワイより強いって？」

「神殺しのウル・・・」

「神殺し・・・？・・・」

「いくらお前が強くてもウルには勝てん。ウルは魔界の頂点に君臨する邪悪なる神だ」

「そりやええわ。神殺しのウルか。ええねえね、そういう話、めっちゃ燃えるわー！」

「バカなヤツだ、行ってそして殺されて来い！お前など適う相手ではない・・・がああああつ！！」

羅刹は持っていた剣を組長に刺した。

「余計な事は言わんでええねん。しかしええこと聞いたで、魔界かへえ」

「魔界は・・・裏社会とは比べ物にならん極悪さ・・・か、覚悟するんだな」

「ケケケ！！神殺しのウルか。んじゃ、そのウルを殺ればワイが支配者やー！！」

「ぐがああああつ！！」

「さて、そろそろ殺しにも飽きたさかい。死んでもらうで」

羅刹はそういつと持っていた剣を持ち上げた。

「冥土の土産に教えてやるわ。この剣は聖魔刀と言ってな、西洋の聖なる剣エクスカリバーと

日本の魔剣、草薙の剣の両方を併せ持つ聖なる魔剣や。お前も他の連中と同じ姿になってもらうで!!」

羅刹は聖魔刀を振り上げ、組長の口に刺し込み、そのまま天高く押し上げた。

「ぐががあああつ!!」

そして次の瞬間、組長の首が同体から離れた。

「人呼んで聖魔剣士。ワイに勝てる人間などこの世におらへんのや」山村組の本拠地から銃声と悲鳴が止んだ。

「魔界か・・・ケケケ・・・神殺しのウル。ワイがその首取ったる!!」

この日、都内某所、山村組本拠地で、組長を含めた組員、合計201人の惨殺死体が発見された。

どの死体のバラバラに切断されており、警察当局では身元判明まで少なくとも半年は掛かる見込みである事を発表した。

尚、殺害現場の一角には白い和紙に「羅刹」と書かれた紙が見つかった事から

数日前に起こった関西地区の指定暴力団組員惨殺事件の犯人と同一人物である可能性が極めて高いと判明した。

しかし、関西地区で犠牲となった178名と、今回の犠牲者201人、合計379人を

たった一人の人間が殺したという前例は無く、ギネスブックに名を連ねる世界史上始まって以来の大残虐と任命された。

聖魔剣士 羅刹・・・新たな敵が今、魔界に降り立つ。

E  
N  
D

## 7 すべてを無へ

魔界最南端、忘れられた孤島「煉獄」

魔界の中央部から南へ離れる事およそ7800km。

「血の池地獄」と呼ばれる小さな池を渡り、「絶海」と言う巨大な大海原の最果てで「煉獄」は静かに浮かんでいる。

島の面積は東京23区ほどの広さを誇り、豊富な自然に恵まれている。

だが文字通り島であり、魔界の都市部から離れている事も手伝って、この島に生息する殺人鬼は誰一人いない。

それどころか生物の類は一切存在しないのだ。

それには大きな理由があった。

この島の北部にそびえたつ「煉獄山」は兼ねてより火山活動が活発な山脈で、常にマグマが島全土に流れている状況である。

高熱のマグマによって溶かされた土地には塵一つ残らず、全て焼き尽くされてしまい

後に残るのは溶岩石くらいなものだ。動物や小鳥などが必要とする虫なども誕生しない。

水は全て海水のため、存在する生物といえばバクテリアやプランクトンなどの微生物のみだ。

ましてや人間が生きられる環境ではない。

そんな静かで忘れられた島「煉獄」で、ある変化が起こっていた。

この島に生物が生きられない理由はもう一つある。

この煉獄は島の端から端まで「封印布」と呼ばれる布で覆われている。

それはまるで何かを封印した後のような形跡があり、それに恐れをなして人が住むことを拒絶しているのである。

その封印布は7年前までは無かった。

そう、「あの出来事」は7年前に起こったのだ。

そしてこの煉獄には「あれ」が封印されている。

煉獄山火口の奥深くで「それ」は確実に再生を始めていた。

摂氏数千度を誇るマグマの中で、身を寄せ合うように蘇生を繰り返している。

散りばめられた肉片を探すように、この世に存在する全ての憎しみが集結し始めている。

そしてその憎しみこそが「それ」を形成する最も重要な要素だった。憎しみ、怒気、殺意、腐敗・・・凄まじいまでの負の感情が流れるマグマの中を傍若無人に行き来しているのが分かる。

やがてその負の感情は人間の形となり、醜い醜態を作り上げていく。基盤となる同体が形成されると、それなりの思考回路が芽生え、考えるという行為が可能となる。

「それ」の脳裏に浮かんだのは真っ暗な闇と、自分を封じ込めた三人の男の姿だった。

その中でも特に長身で無表情の男だけは鮮明に記憶している。

「それ」はこの男によつてこんな場所に封印されたのだ。

その男は「神殺し」と言った。そう、「神殺しのウル」である。

その存在そのものが憎しみだけである「それ」にとって、まさか自分が敗北する姿など想像もしていなかった。

しかし現に「それ」はこの男たちの手によつて封じられたのだ。

そう思うと元からある憎しみが更に加速する感触を覚え、興奮が抑えられない。

そして「それ」は自らの意志を持ち始め、やがて名前を考える。

魔界で壮絶な死を遂げた人々の憎しみが集結した姿。それが彼の姿であった。

そのため彼の姿はとても人間とは思えないほど醜悪だ。

苦痛に歪んだ無数の顔、夥しい数の眼球と口。腐敗の進んだ肉体に



歪な手足。

そう、それは魔界でウルたちに殺された何千と言う殺人鬼たちの集合体だった。

彼は煮えたぎるマグマの中から起き上がった。

考える思考も、正義も悪も、全て感じる事のない破壊の神。

ただただ自分たちを死に追いやったウルたちに復讐を誓う悪魔の姿。燃え盛るマグマの炎が、彼に再び血と殺戮の衝動を宿した。

「我が名はゲノム……全てを無に返し者……」

END

## 8 血を吸う聖魔刀。刀に魅せられた人斬りの素顔

永久の無「ゲノム」がこの世に蘇った頃、一人の男が魔界に到着していた。

男は腰に聖魔刀と呼ばれる邪悪な刀を携えており、黒い服装を装っている。

黒いジャケットの背中には「聖魔」と書かれた刺繍が施されており、通常の人間でないことは明らかだった。

「まったく、情報屋から魔界への道を書かせたはええけど、こんなごつつ遠いとは思わなかったで」

男の名は「羅刹」つい今しがた魔界へ辿り着いた新参者である。

「それにしても物騒な世界やな」死体がゴロゴロあるやないか」

羅刹の歩いている道には殺人鬼によって殺された人間の死体が山のように転がっていた。

無論、それが蘇った「ゲノム」の仕業である事は知る善しも無いが……。

「あかん、腹減り過ぎて死にそうやわ……」

羅刹が向かっている先は魔界の中心部。ウルを始め、紅や魔矢、鬼武やパイパー、鮫島たちが生息する地区である。

勿論、当の羅刹は右も左も分からない状況なのだが、殺人鬼が殺人鬼を呼ぶのだろう。

羅刹の足は自然と中心部へ向かっているのである。

それでも羅刹は自らに忍び寄る狂気には気付いていた。先ほどから誰かに付けられている気配を感じている。

それも一人や二人ではない。数にすれば数十単位の数になるだろう。

「ええ加減出てきたらどうや？おるのは分かってるで」

羅刹がそう言うと、有に30を越す殺人鬼たちが至る所から現れた。「なんや偉い歡迎ぶりやな。そないワイが来たの嬉しいんか？」

「馬鹿を言つな！お前、誰の許可を得て魔界に来た！？」

「入るのに許可なんて要るんか？面倒な世界やな」ワイのスマイルで十分やろ」

そう言うのと羅刹は冗談交じりでニツコリと微笑んだ。

「この中心部へ続く通称「死神通り」は我らが主、魔矢様が仕切っているエリアだ。勝手に通る事は許さん」

「魔矢？ああ、そう言えば情報屋から聞いた名前やな」あかん、ど忘れしてもった」

「魔矢様はここ魔界でNo.3の座に着くお方だ」

「ああ、そんなんゆうてたな。よう知らんけど」

「貴様！！」

一人の殺人鬼がそう吠ええると、他の殺人鬼たちは持っていた武器を取り出し、身構えた。

「ほほう、ワイと遊ぼう言うんか、ええよ。ちゃんと手加減したるから」

「小僧……かれ！！」

一番最初に飛び掛ったのは10人。どの殺人鬼も羅刹の上空に舞い上がり、上から攻撃を仕掛けようと飛び上がる。

しかし、聖魔刀を操る羅刹に取って、上空は自らが支配する絶対的な領域である。

「聖魔刀……暫！？」

「ぐはああっ！！」

「ぎゃあああっ！！」

羅刹が刀を振り上げた瞬間、刃が奇妙に変化し、上空にいた殺人鬼10人に斬りかかった。わずか一瞬で10名の首が宙を舞った。

「い、今のは……」

「聖魔刀は便利な刀や。地上からの攻撃、上空からの攻撃、真正面、背後、斜め上、下。」

その角度によって自らの意志で変化する頭のええ刀や」

多勢に無勢……そんな言葉など当てはまらない状況がそこにあっ

た。

「な、なんなんだ、お前は・・・」

「ケケケ、神殺しのウル言うやつがおるんやろ？その首取りに来たんや」

「バ、バカな！！ウ、ウル様の首を・・・そんなこと出来るわけが・・・」

「ああもう面倒や、死ね」

「えっ！」

「うぎゃああああああああつ！！！！」

目の前で閃光が走った瞬間、聖魔刀はまたもやその姿を変え、生き残っていた20人に襲い掛かった。

刀は津波のようにうねり、殺人鬼たちの身体を歪曲しながら切断して行った。

30人の殺人鬼たちを殺すのに要した時間はわずか40秒だった。

「あかん！腹減つてると手元が鈍るわ！こりやはよ何か食べんとやバイで」

殺した殺人鬼たちなど気にする様子も無く、羅刹はひたすら歩き、一軒のバーらしき店を見つけた。

店の前には「本日のおすすめメニュー北京ダック」と書かれている。「あつたあつた！良さげな店やんか！！大人な雰囲気さええね〜インテリジェンスなワイにピッタリやん！」

羅刹、実にユニークな男である。

「邪魔するでえ〜！」

「いらつしやいませ」

中から若い女の声が響いた。カウンターの裏に日本風な美女が立っており、羅刹を迎えた。

「うひゃああつ！めっちゃ好みや！！可愛ええやんか！なあなあ、名前なんて言うん？」

「えっ！あ、あのう・・・由佳と言いますけど」

「由佳ちゃん！！ええ名前やんか！」

羅刹はそう言つと身を乗り出し、由佳の手を握った。

「ええな〜ええな〜若い子は。お肌ツルツルや〜」

「あ、あのう、困るんですけど」(^^;)

どうやらこの羅刹と言つ男、相当な女好きのようである。

「由佳ちゃん、何歳？二十歳くらい？今度ワイとデートせえへん？

絶対損はさせへんよ」

空腹は一体どこへ行つたやら……。

「え、えつと……歳は21歳で、そのデートはちよつと……」

「ええ〜なんでやねん〜彼氏おるん？」

「まだそう言つ關係じゃないですけど、そうなりそんな人が居るには……」

「どこおる！？昼間つから彼女に寂しい思いさす甲斐性なしの男はどこにおる！！」

「ええつと、実は貴方の後ろに……」

「えっ？なんやて」

羅刹が後ろを振り返つたその時だった。

「おわっ！！」

突然目の前で巨大な光が走った。それが銃弾である事はすぐに理解できた。

「甲斐性なしで悪かつたな」

そこには魔矢が立っていた。

「なにすんねん！ワレ！死ぬとこやつたぞ！！」

「当たり前だ。殺す気で撃つたんだからな」

「なんやと、この金属男！！」

羅刹は魔矢のオリハルコン・オロチを見てそう言った。

「金属男……？……フフフ……」

「何笑つてんだ、由佳」

「金属男つて、なんか表現がおかしくつて」

「へへん、笑ってくれたで。ワイの勝ちやな」

そついう問題ではないと思うのだが……。

「死神通りで俺の手下を殺ったのはお前だな、焰 羅刹」

コイツは自分を知っている。しかし羅刹はその事には驚かなかった。何故ならこの男こそが魔界No.3の魔矢だと分かったからである。

「へえーワイの事知つとるんか。お前が魔矢やな？」

「一応な。山村組惨殺事件に関西の野山組殺害事件の犯人は貴様だろ、羅刹」

「エライ詳しいやんけ。お前何者や？」

「それでも警視總監と言う仕事をしていてな。貴様の起こした事件のせいで、俺の苦労が増えちまった。

ギネスブックに名を連ねる犯罪を犯したのは結構だが、あまり魔界で良い気になるなよ」

「フン！ワイはNo.3なんて興味無いんや。神殺しのウルさえ殺れればそれでええねん」

「貴様がウルを？・・・身の程を知らんようだな」

「確かめてみるか？お前のその身体で」

「後悔するぞ、鬼眼の魔矢を敵に回したことをな」

「上等や！！」

「あのう、やるなら外でやってね。店壊されちゃ商売上がったりだから」

聖魔剣士vs鬼眼

いよいよその戦に灯がともる・・・。

END

## 9 鉄麗編

一仕事終えたウルは自分たちのアジトのあるビルの前に立つとそのまましばらく立ち尽くし、周囲を眺めた。

路肩に転がっている死体の数が日に日に増えているような気がする。もともと魔界でNo.1の実力を誇り、同じ殺人鬼たちから「神殺し」と恐れられるほどの人物である

別に死体が幾つ転がっていようと動じるわけでもないのだが最近、魔界の様子が変わってきているように思える。

「また始まるのか……」

ウルは誰にとっても無くそう呟くと、エレベーターに乗り込んだ。ウルには分かっていた。魔界の空気が変化している事も去ることながら

その根源が誰にあるのか、その詳細まで分かっている。

魔矢は自分や紅に隠しているようだが、「あれ」が蘇った事は、他の誰よりもウルが分かっている。

「あれ」とは……即ち「ゲノム」の事である。

ウルにゲノムの存在が分からないはずがない。何故ならゲノムの基盤となった人物はウルの母親なのだ。

そしてその母親を手にしたのは、他の誰でもないウル自身。

降りて行くエレベーターの中で、ウルは過去の事を思い出した。

ウルが魔界でNo.1の実力を誇るのには分けがあった。

それは人並み外れた強靱な肉体と強さ以外にも理由があり、その理由こそが母親であるゲノムを抹殺した理由でもある。

何も最初からウルが狂人のような人間だったわけではない。ウルも他の人間と同じように

母親の母体で生命を培い、産まれて来た極普通の人間だったのだ。

だがそれはあくまで「普通に産まれていれば」の話である。

ウル之母親、つまりゲノムの家庭環境は最悪だった。

ウルは決して望まれて産まれた子ではなかった。親の勝手な事情によつて仕方なく産まれた生命だったのだ。

そのため母親と父親、果てには親族たちの激しい賛否両論が日々の生活の中で繰り返され

母親のゲノムは常日頃から親族や夫に対し、激しい憎しみを抱いていた。

「いつか後悔させてやる」「殺してやろうか」

そんな事を思うのはもはや日常茶飯事だったのだ。

母親のゲノムは「不潔」「淫乱」「売春婦」と罵られ、いつしか自分の居場所を見失った。

そして積もりに積もった不平不満は、夫殺害と言う最悪の行為によつて終止符を打ったのである。

その時の光景を、ウルは母親の母体の中で見ていたのだ。

母親がナイフで夫の首を切断し、道端に投げ捨てた光景を……。

仕方なくウルを出産する。その時の母親はそう思っていたのだろう。ウルの方も母体の中で散々母親の憎しみを味わい、もはや正常な男児ではなかった。

ウルが産まれる際、上げたのは産声ではなく悲鳴だったのだ。

「スベテヲハカイスル……」と言う悲痛なまでの断末魔。

出産直後からウルは既に邪悪な存在だったのだ。

母親から発せられた憎しみを一身に受けた小さな殺人鬼。それがウルである。

幼少時から既に人を殺める術を覚えた。

成人になる頃には、自らに害を加えんとする存在を全て抹殺していた。

そしてウルが魔界に入る直前、母親であるゲノムをこの手に掛けた



のだ。

「育ててもらった恩を忘れたのか!!」母親が絶命する際、そう言い放った。

「誰も育ててくれなど頼んでない」そう言い切ったウルは母親の肉体をバラバラに切断したのだった。

「これで済むと思うなよ、親不孝者……いつか、いつかお前を殺してやるからな」

ゲノムはそう言い残し、絶命した……はずだった。

それから数年が過ぎて、魔界でゲノムが蘇った。それが今から7年前の事である。

どういうわけかゲノムはウルたちに殺された魔界の殺人鬼たちの死念をかき集め

世にも恐ろしい姿となって蘇ったのである。

人間とは思えない醜い姿。身体中にいくつも顔があり、手があり足がある。

有に100を超える殺害された殺人鬼たちの眼球と口。

そしてそれに見合った数の脳味噌と心臓。

蘇ったゲノムのターゲットはウルであった。

ウルは仲間の紅、魔矢とともにゲノムの抹殺に打って出た。

しかしゲノムはウルたちが想像していた以上に強靱な強さを誇り、

3人は大怪我を負った。

1週間にも及ぶ激闘の末、ようやくゲノムを魔界最南端、忘れられた孤島「煉獄」に封印。

この激闘によって紅と魔矢は意識不明の重体にまで追い詰められ神殺しと称されたウルでさえ、全治半年と言う重症を負った。

それだけゲノムの力は強大であったということだ。

あの激闘から7年が過ぎた今、ゲノムが再びこの魔界に蘇りつつある。

最近魔界で起こっている不吉な現象は、ゲノム復活を意味する何よりの提示である。

あれから7年の歳月が過ぎ、かき集める殺人鬼たちの死念は前回よりも更に協力であろうことが予想される。

あの時はどうにか犠牲者を出さずに済んだ。だが今回までそう上手く行くとは限らない。

最近魔界に降り立った鬼武、パイフーの両名に加え、まだ明確な素性が掴めない鮫島 聖の存在。そして焰 羅刹。

この3名に自分たちを加え今現在、合計7人の強者が揃っている事になる。

ウルは誰とも組むつもりは毛頭ないが、計画的な魔矢の頭の中にはこの7名が徒党を組むと言うプランが既に存在するだろう。

でなければゲノムは倒せない・・・そう思っているからこそ、魔矢はゲノムが蘇った事をウルに直接伝えないのだ。

言ったところでウルがそのプランに賛同するとは考えられない。ウルには魔矢の計画などお見通しだった。

だがしかし、魔矢の着眼点は適格だ。更に強さを増したことを考えると

前回のようにウル、紅、魔矢の3人のみで食い止められる可能性は極めて低いのだ。

ゲノムはそんな甘い相手ではない。こちらの想像を遥かに超える強さを誇る。

それと同時に、犠牲者が出ないと言う保証もないのだ。

今は一人でも多くの人手がいる。しかも強者と言う絶対的な条件を満たしている人間の手が。

今になってどうして魔矢が鬼武、パイフーの二人に神経を尖らせていたのか、その理由が分かる。

恐らく魔矢は先のことを見越してこの二人に目を付けたのだろう。  
いずれゲノムが蘇る事を想定して、あえてこの二人を歓迎した・・・  
。そう考えるのが妥当だろう。

そして素性の掴めない鮫島 聖に紅が付いた事実も、きっと何かし  
らの意図があったに違いない。

焰 羅刹に関しても同じ事が言える。

「まったくどいつもこいつも、勝手な連中ばかりだな」

ウルは戻った部屋の窓から外を眺めた。

死体こそごろごろ転がっているが、ウルはこの魔界が好きだった。  
自分の居るべき場所であり、帰る場所でもある。

そんな魔界を、ゲノムの良いようにさせるわけには行かない。

何故なら、邪悪なる神は一人で十分なのだから・・・。

「そろそろ動き出す時期か」

「神殺しのウル」満を持していよいよ始動である。

END

## 10 くツワモノたちの夢(1)

モニターの前で凄惨な殺戮シーンを見ていた魔矢とウルは、その映像を見て少々驚いた。

何故ならモニターにはあつさりとやられたミスターLが映っているからだ。

「まさかここまであつさりやるとはな」

魔矢は予想外と言う表情でそう言った。

実はミスターLの着ていた服には映像を盗撮できる小型のCCDカメラを付けて置いたのだ。

それによってパイファー、鬼武、そしてLとの戦いを魔矢とウルはずっと見ていたのだ。

「しかし便利だな、ヴァンパイアと言うのは。再生能力まで持つてるとは想像もしなかった」

やはり意外そうな顔でウルが言った。

「これで事実上あの二人……いやミスターLをやったのはパイファーだからな。ヤツが魔界No.5になる」

魔界でNo.4の実力に程近い集団が存在するため、パイファーはNo.5という事になる。

「白虎のヴァンパイアか、あの攻撃力は確かに驚異だが……」

「俺には届かん……そう言いたいんだろ？」

魔矢がにやけてそう言った。

「別にそうとは言つてないぜ」

「顔に書いてあるさ」

「そうかな」

その時、アジトの扉が開いた

「たっだいま」

「紅」

入ってきたのは紅だった。鮫島と傷み分けた手には包帯が巻かれて

いる。

「どうだった、鮫島とか言う男の方は？」

魔矢が静かに聞いた。

「うーん、想像以上に強かったね。まあ僕も本気じゃなかったけど、あのお兄さんも本気じゃなかったからね。」

両方ともガチで勝負したらどうなるだろう、ワクワクするな」

「傷追って置きながらワクワクか、お前らしいな」

ウルがそう言うとき紅はニツコリと微笑んだ。

「そっちはどうだったの？ミスターLは？さすがにL相手にあの二人も無傷じゃ済まなかったでしょ。」

死んじやった？それとも重傷？」

「意外なほどあっさりカタが付いた。勝敗はあの二人に上がった」

「ほへえーホントに！？じゃああの二人は魔界No.5じゃん」

「いや、今はな」

「今・・・は？」

珍しくウルが口を開いた。

「最近、また魔界に新しく入ってきたやつがいる。名前は焰 羅刹。かなりのツワモノだ」

「ウル、お前知っていたのか」

「ああ、ギネスを更新した大残虐劇だったらいいからな、それなりに知っている」

「ホムララセツ・・・変な名前」

紅はニコニコと笑った。

「さて、俺はそろそろ行くぞ」

そう言うときウルは立ち上がった。

「あれえー何処行くの？」

「仕事さ。裏社会で暗躍しているブローカーを暗殺してくれと以来があつてな」

「今回の報酬はいくらだ？」

「5千万だ」

「5千万!? うひゃあ〜ねえねえ今度新しい刀買って良い?」

紅が哀愁漂う目で哀願する。

「お前この前も買ったばかりだろ」

「良いじゃん、お願い!!」

「う〜ん・・・分かったよ。無駄遣いだけはするなよ」

「わ〜い! ありがとう!」

そう言うとうるは「やれやれ」と言った表情で出て行った。

「さて紅、俺たちも出かけようか」

「ん? 遊びに行くの!？」

紅は子供のような笑顔になって言った。

「会いに行くのさ、新たに誕生した魔界No.5にな」

「まったく鬼武のヤツ何やってやがる」

魔界東部にある雑居ビルの一 corner。ミスターLとの激闘の後、改めて自分たちの住居を探していたパイフーと鬼武は

この雑居ビルの一 cornerにあるアパートに住み着く事となった。

しかし何の整備もされていない、ましてや管理人など居ないボロアパートである。当然ながら建物も古ければ食べ物も無い。

そこでパイフーと鬼武は二人で分担して部屋の整備に取り掛かっていた。

パイフーは部屋の整備、そして鬼武は食料の調達に出掛けたのである。

「チッ! それにしても切断した腕の治りが遅いな。いくら再生するとは言え落としたのはまずったかな」

Lによって傷つけられ、切断を余儀なくされたパイフーの腕だが、ヴァンパイア特有の再生能力によって復元した。

だが当初からあった腕の感触に戻るにはそれなりの時間が掛かるようで、新たに再生された腕はまだしっくり来なかった。

「鬼武のヤツどこまで行つてやがるんだ。クソツ、腹減つたぜ」

今日もパイフーの胸には鎖を食いちぎる大虎の刺青が光っている。ちょうどパイフーが部屋の整理を終えたときだった。

「ピンポーン、ピンポーン」

「あん？なんだ呼び鈴なんて付いてたのか、この部屋」

「ピンポーン、もしもし、居ますか」

「あんだよ、まったく。どこのどいつだー!!」

どうやら誰か来たらしい。呼び鈴が付いている事は知らなかったが、明らかにドアの向こうに人が居るようだった。

「誰だよ!？」

「あ、いたいた。宅配便です」

パイフーがめんどくさい口調でそう言うと、少年のような声が返つて来た。

「バカ言うんじゃないやねえよ!この魔界に住所なんてあるか!それに俺らはたつた今着たばかりだつつつの」

「じゃあ、ピザのお届けです」

明らかにバカにしている。

「ナメてんのか!コノヤロー!!」

頭にきたパイフーはドアを開けた。

そこにはまだあどけない表情の少年がいた。

「なんだ、このガキは。俺様になんか用か？」

そうは言いながらもパイフーはあまりにも美しい少年に目を奪われた。言葉にするのも困難なほどの美貌の持ち主である。

「別に用つてわけじゃないんだけどさ、挨拶くらいして置いた方が良いと思つてね」

「挨拶?バカじゃねえの。初対面でいきなり挨拶つか?俺たちとは関係ねえだろ」

「そうでもないさ」

どうやら居るのは少年だけではなかったらしい。少年とは別の声が聞こえた。

見るとそこには大人の男が立っていた。

「魔界へようこそ。まさか俺たちを知らないとは言わないだろうな？」

「ああ？言ってる事がよく分からねえな」

確かにどこかで聞いたことのある声である。だがそうしても思い出せない。

「じゃあこう言えばきつと思ひ出すよ。ねえ、魔矢」

「ま、魔矢！！て、てめえ、まさかM・・・」

「ご名答、会うのは初めてだよな。俺が音羽魔矢だ。こっちは矢吹紅。名前くらいは知っているだろ？」

パイフーの背筋に冷たい汗が流れた。

「バ、バカな・・・な、なんであんたたちがここに・・・」  
そしてパイフーは心で思う

（嘘だろ、なんでこいつらが俺たちの所に来やがるんだ。冗談じゃねえぜ。こんな時に限って鬼武がいねえ・・・）

「ミスターLを撃破するとは、大したもんだ。その後腕は大丈夫なのか？」

「な、なんで知ってんだよ、その事」

「へへへ、実はLの服には盗撮用のCCDカメラが着いていたんだよ。だから二人が戦っているのずっと見てたのさ」

紅が微笑みながら言った。

「ケツ！あんなたたちに盗撮の趣味があるとは知らなかったぜ」

（クソ・・・どう考えても不利だぜ。こっちは俺しかいねえ・・・せめて鬼武がいれば・・・）

「見事な戦いぶりだったよ。ウルも褒めてたぜ。久しぶりに骨のある連中だったな」

「余裕じゃねえか、そのウルは居ないようだが」

（鬼武がいれば俺が魔矢を、鬼武が紅を。2対2になるが・・・いや・・・勝てるかどうかも分からねえか・・・）

「ウルは仕事に出てるよ〜ん」



「んなことはどうだって良いぜ。何の用だ！？殺るつもりならやっ  
てやんぞ！！」

しかしパイフーは内心恐怖している。鬼武が居るのであればまだ違  
ったが、今は一人である。

おまけに相手は魔界No.3とNo.2が揃ってる状況だ。いくら  
屈強のパイフーとは言え勝算は皆無である。

「ずいぶん威勢が良いな。その震えは武者震いか？」

「う、うるせえ！？」

「今日はね、お兄さんたちに伝える事があつて来たんだよ」

「伝える事？」

「そうだ。Lを倒した褒美みたいなもんだ。喜べ、お前たちは現在  
魔界No.5に位置されている」

「俺たちがNo.5・・・」

「ああ、ずっとLがNo.5だったからな。そのLを倒したんだ。

今度はお前たちがそのランクだ」

「その事を伝えようと思ってね」

「だが気をつけろよ。No.10から5までの立ち位置は割りと入  
りやすいランクだからな。

お前たちが5になったのは既に魔界中に知れ渡っている。これから  
は昼夜問わず気を付けた方が良い」

「何に気をつけろってんだよ」

「つまりお前たちの首には賞金が掛かつてると言う事さ。この魔界  
には賞金を狙ったバウンティハンターも存在する。

俺たちのように誰も手が付けられないほどのランクになれば狙われ  
る事もないが

No.10から5までの間は格好の標的だ。出歩くときは注意した  
方が良いぜ」

「No.10から5までの間っていつも流動的なんだ。移り変わりが  
激しくてさ。

あまり注意を怠るとバウンティハンターに殺されちゃう。バウンテ

「イハンターも結構強いんだよね」

「バウンティハンターがこの魔界に存在するとは初耳だった。」

「フン！人の心配よりも自分たちの心配した方が良いんじゃないか？俺たちがいつあんならに牙を向くか分からないからな」

「ここまで来るとパイフーももはや引ッ込みがつかない。」

「魔界に来る前は「ウルたちには関わらない」と思っていたが、こちらとしてもナメられるわけには行かない。」

「ああ、俺たちはいつだって良いんだぜ。狙ってみるか？魔界No.4の座。そして3,2,1を」

「くっ！・・・」

「こう見えても僕たちチョー強いよ。僕たちからしたらしなんてゴミだからね」

「不覚にもしとの戦闘中、鬼武を人質に取られてしまった。それは明らかに二人の采配ミスであり迂闊だったところ。」

「ゴミと言いつつ切られた相手にパイフーは片腕を切断している。これが魔矢や紅が相手だったらと考えると」

「もはや背筋が凍り付くなどと言う言葉さえ生温い。」

「しかしパイフーにしる鬼武にしるまだ強さに関しては発展途上国に過ぎない。」

「言い換えればこの先いくらでも強くなれるということだ。」

「それだけ言いに来たんだ、邪魔したな。相棒にもよろしく伝えておいてくれ」

「バイバイ」

締め切ったドアを背中に、パイフーの両肩は上下に揺れ動く。呼吸が乱れているのだ。

「魔界」・・・侵入当時は勢いも確かにあった。しかし実際に来て見ると、やはり想像を絶する世界である。

そこは呼んで字の如く「魔の世界」であった・・・。

E  
N  
D

## 11 ツワモノたちの夢(2)

「なんだかロクな物が無いな」

魔界に一つしかないコンビ二にやって来た鬼武は、陳列されている品物を見て落胆した。

ここ魔界でもコンビ二はある。それに金だってあるし、食べ物もある。

いくら殺人鬼の巣窟とは言え元は普通の人間である。

バケモノでもない限り、普通の人間と同じ食料を口にするのだ。

先日パイフーによって惨殺されたLの持ち物の中に財布があり、撃破した際こっそりと頂いていた。

そのおかげで割りと巨額な金額の金が入り、こうして食料の調達に來たのである。

今頃パイフーは新しい住居で部屋の整理をしている頃だろう。

出来れば魔界初日くらい豪勢なものが食べたいのだが、陳列されている品物はどれも幸薄いものばかりだった。

「それにしても殺人鬼たちが買い物がごぶら下げて買い物するってのは滑稽な姿だよな」

鬼武殿、君も人の事は言えないと思うが・・・。

「パイフーはきつと人肉とか血液のジュースとかが良いんだろうけど、売ってるわけないし。」

しょうがない、トマトジュースで誤魔化すかね」

鬼武は周囲を見ずにドリンクのコーナーへ向かった。

「どれにしようか・・・ってイテッ!!」

その時、何か硬い物が頭にぶつかった。

見るとそこにはパイフーに負けじと長身の男が立っており、鬼武と同じようにドリンクを取ろうとしていた。

「コラ、兄ちゃん！危ないでしょ、ボケっとしてんじゃねえよ」

「ん？ああ、すまんすまん」

「まったく今頭に当たったものはなんだ」

「ああ、ジャケットのコレか。悪いな、俺のジャケットはいろいろ武装しているもんで」

「まったく、歩く凶器かい！！人の事言えないけど・・・ってちょっと兄ちゃん」

「ん？なんだ？」

「なんだよ、それ。シリアルばっかじゃねえか」

見ると男のカゴにはシリアルばかり・・・いや、シリアルしか入っていないかった。

「これから仕事だからな。適度に食べて置かんと・・・」

「アホかつ！だったらもつと肉食え、肉！！シリアルばっかじゃ成長しないぞ」

「これ以上成長しても困るんだが」

男はパイフー同様の長身である。

「もつと栄養のあるもん食えよ。まったく長い間男娼なんてやってるから気になるんだよな、そういうの」

「まあ仕事の前の小事だ。腹八分目がちょうど良い」

「そんなもんかね」

ふと気になる事があった。どういうわけか他の殺人鬼たちは、この男を見るなり道を開けているのだ。

その表情には恐怖の色さえ浮かんでおり、人目で怯えているのが分かる。

コンビニの店員ですらこの男の対応にはかなり緊張しているように見えた。

「ありがとうございました」

会計を済ませて外に出ると、そこにはあの男が立っていた。

「今日は相棒はどうした？」

「ああ、あいつなら新居で部屋の整理してるよ」

「ほほう、ヴァンパイアでも掃除はするんだな」

「つたりまえだろ、意外と綺麗好きなんだぜ、俺たちは」

このとき鬼武は気付かなかった。どうして相棒がいる事をこの男が知っているのかを・・・。

そしてその相棒がヴァンパイアである事をどうして知っているのかを・・・。

「魔界へようこそ。じゃあな」

「えっ、今なんて・・・」

男はそれだけ言い残し、去って行った。

鬼武はようやく気付いた。

おかしいではないか、どうしてあの男が相棒の存在を知っているのか。

ましてやヴァンパイアである事を何故知っている・・・。

黒髪でスポーツ刈り、黒皮のジャケットに長身の身体。ジャケットの中には無数の凶器・・・。

「ま、まさか・・・あいつが・・・」

鬼武は理解した。何故他の殺人鬼たちが道を開け、その表情に恐怖が浮かんでいたのか。

あの男が「神殺しのウル」だと気付いたとき

鬼武の両手から荷物がこぼれ、ボタボタと地面に落ちて行った。

「俺は・・・殺されてもおかしくない状況だったのか・・・」

鬼武の表情から血の気が失せた。

END

## 12 三つ巴の死闘

金属音の交じり合う音、そして鳴り止まない銃声。

地上を駆け回る音は、既に3時間以上も続いている。

「くそっ！」

魔矢はオリハルコン・オロチを休む事なく使い続け、既に疲労はピークに達している。

「ちょこまかと素早いヤツだ」

マシンガン、バズーカ、ライフル、マグナム。もはや有りとあらゆる銃撃を行なっているが

決定的なダメージを得るには至っていない。羅刹も無傷ではないが負傷はしている。

だが致命的な攻撃を与えられないと言う事實は、魔矢にとって大きな不覚であり予想外の出来事だった。

しかしそれは羅刹に取っても同じである。

自慢の聖魔刀だが、魔矢に決定的なダメージを与える事は出来ない。

いつも寸でところで交わされ、そのわずかな隙に魔矢の砲弾が飛んでくる。

無論全てを交わすことは不可能で、羅刹は数発の直撃を受けている。致命傷を避ける形だからまだ動けるが、体力にも限界と言うものがある。

物陰に隠れて銃弾を補充しながら魔矢は羅刹の動きを目で追った。

「冗談じゃない、魔界No.3の俺がこのザマとはな・・・認めた

くは無いが、あの羅刹とか言う男

相当な強さだ。この俺が明らかに圧されてる」

だがその羅刹も魔矢に対しては同じような事を思っていた。

「チツ！魔界No.3かい、確かにめっちゃ強いわ。あかんで、このまま持久戦にもつれ込んだら不利や。

せやかて迂闊に飛び込んだらアウトやしな。魔界か、あの組長はんの言っていた事は本当やった。

No.3でこの鬼神の強さやったら、2と1はどれだけ強い言うねん」

羅刹は肩の傷を拭いながら魔矢に近づいた。

「よう、金属男。そろそろケリ付けようや」

「そうだな、いい加減飽きてきたぜ」

「行くで。この一撃でキメたるさかい」

そう言々と羅刹は信じられない高さまで跳躍し、持っていた聖魔刀を振り上げた。

「冥土の土産に見せたるわ。これが聖魔刀の奥義、形無し夢幻陣！？」

そう叫ぶと羅刹は聖魔刀を自分よりも更に上空へと投げた。

「な、なんだ」

「受けてみいやー！」

魔矢が上空を見上げた瞬間、聖魔刀は無数の光の矢に変化し、隕石のように落下してきた。

「うわあっ！」

それはまるでメテオのようだった。無数の夥しい光の矢は魔矢だけを目掛けて落下する。

もはや避け様がなかった。魔矢は羅刹の形無し夢幻陣の直撃に合い、後方へと吹き飛んだ。

「ぐっ……」

「ケケケ、どうやワイの奥義の味は。ナメたらあかんで」

ジリジリと羅刹が魔矢に近づく。魔矢の身体からは煙が立ち上っており、その肉体はもはや傷だらけだ。

「これで終いやな。ワイの勝ちやー！」

「さあ、それはどうか」



「な、なにっ！ぐはあああっ！！」

魔矢の腕が光った瞬間、オリハルコン・オロチから無数の刃が飛び出し、羅刹の身体を切り刻んだ。

「な、なんやこれは・・・まるでカミソリや・・・」

「奥義の披露感謝する。これが俺の奥の手、オリハルコン・滅だ」  
「ぐうがあああああっ」

オリハルコン・オロチから飛び出した無数の刃は羅刹の身体を持ち上げ、止め処なく切り刻んでいる。

やがてその刃も元に戻ると、羅刹の身体は地面に叩き付けられた。

「ワ、ワレエ・・・ふざけた真似しよって・・・」

「ぐう・・・」

もはや二人とも満身創痍だった。魔矢も羅刹も血塗れで動く事もまならない。両方が地面に倒れ起き上がる事さえ出来なかった。

「はい、二人ともそれまで」

「由佳！？」

突然の女の声に魔矢が驚いた。見るとそこには由佳が立っており、やれやれと言った表情でこちらを見ていた。

「これ以上闘っても意味無いわ。両者痛み分け。引き分けよ」

「あかんで由佳ちゃん。これは男の勝負や。勝敗ははっきり付けんと気味悪いで」

「死にそんな顔して何が男の勝負よ。意味の無いことはしても意味が無いでしょ」

「せやかてどつちが強いハッキリせんと・・・」

「五月蠅い！！」

「ヒイイ！由佳ちゃんが怒った！！」

こんな時までユーモアのある男だ。

「しかし、勝負はまだ付いていない」

魔矢がいち早く立ち上がった。

「あまり由佳を困らせるもんじゃないぞ、魔矢」

ハアと溜息を付いた由佳の隣から一人の男が現れた。

「ウル!?」

「なっ!ウ、ウルやてっ!!」

羅刹は目を見開きウルと呼ばれた男を見つめた。

「魔矢、急用が出来た。急いで来い」

「どうしたんだ」

「ゲノムが出た」

「な、なんだとっ!」

「今紅が様子を伺っている。急いで合流するぞ」

「お前知っていたのか・・・ゲノムが蘇った事を」

「当然だ。お前は何かと策を練っていたようだが、ずいぶん前から知っていたぞ」

「何もかもお見通ししてわけか」

「まあな。行くぞ」

「ああ」

「ちいと待てや、おのれら!」

「羅刹、貴様まだ」

羅刹は血塗れになりながらも立ち上がった。

「ワレが神殺しのウルかい。ちょうどええわ、探す手間が省けたわ! その首、ワイが貰ったで!!」

そう言くと羅刹は負傷をもろともせず、ウルに襲い掛かった。

「ま、待てウル!そいつは俺の敵だ、手を出すな」

「手を出すなと言われても・・・」

「シャアアッ!」

ウルは羅刹の攻撃を避けながら言った。

「まったくどいつもこいつ勝手な連中ばかりだ」

ウルの眼差しが鋭くなった瞬間、羅刹の腹部に激しい激痛が走った。

「がはあああっ!、な、なんや、今のは・・・」

それはウルの繰り出したボディブローに過ぎなかったが、あまりにも速過ぎて羅刹の目に映らなかったのである。

「行くぞ、魔矢」

「あ、ああ・・・」

ちょうどその時、明らかに羅刹の身体から放たれる気のようなものが変化した。

「おのれら・・・ゲノムだ、紅だ分けの分からん事言いよって、ワイは無視かい。」

お前らみたいな連中、ワイは一等ム力つくんじゃあ!？」

「な、なんだ!」

「!!!」

「があああああつ!」

それはまさにキレた形相であつた。だがしかし、どうも様子がおかしい。羅刹の白目が赤く染まっていくのだ。

「こいつ、ただの人斬りじゃない!!」

ウルが叫んだ。

「ご名答や。聖魔刀は単なるワイの趣味に過ぎん。ワイの本当の姿はこれや!!」

羅刹がそう叫ぶと、身体中の筋肉が一回り大きくなり、体格が増した。

「バカな、こんな事が・・・」

魔矢は驚きで動けなかった。

「こいつ、バーサーカーだ!!」

バーサーカーとは狂戦士のこと。何らかの異状によって敵味方の区別が付かなくなり

相手が死滅するまで戦い続ける地獄の戦士である。

「ピンポン。せやけどワイのバーサーカーは狂ってないで。力が上がるだけで敵味方の区別は付くんや」

「ほう、なかなかのもんだな」

ウルは至って平常心だった。特に臆する事も無い。

「神殺しのウル、覚悟せえや!!」

「良いだろう、相手になつてやる。だが俺が直接相手をする前にコイツらと闘って勝つたら、いつでも相手になつてやる」

ウルはそう言うのと、口で軽く口笛を吹いた。

すると何処からとも無く真つ黒なフードを纏った3人の人間たちが現れ、ウルの周囲に立ちはだかった。

「なんやそいつらは」

「こいつらは魔界で4番目の实力を持つ戦士たち。こいつらに勝てたら俺たちのアジトに來い。」

場所は由佳から教えてもらえ。いつでも待つてるぞ」

そう言うとうルは身体を翻し、紅の待つ場所へと走り出した。

「羅刹、貴様との決着はいずれ必ず……」

魔矢もそう言うとう霧の中に消えて行つた。

「ケツ！どいつもこいつも敵前逃亡かい！まあええわ。後で由佳ちゃんから教えてもらつさかい」

「その由佳ちゃんって言うの止めてくれる？」

「じゃあ由佳タン」

「殺すわよ？」

「ヒイ！由佳タンがまた怒つた！！」

そう言つた瞬間、フードを被つた男たちが羅刹に奇襲を掛けてきた。

「ワイの強さを見て惚れるかも知れへんで」

「それはまず有り得ない」

「一瞬で片付けたるわ！！」

バーサーカーと化した羅刹と、フードを纏つた男たちの死闘が始まつた……。

END

### 13 〱青天の霹靂？〱

「アタタタ、痛い、由佳タン！もつと優しくせな」

「何言つてんのよ、男のくせにだらしない」

「せ、せやかて、めっちゃ痛いねんで」

「我慢しなさい、介抱されてるだけでもありがたいと思ってよね」

「あかん、あのフードやローどもには勝てても、由佳タンには勝てそうにないわ」

「あのさ、その由佳タンつての止めなさい。普通に由佳で良いから」

「ええゝそんな呼び捨てゝワイらそんな関係になるんやな」

由佳は何も言わず黙ってゲンコツを羅刹の後頭部にぶちかました。

「アタタタ！！ジヨ、ジヨークやねん、イツツ・ジヨークや」

寝そべり、由佳に介抱されながら羅刹は冗談を言った。

「せや、なんでワイの事助けてくれるん？」

羅刹にはフードを着た男たちを倒した後の記憶がなかった。

魔矢との死闘で既に重症だった羅刹だったが、ウルが連れて来たN  
O.4のフードたちは何とか撃退できたのだ。

その後で気絶したのだろう。ほとんど記憶が残っていなかった。

「貴方があの連中を倒した後、ウルと魔矢が紅君を連れて戻ってきたのよ」

「なんやてっ！、戻ってきたんかい！」

「そう。介抱してやれって言ったのは魔矢なのよ」

「なにい！ますますよう分からん連中やな、敵を助けるってどないやねん」

「そうそう、魔矢から言伝があるの」

「な、なんや！！」

「お前とのケリは必ずつける。それまで誰にも殺されるなよ・・・  
だつてさ」

「ごつつム力つくわ！！あんのヤロー、間違いなくワイの方が有利

やったで」

「そうでもなかったじゃない。貴方だって限界に近かったでしょ」

「そ、そやけど、まあなんちゅうか、もうええわい」

「フフ」

羅刹は横たわっているから見えなかったが、きつと笑った由佳の顔は可愛かったに違いない。

羅刹は勝手にそう思った。

「良い勝負だったとは思っけどね」

「次は必ずワイが勝つでえ！関西人は冗談言っても嘘は言わへん」

「だと良いけど。まあ例え魔矢に勝てたとしても、紅君には無理ね」

「紅君？そっぴやウルってやつもそんな名前口にしとったな」

「矢吹 紅。ここ魔界でNo.2の実力者。見た目はそんな風には見えないんだけど」

由佳は苦笑いを浮かべた。

「魔矢がNo.3で紅がNo.2ってこたあ、紅は魔矢より強い言う事か？」

「そうよ。で、その上がウル」

羅刹は魔矢との死闘を思い出した。羅刹は今まであれほど手強い相手と戦ったのは初めてである。

無敗だった羅刹が初めて敗北を身近に感じた相手だ。その魔矢よりも強い紅とは一体……。

そしてあの神殺しウルである。ウルと拳を交わしたのはほんのわずかな時間だけだったが

羅刹は本能的に感じ取っていた「コイツはあかん」と。

ある程度の強さを誇る人間なら、自分よりも強い相手を前にしたとき、本能が危険信号を送るものだ。

その危険信号がほぼマックスに近い状態で羅刹の本能に走った。

認めたくは無いが、とてもじゃないが太刀打ちできる相手とは思えない危険信号。それをウルから感じていた。

「一体どんなヤツなんやろか……」

「淒く可愛い感じの子よ」

「か、かわええ！？なんや魔界のNo.2はかわええのかいな！」

「ええ、きつと会ったらビックリするわよ。はい、これで終わり」

どうやら傷の手当てが終わったらしい。由佳の手が羅刹の身体から離れた。

「おおきに！ホンマ助かったわ」

「良いよ、これくらいしか出来ないしね」

「ところでちよつと頼みがあるねんけど・・・」

「なに？」

「なんか食わせてくれへん？ホンマは何か食べよう思て由佳ちゃんの店入ったんや。」

あかん、もうワイ餓死しそうやわ・・・」

「まったく、何から何まで世話が焼けるわね」

由佳が下に降りて行つたのを追うようにして、羅刹も下の階にある店に下りた。

「ほへえゝ魔界には似合わないほど綺麗な店やな」

当然客はいない。羅刹を介抱するために由佳は一時的に店を閉めているのだ。

入り口のドアにはcloseと書かれた立て札が下がっている。

「ちよつと大丈夫なの？まだ横になっていたほうが」

厨房から由佳が顔を出してそう言った。

「大丈夫や、寝てるほうが身体に悪い気がするねん」

「じつとしてられないタイプ？」

「どっちか言うたらそうやな」

すると由佳が「ふゝん」と言いながら出てきた。手には皿が乗っており、北京ダックとライスがある。

「うはあゝ！これやこれ！店の前のオススメに北京ダック書いてあったからな」

「まあ今日のオススメと言う事で」

「治療してくれた事に感謝しつつ、いただきまっせ!!」  
「どうぞ」

よほど腹が減っていたのだろう。羅刹はガツガツ食べ始め、瞬く間に平らげてしまった。

「ウマイ!? こりゃええ嫁さんになるで! どや? ワイの嫁にならんへん?」

「イヤ」

「そんなあゝ真正面から否定せんでもええやんか」

「アハハハ・・・ところで御代払えるんでしょうね?」

「へっ?」

「へっ? じゃないわよ。お金! 北京ダックとライス代、あんたまさか・・・」

「ああ、御代な、そ、そりゃ払えるで、待ってる。確かここに・・・」

羅刹のポケットから出てきたのは100円玉のみだった。

「あ、あかん・・・ワイ、文無しや・・・」

「良い度胸ね、あんた!!」

由佳が両手の骨をボキボキ鳴らしている。

「いや、違うねん! つつか、魔界でも金払うんかいな。ワイは知らなくて、その・・・」

「この食い逃げ男!!」

「わ、わあああ!!! ちゃうで! ワイ逃げてへんよ!!」

拳を振り上げた由佳が襲い掛かる。

「か、勘弁してえな」

無一文だった羅刹はこの後由佳のもう攻撃に合い、ふんどりけったりだった。

勿論、由佳も本気で攻撃したわけではなく、おふざけが半分と言う感じではあった。

とは言うもののこのまま帰すわけにも行かず、羅刹は由佳の命令で



店の手伝いをする事になった。

ひとまず羅刹は由佳の店の隣にあるボロアパートを占拠し、定住をどうにか確保した。

「手伝えばそれなりのアルバイト代は払ってあげる」

そんな由佳の優しい一言にすがりつく形になったわけだが・・・。

さすがの聖魔剣士、バーサーカー羅刹でも、由佳には勝てない様子である。

「いらつしゃいませ」

「やあ！」

「あら、久しぶりね」

「おっひさ〜由佳さん。調子はどう？」

「悪くないわ。魔矢とウルは？」

「また出掛けてるんだよ、仕事だつて言つてた、僕暇になっちゃてさ」

「そうなの、何か食べる？」

「うん、オススメの北京ダック頂戴！」

「はい」

「ああああっ！！お兄さんもう動けるの！？」

「ああ〜ん、なんやこのかわええガキは！」

そこにはスーパー童顔の少年がいた。背も低くまるで学生のようにある。

「あれだけ負傷してもう動けるんだ 凄いな〜」

「魔界ってんはよう分からんな。綺麗な店に綺麗な女、それにかわええ少年まである。」

ますます理解できへん世界になつてきてもった」

「そう？結構単純な世界だと思うけど」

「そうかい・・・ってなんでやねん！？」

「アハハハ、面白い 関西弁！なんでやねん」

「こ、このガキヤ、ワイのことバカにしとるな」

「アハハ、ウケる！関西弁」

「このヤロ、関西バカにするなや！関西人は怒るとこっつ怖いで！」  
「女に弱い間違いでしょ？」

横から由佳が突っ込んだ。

「そりゃ、男たるもん、女には弱いんや。つうか、お前誰や！？なんでワイの事知つとる！？」

「僕？僕は矢吹紅。魔矢とウルの仲間だよん 焰 羅刹さんでしょ？」

「な、なにっ！？こ、こいつが紅・・・！？・・・」

「ね？やつぱりビックリしたでしょ？」

由佳が苦笑いで言った。

「お前か！魔界No.2言うのはっ！」

「そうだよ」

「いや、そんなあつけらかんとそうだよ言われてもやな・・・なんや、ホンマにNo.2か？」

どっからどう見てもガキにしか見えへんのやけどな」

「まあまあいつか闘うときが来れば分かる事だよ」

紅がニツコリと微笑みながらそう言った。

「はあ・・・なんだかよう分からん世界や。こついうのを青天の霹靂って言うんやろつな」

羅刹が魔界を理解する日は本当に来るのだろうか・・・

やれやれである。

END

## 14 〴〵四強、揃う

ゲノムが出現した事は別に驚くべき事ではなかった。

忘れられた孤島「煉獄」から魔界本土へやって来てもおかしい事ではない。

数年前、ウルたちが封印した際も、この魔界本土で大暴れしたのだ。先に様子を伺っていた紅と合流したウルと魔矢だったが

二人が辿り着いたときには既にゲノムの姿は無かった。

紅の話に寄ればそれらしい存在が確認されただけと言うことであって紅もゲノムを肉眼で確認したわけではなかったようだ。ゲノムの姿が無いのであればもはやどうしようもない。

三人はその足でアジトに戻った。紅はその後「お腹空いたから由佳さんの店に行く」と言って出て行ったが

一時間ほどで戻ってきた。

「どう思う？」

魔矢がウルに聞いた。

「蘇ったと言う噂はどうやら見たいだな。そんな気がしてならん」

「確かに最近郊外で転がってる死体の数が増えたよね。それは僕も思ってたんだ」

「だがその姿を明確に現すまでには至ってないわけか」

魔矢が付け加えた。

「恐らくまだ完全に蘇生していないんだろう。前もそうだったからな」

「しかし本土まで足を向けているのも事実だぞ」

「分かっている。いずれまたヤツとやり合う事になるだろう」

紅も魔矢も思わず息を飲んだ。魔界屈指の二人と言えど、ゲノムとの闘いだけは考えたくない。

二人とも前回の死闘で半ば半殺しに近い状態に追い詰められた相手だ。

ましてや時間の経過を考慮すると、前回よりも凶悪になっている事は想像するに容易い。

「どうするの？今のうちにやっちゃう？」

「いや待て。それはまだ早い。もっと作戦が必要だ」

魔矢が言った。

「そのためにお前はあの二人に目を付けたんだろう？」

「お前も人が悪いな。お見通しかよ」

「まあな」

「あの二人ってパイフーと鬼武の事？」

紅が聞く。

「ああ。それと鮫島 聖に焰 羅刹もだろ？魔矢」

「やれやれ、こうまで見透かされていると気持ち悪いな」

魔矢が苦笑いで言った。

「ああ、それと未確認だがもう一人、等々力と言う男もいる。こいつも素性は明らかじゃないがな」

「つまりお前は俺たちと、今名前の挙がった連中で手を組む・・・そう考えているんだろう？」

「ワオ！？それって凄いプランだね。テンション上がりそう」

「そうでなければゲノムは倒せん。ウル、数年前ヤツと直接対決を繰り広げたお前なら分かるだろ？」

いかにゲノムが強大で恐ろしい存在か」

「一応な」

「だからこそこのプランは必要だ」

「でもさ、パイフーと鬼武はセットで居るから可能性は高いけど、鮫島のお兄さんや関西人は難しくない？」

紅にとって羅刹は関西人で形容されているらしい。

「ああ、そもそもあれだけの連中をまとめ上げるのも一苦勞だ。可能性は低いと見て間違いないが・・・」

「言っておくが俺は誰とも組むつもりは無い。これは俺の問題だ。お前たちは関係ない」

「ゲノムがお前の母親だからか？」

「・・・・・・」

「ほほう、ゲノムとか言うヤツはあんさんの母親かい」

「誰だっ！」

突然関西弁が部屋に響くと、部屋のドアが静かに開いた。

「お前は、羅刹っ！」

「ああ！さっき由佳さんの店に居た関西人！？」

「か、関西人言うな、ヴォケー！！ワイには羅刹言うカッコええ名前があるんや！！」

「アハハ！！自分でカツコイイって言ってる！ウケるう」

「こ、このガキ！！まあええわ」

「羅刹、何しに来た！？」

魔矢が言った。

「何しにつて挨拶や。由佳ちゃんに場所は教えてもらうた。いずれ首を取る相手に対する敬意やで」

羅刹がそう言うと、何かがおかしかったのかウルがフンと笑った。

「フン、何が敬意だ。その身体でよくもまあ言えたもんだな」

「ケツ！ワレも人の事言えるかいな！なんやその包帯塗れの身体は」

「お前だつて似たようなもんだろ。由佳に助けられた身で偉そうな事抜かすな」

「なんやとっ！！」

「まあまあ、二人とも。今は話し合いの最中だよ。静かにしなきや

」

「ケツ！」

「フン！」

魔矢と羅刹、犬猿の仲になる事は間違いないだろう。

「羅刹とか言ったな。さつきはなかなか良い物見せてもらった。礼を言う」

ウルが言った。バーサーカーの事だろう。

「ええもんやと？ずいぶん余裕やな、魔界のNo.1は」

「そういう性格なもんでね」

「今あんさんと闘う気はない。こんな身体やしな。せやけど、そのうち取ったるからな、そんな時は覚悟しいや」

「楽しみだな」

「じゃ、話を戻そうか ゲノムのことだけどうする？」

「そないヤバイ相手なんか？ゲノムっちゅうのは」

「でなければ我々がここまで真剣になる事はまずない」

魔矢が言った。

「ほう」

羅刹は生返事である。

「いずれにしても様子見と言うところだろう。今も言ったが俺は誰とも組む気はない。

やるならお前たちでやってくれ。俺は俺でゲノムとケリを付ける」

「それは邪魔しない代わりに邪魔もしないと言う意味か？」

「そうだ。好きにしたければ好きにすれば良い」

魔矢の問い掛けにウルがそう答えた。

そしてウルは部屋の片隅に置いてあったバッグを手に取った。

「あれえゝまた仕事？」

「ああ。今回は政界の大物が相手だね。まずこっちの仕事を片付けるのが先だ」

「気をつけるよ、ウル。どこで何があるか分からないからな」

「ああ。お前たちもな。何かあったら連絡してくれ」

それだけ言い残すとウルはアジトから出て行った。

「ホンマ、協調性の無いヤツやな。自分が神殺して言われてるん知つとるんかいな」

「あいつはそんな肩書きに興味は無いのさ。あいつの周りが神殺しだのNo.1だの騒いでいるだけで

ヤツは神殺しなど興味は無い。勝手気ままに生きるのがヤツの性格だ」

「はあゝん。ごつつ扱い難い男や」

「アハハ！関西人だつて人の事言えないじゃ〜ん」

「せやから関西人言うなつての！？」

「さて、俺もちよつと出てくる」

「あれえ〜魔矢も？何処行くのさ」

「煉獄・・・ヤツが根城が煉獄かどうか確かめてくる。紅、お前は  
どうする？」

「僕はちよつと疲れたからここにいろよ」

「羅刹、お前は？」

「そつやな〜ここにおつてガキンちよの面倒見るんもイヤやし、ワ  
イも付き合つたる」

「ガキンちよつてなにさ！！僕は大人だぞ」

「ガキンちよはガキンちよや。大人しくお留守番してるんやで」

「関西人のくせに！！」

「羅刹じゃ！ヴォケ！！」

賑やかな喧騒とは裏腹に、物語はここから壮絶を極める事になる・・・。

END

## 15 激闘の幕が開くとき

「ゲノムとウルの関係ってのはどないなっとなるん？」

「さっきお前も聞いていただろうが、ゲノムは元々人間だった。しかも女。」

ウルと言う人間を産んだ母親でもあり、ここ魔界の元凶でもある」

煉獄はもはや目と鼻の先立った。移動の車の中で魔矢は羅刹に語り始めた。

「母親の名前は可憐。熾烈な環境で生まれ育ち、不本意でウルを宿した。」

親戚や家族からは罵倒され、生き地獄に相応しい環境でウルを産んだ。

だが、彼女が培っていた憎悪、憎しみ、殺意は母体に居たウルに届いていたらしい。

母親から負の感情を一身に受けたウルは、生後まもなく産声ではなく悲鳴を上げたらしい」

「なんや、エライ込み入った話やな」

「まあな。どうして母親がこの魔界でゲノムと化したのかについては未だに不明だ」

「な〜るほど、せやからウルはお前らには関係あらへんって言うたんか」

「そうだ。皮肉っぽく言えば事実上、母親と子供の究極の親子喧嘩だからな」

「せやけどそのゲノムってのは、他の殺人鬼たちの死念が混ざってるんやろ？」

「ああ、それが問題だ。もはやゲノムはウルの子供可憐ではない。俺たちが魔界で始末した殺人鬼たちの報われない呪い。その集合体がゲノムだ」

「しかしそない切羽詰る事もないんやないか？お前の計画では合計



8人のツワモノが揃つとるで、こつちは」

羅刹の言う8人のツワモノとは、ウル、紅、魔矢、羅刹に加えパイファー、鬼武、鮫島、等々力の事を示している。つまり8対1の形式となる。

「お前はゲノムの真の恐ろしさを知らん。俺の予測ではウルよりも強いと見ている」

魔矢の目は真剣そのものだった。もはや大袈裟と言う領域を超えている。

その表情には恐怖さえ感じられる。

羅刹は思わず息を飲んだ。「コイツはあかん」と直感で感じたあのウルを凌駕する強さとは一体……。

「俺だつて新参者たちと手を組むなんて本意じゃない。今まで魔界はNo.1のウルを中心に微妙な秩序を保っていたんだ。

殺し合いが日常茶飯事な変わりに、決して上位の者には逆らわず、無謀な行為はしないと言う暗黙の秩序がな。

だがゲノムの復活によってそれが破られつつある。ヤツがその気になつたら魔界は消滅してしまう」

「マジか……」

「大マジだ。むしろ魔界だけで済めば良い方だ。万が一ヤツが魔界を抜け出し、裏社会へ、そしてリアル世界へ向かったら

それこそ世界中は大パニックになるだろう」

「ケツ！胸クソ悪いわ！エライ時に来てもうたな」

「今さら言つても遅い。もはや手遅れだ」

魔矢の言葉はあながち冗談でもなかった。

魔矢の言うように魔界の静かなる秩序は、確実に破られつつあった。もはやゲノムが蘇った事は明白であり、目撃者もいる。

それにこうして煉獄を前にして感じられる悪の空気は、ゲノムがそこにいる事を証明している。

数年前の激闘を経験している魔矢が忘れるはずも無い。腐敗と血肉の入り混じった最低の殺意。

その嫌な空気が漂う中、魔矢と羅刹は車を止め、外に出た。

「あれがゲノムを封じた孤島、煉獄だ」

「うへえゝあかで、あれは。ごつつ禍々しいやないか」

「このどんよりとした負の感情は、身体の傷に答えるな・・・」

魔矢がそう言った時だった。

何かが自分たちの背後にある。それは人なのかそれとも物なのかはつきりなかったが

確実に何か「異物」のようなものが突如として現れたのだ。

それに気付いたのは魔矢だけではなく、羅刹も同じだった。

だがその正体に気付いていたのは魔矢だけだった。

「羅刹、分かるか？」

「ああ・・・なんやこのめちゃ死にそうな悪寒は・・・」

「迂闊だった・・・やはり来るべきじゃなかった・・・」

魔矢は夥しいほどの汗を掻いている。それも普通の汗ではない。冷や汗である。

「良いか、合図したらこの場から離れる。お前は紅にヤツが出た事を伝えに行け」

「ヤツって、つまり・・・」

「ああ、ゲノムだつ!!」

それが合図となった。魔矢の言葉が消えた瞬間、二人は背後に振り返った。

魔矢の言ったとおり、そこには世にもおぞましい姿と化したゲノムが居た。

「グググググ・・・」

「コ、コイツがゲノム!？」

夥しい数の手足、数得る事すらままならぬ眼球と口、それに頭部。そんなモンスターののような姿を忘れるはずが無い。

それは真正銘ゲノムだった。

「羅刹、走れ!？」

羅刹はゲノムの醜悪な姿に気を取られ、遅れを取った。羅刹が走り

出したとき、既に魔矢は自分の前方を走っていた。

「コ、コイツはあかん……あかんわ、マジで!!」

「ゴゴゴ……ウ、ウル……ターゲット……ナカマ……カクニン……」

動き出したのは魔矢と羅刹だけではない。ゲノムも動き出した。その進路は羅刹に向かつて一直線に進んでいく。

「なんで……なんでワイが逃げなあかんねん……殺ったる……殺ったるでえ!!!」

羅刹は走りながら後ろに振り返った。

「コナゴナにしたるさかい!!うおおおおっ!!」

「羅刹、止せ!？」

そう言い放った瞬間、羅刹の聖魔刀は形無し夢幻陣の型を取り、ゲノムに襲い掛かった。

メテオと化した無数の刃がゲノムに突き刺さる。だがゲノムは無反応だ。迫り来るスピードも落ちない。

「あかん!!くはああっ!!」

「羅刹!？」

猛然と突進してくるゲノムのタツクルが、羅刹の上半身をモロに直撃した。

その反動で羅刹の身体は加速を増し、前方にあるビルへと叩きつけられる。

この一撃で羅刹は再び血塗れとなった。

「うぐう……くそったれ……」

「羅刹!」

羅刹を助けるため進路を変えた魔矢に、ゲノムが襲い掛かった。

「オマエ……オボエテル……ウルノナカマダナ……」

「なにっ!」

凄まじいスピードで繰り出される拳の渦。それを紙一重の瞬間で交わす魔矢。

「ま、魔矢……」

羅刹が呻いた。

「俺を覚えてやがるのか！」

既に魔矢のオリハルコン・オロチは解放されていた。そうしなければ太刀打ちできないからだ。

「羅刹、大丈夫か!？」

「ああ、なんとか・・・い、生きてるで」

魔矢とゲノムは睨み合い、その場から動かない。

「逃げる!今すぐここから逃げろ」

「アホか・・・ワレはどないするねん」

「カチ合った以上、もはやどうにもならん。ここで迎撃する」

「ム、ムチャ言うなや・・・その身体でか?どうにもならんで」

「羅刹、お前は戻ってこの事を紅に伝える。そうすればウルに連絡が付く」

「せやかて、このモンスター相手にお前一人じゃ、間違いなく死ぬで!!」

「生きてやるさ。こんなバケモノに殺されてたまるか!!」

「魔矢・・・」

「さあ行くんだ!!早く!!」

それが再び合図となった。魔矢とゲノムが重なり合い、死闘が始まる。もはや止めようがなかった。

そして打つ手も、皆無に等しい。

「何してんだ、早く行け!!」

「魔矢・・・死ぬなよ・・・絶対だぞ!!」

「ああ・・・」

「くそつたれ!!」

羅刹はそう叫ぶと、凄まじい速度で来た道を引き返して行った。

「グルルルルル・・・」

魔矢はゲノムに居直った。

頭に浮かんだ最愛の人が微笑む。由佳だった。

そして頬を伝う、静かな一筋の涙・・・。

「お前の好きにはさせない。ここで始末してやる!？」

それは魔矢が死を覚悟した瞬間だった・・・。

END

## 16 絶体絶命。魔矢、暁に散る

「はあ・・・はああ・・・はあ・・・バ、バケモノめ・・・」

勝敗は既に喫していた。羅刹との戦いで満身創痍の魔矢がゲノムに勝てるはずが無かった。

例え万全の状態で戦っても、魔矢一人でどうにかなる相手ではない。先ほどから攻撃を仕掛けるも、その攻撃は全て命中。だがゲノムの動きに狂いは無かった。

醜悪な姿であるにも関わらず悪知恵の働くゲノムは、下手に動くよりも攻撃を受け止め、その後のカウンターで魔矢を攻めた。

無数に存在する手足による攻撃。同じく無数の口から吐き出される硫酸の異臭。

魔矢にはゲノムの攻撃を防ぎようが無かった。もはやまともに動く事すらままならないのだ。

「こんなところで・・・俺は死ぬのか・・・」

不思議と死に対する恐怖は無かった。家族を失い、それが引き金となって魔界に來た魔矢にとって

恐怖など当の昔に抹殺した感情である。死ぬのが怖いのではない。自分が殺される相手に納得が行かなかった。

一度は封印した相手。その相手に殺される羽目になるとは・・・。そうならないよう、事前に計画を練り、なんとか今日まで來たというのに

それがこのゲノムの出現によって無惨に打ち砕かれようとしている。魔矢はそれが無念でならなかった・・・。

「シヌカ・・・」

「なに・・・ぐはああっ!!」

突然ゲノムの身体から伸びた鋭利な触手が、魔矢の身体の至る所を貫いた。

腕、足、上半身、下半身。幸いだったのは心臓と頭部には命中しな

かった事である。

だがそれでもモはや致命傷は避けられない。

「があああああつ！！！！」

かつてない悲鳴が魔矢の口から放たれた。身体の至る部分に穴が開き、その穴から夥しいほどの血液が流れる。

だがそれだけではなかった。ゲノムから伸びた触手は、そのまま魔矢の眼球をかすめて元に戻った。

魔矢の両目から血が流れ、モはや光を受ける事は出来なかった。

「目が……ぐう……」

暗闇の支配する視界の中で、由佳が静かに微笑んでいた。

魔矢はもう動けなかった。とてもじゃないが立ち上げられる状態ではない。

しかしゲノムの攻撃は止まらない。再び伸びた触手は今度は魔矢の両腕を意図も簡単に貫いた。

悲鳴・断末魔の声は出なかった。ただ唯一動いたのは激しい痛みに大きく痙攣した己の肉体のみ。

これによって装着していたオリハルコン・オロチは無惨にもぎ取られ、左肩を失った。

激しい痛みのせいで声も出なかった。

（由佳……）

結局誰も守れなかったのだ。家族を失い、魔界で出会った由佳さえも守れず……。

「トドメ……」

ゲノムはそういうと、信じられない高さまで飛び上がり、自らの体重を味方に付け一気に下降した。

その下には魔矢が横たわっている。ゲノムは魔矢目掛けて真つ逆さまに落ちてくる。

光を失った魔矢の目に、上空で燦々と光る太陽の熱を感じた。モはや意識は朦朧としている。これが死なのだろうか……。

（ウル……紅……由佳……羅刹……後を……たの……）

現実には魔矢に別れの言葉すら言わせなかった。  
まさにその時、上空に舞い上がったゲノムが、魔矢の身体の上に落下した。

「がはあああつ!!」

それが魔矢の最後の悲鳴だった……。

魔矢と別れてどれくらい経ったか分からない。

魔界の中心部へと向かっている羅刹の身体からは血が噴き出ていた。魔矢との戦いで満身創痍だった身体はやはり限界だった。走っている最中に全ての傷口が開き、血がほとばしる。

「これじゃなんのために由佳ちゃんに手当てしてもらったのか、わからへんぞ……」

羅刹は躓き、前のめりになって倒れてしまった。

「くそ……なんでワイが……こんな目に……」

羅刹にはやらなければならない事がある。ゲノム復活を紅に、そしてウルに伝えるという役目が。

だがその役目すら果たせそうに無い。凄まじい痛みが身体を走り、体力が奪われてゆく。

しかし、ちょうどそのときだった。

「な、なんや……」

地震のような地響きが巻き起こると、羅刹の遥か後方から何かがちらに向かつて移動してくるのが見えた。

「あれは……ゲ、ゲノム!？」

もはや見間違える事などなかった。それはゲノムだった。

ゲノムは凄まじいスピードで羅刹を追い越すと、そのまま魔界の中心部へ去って行った。

「ど、どういうことや……魔矢はどないなつてん!？」



ゲノムは魔矢が食い止めているはずである。にも拘らずそのゲノムはたった今通過して行った。

という事は魔矢は……。

「じよ、冗談やないで！！あのヤロー、死によったら承知せえへんぞ！！」

羅刹は渾身の力を込め立ち上がると、今来た道を戻って行った。

「魔矢・・・お前まさか死んだんちゃうやろな」

身体の傷などもはやどうでも良かった。羅刹は痛みを堪えながら大急ぎで魔矢の下へ向かった。

END

## 17 〽戦闘開始！パイパー・鬼武〽（前編）

「まったく、こうも毎日戦いじゃ疲れるぜ」

「だな。あれから一体何人のバウンティーハンターを殺ったのか、もう覚えてないからな」

自分たちの足元で転がるバウンティーハンターを見下しながら、パイパーと鬼武は一息ついていた。

二人が事実上魔界でNo.5の座に着いて以来、ほとんど毎日のように賞金を狙った連中に付け回されていた。

そのほとんどは二人がベッドで愛し合っているときに訪れ、お楽しみを邪魔される形になった。

特にパイパーはそれが不満で、向かってくるハンターたちを怒り任せにぶちのめすと言うのが恒例になっていた。

「パイパー、お前自慢の爪が血塗れだな」

鬼武がニヤついて言った。

「似合うだろ？」

「ああ、凄く似合ってる」

そうは言った鬼武だったが、彼の手にはちゃっかり地对空ミサイル・スティングーFIM-92Aが握られている。

本当ならパイパーのように素手で相手しても良かったのだが、相手が複数だった上に飛び道具を使う連中だったため

こちらも飛び道具の方が能率が良かったのである。二人とも少々疲れてはいたが、その辺はさすがNo.5。強さは本物である。

「おい、ありやなんだ？」

身体に飛び散った返り血を拭いながらパイパーが言った。

見ると自分たちの遙か南側から何かがこちらに向かって突進してくるのが見えた。

「なんだあれ。おいおい、なんだかヤバイ感じがするぞ……」

過去に一度ウルと会っている鬼武が感じ取ったヤバさは、決してウ

ルの気配ではなかったが

ある意味ではそれ以上の禍々しさを感じる。

「す、すげえのが来る・・・見るよ、ありや人間じゃないぜ!!」  
そう叫んだのはパイフーだった。

突進してきたそれは二人の目の前で止まった。その瞬間、パイフーの鬼武も言葉を失った。

眼前に現れたのは凄まじいモンスターだったのだ。無数にある手足と、有に百は超えるであろう眼球。

その醜い姿に驚いた事も去ることながら、それよりもモンスターから発せされる邪気に腰が抜けそうになったのだ。

もはや邪気とすら呼べないほどの殺意、そして憎しみの塊。

「な、なんだてめえは!!」

パイフーが叫ぶ。

だが相手・・・いや、ゲノムは無反応だった。

「コイツだよ、魔界に来た当時から感じていた嫌な感触の正体は・・・」

鬼武が怯えたように呟いた。

「どういうことだ?」

「お前も感じていただろ? 神殺しウルばかりに気を取られていたが、それと同じくらい・・・」

いや、それ以上に禍々しい感触を・・・」

「確かにそんなものを感じた事もあったが・・・それがコイツだったのか!？」

「ああ、多分。ヤバイぜ、パイフー、俺たち死ぬかも知れない・・・」

「ふ、ふざけんな!! そんなことになってたまるかっての!!」  
「グルルルルル・・・」

パイフーと鬼武は驚いてゲノムに注意を払った。

「ターゲット・・・ハンベツフノウ・・・ニンシデータニトウロク  
ナシ・・・ナマエ、ミカクニン・・・」

「な、なんだよ、コイツ……」

鬼武が一步下がった。

「薄気味悪いヤローだ！おい！てめえも賞金狙いか！？」

パイファーが叫ぶ。

「イズレモカンケイナイ……アンノウン……」

ゲノムはそう言つと、進路を変え去ろうとした。

「待てコラ……！」

「おい、パイファー、止せ！？」

鬼武が止めるが、どうやらパイファーは自分たちがシカトされたように思えて気に入らなかった。

ゲノムの動きがピタリと止まる。

「コノヤロー、俺たちは無視か？この極悪紳士二人組みの俺様たちをシカトしようつてのか！？」

「ドウデモイアイテ……シヨセンザコ……」

「殺すぜ！？」

もはや止められなかった。パイファーはその巨漢を宙に預け、ゲノムに飛び掛った。

「止せ、パイファー……！」

鬼武がそう言つた時には既にパイファーの鋭い爪がゲノムに命中していた。

「へへ、どうよ。俺様の拳の味は」

しかしゲノムは無反応だった。それどころかまったく動じてない。

「ジュンビウンドウナラ……モウシタゾ……」

「なにっ、おわっ……！」

突き刺さった爪を引き抜かれ、パイファーは軽々と宙に舞う。そして勢い良く投げ付けられ、隣のビルに激突した。

「パイファー……くそっ、どうなつてももう知らねえからな……！」

そう叫んだ鬼武は持っていた地对空ミサイル・ステインガーFIM-92Aを構え、そして撃った。

ミサイルはゲノムに命中、大爆発が起こった。

「おい、パイファー！大丈夫か？」

「あ、ああ。なんとか・・・チキショー！不意打ちだったぜ」

もくもくと煙の上がる中、鬼武がパイファーを抱き起こしたときだった。

「グルルルル・・・」

「なんだっ！？ぐはあっ！！」

「うわっ！」

文字通り肉の塊が鬼武とパイファーに体当たりしてきた。それも尋常ではない凄まじいスピードで。

その勢いで二人とも地面に叩き付けられた。だがしかしゲノムの攻撃はまだ終わらない。

ゲノムの身体から伸びた触手が二人を持ち上げ、周囲にある建物に身体ごと叩きつける。

「くそっ！なんなんだ、あの怪物は！！」

「ヤバイぜ、このままじゃ殺られる！！」

ほとんど攻撃する余地さえなかった。それでも二人はどうかして触手を外そうともがく。

「うおおおおっ！！」

「パイファー！！」

「殺られる？冗談じゃないぜ。このまま何も抵抗しないまま終われるか！？」

文字通り怪力で触手を振り払ったパイファーは、鬼武をそのままにして一度アジトに戻った。

だがすぐに出てくると、その手には大型のチェーンガンが握られていた。

「ああ！それ俺のだぞ」

「借りるぞ、鬼武。待ってろ、すぐ助けてやる」

パイファーはチェーンガンの安全装置を解除し、その銃口をゲノムに向けた。

「こいつは優れものだ。30秒で200発の銃弾が襲い掛かる。い

くぞ、モンスター!!」

するとゲノムは鬼武を持ち上げたままパイフーに迫った。

「これでも食らえ!!」

パイフーの叫びと共に、凄まじい轟音を響かせながらチェーングンが火を噴いた。

「おらああつ!!」

爆炎にゲノムが消えると、鬼武は触手をすり抜け地面に落ちる。たまらず鬼武はパイフーの後ろへと後退する。

「クソツ! 仕入れたばっかなのによ!!」

鬼武が悔しがった。

「良いじゃねえか。魔界用に仕入れた物なんだろ? 早速の出番だぜ!!」

撃ちながらパイフーが言った。チェーングンにはしっかりと手ごたえを感じる。全ての弾丸が命中している証拠だ。

「うおおおおつ!!」

そこに間髪いれず、今度は鬼武が持っていたミサイルの全弾を打ち込んだ。凄まじい衝撃と爆風が巻き起こる。

更に鬼武は持っていた手榴弾の全てをゲノムに向かって放り投げる。その直後竜巻のような爆発音が響き、大地が割れた。

爆音が静まり始め頃になると、チェーングンの弾はガス欠となり、回転がゆっくりと止まる。

二人の目の前は地面が大きく凹み、まるで隕石でも落ちてきたかのような有様となった。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・どうよ!？」

さすがに撃ちつぱなしは疲れたのか、パイフーの息が上がっていた。「これでもし生きているようなら・・・」

鬼武が想像もしたくないような表情で言う

「ああ、もう打つ手はねえ・・・」

とパイフーが続けた。

事実そうであった。これでまだゲノムが生きていたら、後はもう頼

るのは己の肉体のみ。そう、肉弾戦である。

だが二人の願いは見事に碎かれた。

「ああ・・・あああ・・・そんな・・・」

「バ、バカな！！あれを受けてまだ・・・」

クレーターのようになんだ地面に、ゲノムが立っていた。それも外傷はほとんど見当たらない。ほぼ無傷である。

「どうしてだよ！！確かな手ごたえを感じたつてのに」

パイファーが叫んだのと同時に、ゲノムがゆっくりとこちらへ向かってくる。

「こ、殺される・・・」

それは絶対と呼べる恐怖・・・。あの時、ウルや紅、魔矢と会った時に感じたライオンを見るような威厳とは別次元の心の底から沸き起こる真性の恐怖。二人は身体の芯から震え上がった。

「ウットウシヤツラ・・・ハイジョスル・・・」

「く、来るぞ！」

だがその時だった。

パイファー、鬼武の後方から何かが飛んできたかと思うと、それはゲノムに命中した。

そしてけたたましいブレーキ音を響かせ、二人の真後ろで車が停車した。

「な、なんだ！何が起きた！？」

「久しぶりだな、変態バカップル」

「なっ！お、お前はっ！」

「等々力！」

そこには巨大なバズーカを手にした等々力が立っていた。

END





## 18 〱 戦闘開始！パイファー・鬼武〱（後編）

「等々力！？こいつが？」

相棒の鬼武から話は聞いていたものの、パイファーは等々力と会うのは初めてだった。

「お前、どうして魔界に・・・」

鬼武が驚いたように言った。

「まあちよつと用があつてな。つて、そんな話をしている場合じゃないだろ」

「ああ！！」

等々力のバズーカによって吹き飛ばされたゲノムだったが、やはりほとんど無傷である。

何も言わずにこちらへ向かつてくるのが見えた。

「クソッ！なんで手応えがねえんだ！？」

持っていたチェーングンを投げ捨てながらパイファーがなる。

「そんなもん何の役にも立たん。ヤツに銃撃は通用しないようだからな」

「ケッ！なんででめえにそんな事が分かるんだよ！」

「ヤツの事、ある程度知つていてな。こんなまともな戦闘じゃ勝ち目は無い。二人とも乗れ！？」

等々力はどう言つと乗つていた車のドアを開けた。

「どうするんだよ！」

「どうするもこうするもない、逃げるのさ」

「に、逃げるだっ！」

鬼武とパイファーが同時に叫んだ。

「お前ら自分たちの身の程を知った方が良いぜ。あいつはお前らの相手に出来るヤツじゃない」

「くっ！」

鬼武もパイファーもその事は薄々感じ取っていた。本能が戦う事を恐

れているのだ。

そうしている間にもゲノムはこちらへ向かってくる。

「ニガサンゾ……ムシケラ……」

「さっさと乗れ！死にたくなかったらな」

「クソッ！」

パイフーは後部座席に、鬼武は助手席に乗り込んだ。

「ちゃんと掴まってるよ、いくぜ！」

等々力の車が急発進すると、西へ向かって爆走を始めた。

「あのヤロー、追ってくるぞ！」

バックミラーを目にした鬼武が叫んだ。

「チッ！」

パイフーは窓から身体を乗り出すと、持っていたマシンガンで応戦する。

銃弾は命中するがダメージは受けていないようだった。それが証拠に向かってくるスピードは落ちない。

「等々力、もっと飛ばせ！追いつかれるぞ」

鬼武が叫ぶ。

「言われなくても分かっただらあ！」

等々力の改造車はけたたましいエンジン音を響かせ、更に加速した。鬼武も等々力の持っていたバズーカを乱射する。車のスピードが上がったおかげでゲノムとの距離は開いた。

「これじゃ何処まで走っても安心出来ねえぞ」

パイフーが撃ちながら叫んだ。

「いや、ヤツもバカじゃない。そのうち追うのを諦める」

「本当かよ！？」

「ああ、事実だ。ヤツは一度に長い時間動く事は出来ないんだ。エネルギーが減って行くからな」

「なんでそんな事まで知ってたんだよ！」

鬼武が聞いた。

「後で話す。今は飛ばすのが先だ」

そう言っと等々力の車は更に加速を増した。

ゲノムの姿が見えなくなった。どうやら追うのを諦めたらしい。姿が見えなくなってもうずいぶん経つが、等々力はアクセルを緩めなかった。

「どうやら諦めたらしいぜ」

「そうみたいだな」

パイフーと鬼武は安心したように言った。

「それにしてもお前が等々力かよ。噂には聞いていたが、ずいぶん優男だな」

パイフーは嘲笑うように言った。目鼻立ちの整った等々力は確かにそんな感じに見える。

見ようによつては紅と同じくらいの美形だ。

「優男で悪かったな。腐れヴァンパイア」

「んだとつ！てめえ」

二人とも口の悪さが共通点のようだ。

「まあまあ、二人とも。今は喧嘩している場合じゃないぞ」

鬼武がなだめた。

「お前が魔界に居るって事は、鮫島も……まあ俺は会った事は無いが」

「ああ、来てるぜ」

「鮫島まで来てんのか！ム力つく連中のオンパレードだな」

パイフーは一度殺し合いの戦いを繰り広げた相手、鮫島を思い出した。

あの時は痛み分けだったが、気に入らないものは気に入らない。

「お前何処まで知ってたんだ。あのモンスターのこと」

鬼武が切り出した。

「ヤツはゲノムと言って、見たとおり魔物だ。噂じゃ神殺しウルよりも強いつて話だ」

「な、なに！あのウルよりも強いつてのか」

「ああ。ウルサイドはゲノムを抹殺しようって事で動き出している」  
「なんでそこまで知ってたんだ、俺たちの方が先に魔界にいたはずだぜ」

パイフーが言った。

「無論、俺だつてタダで仕入れた話じゃない。2時間前まで俺はN O、2の紅とか言う少年と一緒にだったからな」

「紅!!」

「彼からいろいろ聞いたんだ。つつかまあ、彼が一方的に喋ってたんだけどね」

話し好きの紅には「口外しない」なんて言葉は存在しないのだ。

「一体どうなつてんだ、鮫島は居るは、お前は紅と繋がりはあるは、ややこしくなつて来たな」

パイフーが頭を掻きながらそう言った。

「鮫島は茨木童子を追つて魔界に来た。俺はそんな彼を無事に生還させたために来た。」

そしてウルたちはゲノムを始末しようとしている。そんな中お前たちは本当ならウルたちが手を下すはずだったゲノムにちょっかいを出し

見事に巻き込まれたつてわけだ」

「別にちょっかい出したわけじゃないぜ。向こうからやって来たんだ」

鬼武がそう言う。

「同じ事だろ。お前らはもう覚えられてるぜ。いずれ狙われる」

パイフーも鬼武もゾツとした。本心を言ってしまうばもう二度と力チ合いたくない相手である。

「んで?なんでお前が俺たちを?」

「その紅から聞かれたのさ。パイフーと鬼武つてお兄さんの仲間なんでしょ?つて」

「いつから仲間だっけ?」

「俺もそう思った。それで紅を送り届けた先でお前らに遭遇したつ

てわけだ」

「ふう、ようやく話が見えてきたな。パイファーよ」

「ああ、まったく疲れたぜ」

「あのゲノムとか言うヤツ、この後どうするんだ」

「多分、紅の下へ向かうだろうな」

「紅の？」

「もしそうなら好都合だな。No.2ならチヨチヨイと始末してくれるさ」

「ところがそうも行かない」

「なんでだ？」

「お前らはまだ知らんようだな」

「なんだよ!？」

「No.3の魔矢がやられたらしい」

「なっ!？」

意外な事実だった。勿論、初耳の情報だ。

「やられたって、まさか死んだのか、あの男が・・・」

パイファーの鬼武も啞然食らったように驚いている。

「そこまでは分からない。ただこっちへ向かう途中に出くわした殺人鬼たちが、ゲノムにやられる魔矢を見たと言っていた」

「信じられねえ・・・あの魔矢が・・・」

パイファーはかつて自分の下へ訪れてきた魔矢と紅を思い出した。

一目で分かるほど、彼らの強さをひしひしと感じたのを良く覚えている。

連中の強さは本物だ。とてもじゃないが自分たちで太刀打ちできる相手ではない。おまけにそれ以上の強さを誇るモンスターまでいる。パイファーと鬼武は改めてとんでもない世界へ来てしまった事を実感した。

「ところで何処へ行くんだ？」

「もうお前たちはゲノムに記憶されちゃったからな。とりあえず俺のアジトへ行く」

「お前のアジトに？」

鬼武の問い掛けに等々力はそう答えた。

「安心しろ、絶対に見つからない場所だ。後の事はアジトについた後ゆっくり考えれば良い」

「いずれにしてもお前のおかげで助かったぜ。一個借りが出来たな」

「恩を仇で返すような真似はしないでくれよな」

「口の悪さは鯨島ソックリだぜ」

「なんか言ったか？腐れヴァンパイア！」

「てめえゝなゝ！」

等々力の車は西へ西へと向かった・・・。

END

## 19 く最大の危機く

羅刹の体力はもはや限界だった。既に両足の膝が笑っており、正常ではなくなっている。

だがそれでも羅刹は走った。走らずにはいらなかったのだ。

あの時、魔矢はこの場で迎撃すると言って羅刹一人を戻らせた。

魔矢の言葉が現実となれば、ゲノムが魔矢居る場所から離れる事など有り得ない。

だが現にゲノムは走る羅刹を通り越し、魔界中央部へ向かって行った。

では魔矢はどうなったのか……。

嫌な予感がひしひしと伝わる中、羅刹はようやく元の場所へ戻ってきた。

「う、嘘やろ……。」

道すがら、一部の空間がクレーターのように凹んでいる。その中央部は人間の物と思われる鮮血で真っ赤に染まっていた。

そして血の海のだ真ん中に、魔矢がいた。

「魔矢……冗談やろ……おい！！魔矢！！」

羅刹は我を忘れて魔矢に駆け寄った。もはや見るも無惨な姿だった。身体中傷だらけの上に、酷い裂傷を負っている。

「魔矢、しっかりしろや！！おい！！」

魔矢の身体の上にはもぎ取れたオリハルコン・オロチがシールドの形に変化して置かれている。

とは言えもはや使い物にならない事は一目瞭然だった。オリハルコン・オロチは完全に死んでいる。

では魔矢はどうか……。

「魔矢、起きろって！」

羅刹が魔矢の身体を抱き起こし激しく揺ると、わずかだが魔矢の口から呼吸の音が聞こえた。

だがゲノムの攻撃によつて目を損傷しているため、瞳は開かなかった。

「ら、羅刹・・・か・・・」

「魔矢！死んだかと思つたで！」

しかし喜んでいる場合ではない。もはや魔矢は虫の息である。一刻も早く適切な処置を施せる場所へ運ぶ必要がある。

「どうして・・・戻つた・・・」

血塗れの魔矢が呻く。

「途中でゲノムがワイを通り越していくのが見えたんや」

「ゲノム・・・が・・・」

「そや。気になつて戻つてきたんや」

「ば、馬鹿な・・・事を・・・」

「そんなんでもええわ！行くぞ！」

そう言つと羅刹は魔矢をおんぶし、歩き出した。

「お前との決着・・・も、もう着けられん・・・ぞ・・・」

「そうかも知れへん。けど、死ぬよりマシやて」

「こんな・・・姿じゃ・・・何の役にも・・・立たん・・・」

「せや。せやけどな・・・お前が死んだら由佳ちゃんはどうなんねん！？」

「由佳・・・」

光を失つた魔矢の瞳がわずかに開いた。

「誰が由佳ちゃんを幸せにすんねん！？由佳ちゃん泣かせたら承知せえへんからな」

「羅刹・・・お、お前は・・・」

「ええよな、お前は。あんな出来た子に好かれよつて。羨ましいわ」

「ま、まだ・・・死ねんか・・・」

「そつや！！もうちよい頑張りいや！！」

「すまん・・・出来るだけ急いで・・・くれ・・・紅が危ない」

「ああ、分かつとる！」



「さっきの攻撃、凄かったな」

自分たちのアジトで外を見ていた紅はしばらく様子を伺った。

紅の言うさっきの攻撃とは、パイファー・鬼武・等々力の三人による攻撃の事だが

その事を紅は知らない。

「だけど、もうすぐここでも同じ事が起こる……」

紅の視線の先にあるモニターにはゲノムの姿が映っていた。紅はそれを見ている。

紅には全てわかっていた。ゲノムが自分を狙っている事を。

そしてゲノムがここへ現れたという事は、魔矢と羅刹は……。

考えたくも無い事実だが、煉獄に向かった魔矢と羅刹が、ゲノムに遭遇していない可能性は極めて低い。

そしてそのゲノムがここへ来たという事は、二人はゲノムに……。

そう考えるのが妥当だったが、紅はそのシナリオを掻き消した。

魔矢と羅刹の二人が揃ってやられるはずがない。紅はそう信じている。

もはや後には引けない。紅はモニターの端にあるボタンを押した。

このボタンはウルに緊急事態を伝える特殊なボタンである。ボタンを押したのと同時に緊急の伝言がウルの持つ携帯電話に繋がるようになっていいる。

例え留守電でもウルは必ず気付くはずだ。

「ウル、とうとうゲノムがやって来た。これから迎え撃つ。もし生きていたらまた会おうね」

紅はそれだけ吹き込むと、ボタンを解除した。

「もし、生きていられたらの……話だけだね」

紅は腰から天叢雲剣あめのむすぶるきを引く抜き、鞘を捨てた。

「この刀を使うのも、今日が最後だね。鮫島のお兄さん、元気かな。最後にもう一度戦ってみたかった」

紅はそれ以外何も持たず外へ出た。

ゲノムはアジトのすぐ前まで来ていた。

「久しぶりじゃん、ゲノム。相変わらず禍々しいね、お前は」

「ウルノナカマ・・・ミツケタ・・・コロス・・・」

「お前なんかに殺されてたまるか。魔矢と羅刹はどうした!？」

「イマゴロ、アノヨ・・・」

「そっか。けどあの世へ行くのはお前だよ、ゲノム!!」

紅は天叢雲剣を両手で構えた。

紅の最後の戦いが始まる。

END

## 20 　　紅が真紅に染まった日

紅の天叢雲剣は確実にゲノムを斬り付けている。おまけに状況は明らかに紅の劣勢。

だが人間である紅の身体にはスタミナと言うものがある。

人間ではないゲノムにはそれがない。

「明らかに僕の方が勝っているはずなのに」

紅の動きはもはや神業とも言える。あまりにも素早い動きに、その姿を視界に捉えることすらできないのだ。

だがそれでもゲノムの猛攻は留まる事を知らず、致命的なダメージとは言えないものの、ヒットしているのは事実だった。

素早い動き・・・逆に言えば「捕らわれたら最後」を意味する。ゲノムはそれを狙っているのだ。

「このままじゃキリがない。一気に決めるか」

攻撃を止めた紅はまっすぐにゲノムを見据え、こう言った。

「戦う場所を変える。僕を殺したいのなら付いて来い！」

紅はアジトの北西にあるプレハブへと走った。無論、ゲノムも追ってくる。

とても綺麗とは言えない建物だが、紅に取っては慣れ親しんだ遊技場。

別名「処刑場」である。

プレハブの扉を開くと、紅は特殊なルートで奥へと移動し、正面を見据えた。

それとほぼ同時にゲノムが扉の前に現れ、紅を視界に捕らえた。

「ようこそ、僕の処刑場へ」

そこには世界中から集められた処刑の道具が納まっており、その一つがトラップとなっている。

つまり紅が通った特殊なルートを進まない限り、処刑のトラップが始動し、文字通り処刑されるという部屋である。

無論、紅としてはこれだけでゲノムを始末できるとは思っていない。単純に自分の下へ来るまでの間

少しでもダメージを与えようという作戦だった。

「数年前、お前と戦ったときは煉獄だったからね。僕の本当の強さを出せなかったけど、今回は違う。」

今はこの部屋がある、そしてこの剣もね」

「グルルルルル・・・」

「来れるものなら来てみる、お前がここまで来た時が最後だ」

ゲノムに反応は無い。あるのは強烈な殺意。ゲノムはそのまま直進で紅に迫った。

同じ頃、人間の世界で一仕事終えたウルは紅の伝言を耳にし、さすがに驚愕した。

「バカなっ！ゲノムが動くには速すぎる」

いくら数年経っているとは言え、ゲノムが本格的に動き出す時期ではない。

だが魔矢が言っていたように、前回よりも強くなっているのなら、その可能性もあるのかも知れない。

「さて、仕事も無事終わったわけだし、どうかね鉄君、宴会でも」

「いや、俺はこれで失礼する」

ウルは焦った。もはや一刻の猶予も無い。

「そうかね？せっかく一流のディナーを用意していたんだが」

「すまないが、もう行く」

そう言い残すとウルは大急ぎで魔界へと向かった。

今回の仕事は都心から離れた場所で行なわれたため、魔界へ戻るまで時間が掛かる。

ゲノムが紅の前に現れたと言う事は、魔矢はどうなったのか・・・。そして同行しているはずの羅刹は・・・。

「まさか・・・」

ウルの脳裏に最悪のシナリオが浮かぶ。いずれにしても時間が無い。紅に死が迫っている。

「くそっ！」

ウルの悪い予感、この後見事に的中する……。

「そんなバカな……」

もう4つの処刑道具によってダメージを受けているはずのゲノムだったが、その勢いは衰えと言言葉知らない。

身体に至る部分が切断されても、ゲノムはその度に再生し元に戻ってしまう。この辺はヴァンパイアと同じようだ。

姿形こそ変化しても、その殺意に変化は無く、より一層禍々しいものに変化している有様だ。

やはり処刑道具で始末できるほど生易しい相手ではなかった。

これが通常の殺人鬼だったら、トラップを抜け出せないままあの世行きだが、ゲノムは例外だった。

「やっぱりこれに頼るしかないのか」

紅は天叢雲剣を構えた。ゲノムはもはや目の前である。

天高く跳躍すると、天井に仕掛けてあった岩石をゲノム目掛けて突き落とす。

だが俊敏な動きを見せるゲノムはそれを避けると、落下してくる紅に触手を伸ばした。

「うわっ！」

両足を掴まれた紅はそのまま大きく揺さぶられ、壁や地面に激しく叩きつけられる。

「ぐうう……」

しかしそれで終わる紅ではない。天叢雲剣で触手を切断すると、反撃に出た。

鋭い刃はゲノムの両腕と、軸になっている足を切り抜き転倒した。

「一気に行くよー!!」

紅は再び跳躍すると、高い地点から一気に落下し、天叢雲剣をゲノムに突き立てた。

「ギョオオオオオッ！！」

まるで悲鳴のような雄叫びが響く。突き刺さった場所から大量の血が流れ、紅に大量の返り血が舞う。

「お前さえ居なくなれば・・・お前さえ消えれば僕たちは！」

鬼の形相と化した紅は我を忘れ一心不乱に天叢雲剣で切り刻む。

それは魔界へ来る前、ウルに殺人を依頼したときの表情とソックリであつた。

「お前は魔矢を・・・羅刹も・・・死んじまえ！！」

紅の頭のネジが飛んだ瞬間に味わったもの、それは呆気なく訪れた敗北であつた。

「なっ！・・・こ、これ・・・は・・・」

あまりにも突然の事で何が起つたのか分からない。だが紅の身体はその名前の如く真つ赤に染まってしまった。

「か・・・かああ・・・」

まさに一瞬だつた。ゲノムの身体から無数の触手が鋭い刃と化し、紅の身体を貫いたのだ。

それも一本や二本ではない。合計18本もの触手が紅の肉体の至る箇所を完全に貫いた。

首、両腕、両足、腹、胸、腰・・・18本の触手は全て紅の身体を貫通した。

「ウ・・・ウル・・・ご、ごめ・・・ん・・・」

紅の口から大量の血が吐き出されると、紅の視界に闇が訪れた・・・。

「フタリメ・・・カンリヨウ・・・」

紅の身体から触手を突き放すと、ゲノムはピクリとも動かない紅に向かってそう言った。

E  
N  
D

## 21 孤独へ・・・

「こ、これは！」

紅からの伝言を受け取って1時間余りの時が過ぎた頃、ウルはようやく魔界へと戻ってきた。

珍しくウルの呼吸は激しく乱れており、大急ぎで戻ってきた事が伺える。

魔界はそれまでの風景とは一転し、至る所で炎と煙が立ち込めている。

明らかに何らかの戦闘があった事が見て取れる。

特に酷いのが魔界の中心部。まさにウルたちのアジトがある付近だった。

「紅・・・魔矢・・・」

ウルは我を忘れアジトに急いだ。

アジトの外観に変化は無い。だが明らかに血の匂いがする。それも親しい誰かの。

しかしアジトに人の姿は無かった。紅も魔矢も、そして同行している羅刹の姿も無い。

紅がウルに伝言を送るにはこのアジトにある機材が必要となる。となると少なくとも紅だけは近くに居るはずだった。

ウルの脳裏に浮かんだ場所があった。それは紅の遊技場である。別名「処刑場」だ。

「紅！！」

ウルは紅の名を叫びながら処刑場へと急いだ。

案の定、処刑場は乱れており、そこで戦闘が起こったことは事実だった。入り口のドアは開け放たれ中の様子が見える。

「紅・・・お前、まさか・・・」

ウルの視界に処刑場の中央で倒れている人間の姿が映った。

もはや見間違えなど有り得ない。それは変わり果てた紅だった。



「紅!!」

駆け寄るとウルは真紅に染まった紅を抱き起こした。身体中から血が噴き出ており、意識は無かった。

恐らくゲノムの触手が原因だろう。幸いな事に心臓部と頭に傷は無かった。

ウルは咄嗟に紅の胸に耳を当てた。

「生きてる……紅、しっかりしろ!」

極わずかだったが心臓の鼓動が聞こえた。だが鼓動は止まりかかっていた。一刻も早く適切な処置を施す必要がある。

その時ウルの背後で物音がした。

「誰だ!」

「ワ、ワイや……」

「羅刹!!」

そこには魔矢を背負った血塗れの羅刹が居た。

「魔矢が……やられよった……まだ生きとるが……急がな、あ、あかんで……」

紅に続き魔矢まで変わり果てた姿になっている。

羅刹も魔矢との戦いで追った傷が開いているようで、全身ほとんど血塗れだった。

その後ウルは由佳に連絡を取り、魔界で唯一医療器具が揃っている施設へと移動した。

この施設は地下に伸びており、地上からは見えない場所にある。

そのためゲノムに見つかる可能性も極めて低いのだ。

魔界で傷を負った殺人鬼たちが自分たちの足で訪れ、自分たちで治療を施す場所である。

それでも専門の医師がいた。彼の名前は夜叉よっせ

数年前までは最上級レベルの殺人鬼だったが、今は殺戮を止め医師に専念している。

夜叉は運ばれてきた紅と魔矢を見て、即座に手術に取り掛かった。

一人では手に負えないという事で、彼は由佳を助手に付け手術を行なった。

羅刹の傷は紅と魔矢ほどではなく、元から治療に関する知識を持っていたことも手伝って

彼は自分で治療を行なった。身体中が包帯塗れになったが、傷は浅く、すぐに立ち上がった。

二人の手術は有に12時間掛かった。

始まって8時間が経過すると、助手の由佳だけが出てきた。どうやら後は夜叉のみで出来るらしい。

羅刹は由佳の反応が気になった。いくら死んでいないとは言え愛する人があのような姿になってしまったのだ。

オペ室から出てきた由佳は何も言わず、そのままトイレに入った。そしてそれから1時間、彼女は出て来なかった……。

12時間後、夜叉はオペ室から出てきた。紅と魔矢はベッドに寝かされたまま別室へ運ばれた。

「夜叉、二人は……」

「ああ、実に危ないところだったが、何とか一命は取り留めた」「ホンマか!？」

一緒に居た羅刹が歓喜の声を上げた。そして少し離れた場所に居た由佳もホッと胸を撫で下ろす。

「だが危険な状態だ。まず紅だが、もはや二度と戦うことは出来ないだろう」

「な、なんでや!? 助かったんとちゃうんか」

「命はな。だが体の方はもはや限界。貫かれた神経は完全に使い物にならん。」

オペによって何とか繋ぎとめたが、戦いはもう無理だ。日常生活には支障は出んがね」

「魔矢は?」

ウルが聞いた。

「魔矢も同じだ。切り裂かれた臉の傷は浅く、失明は免れたが、削がれたオリハルコン・オロチはもう再生出来ん」

この事実には由佳もショックだったらしい。失明するよりはマシだが、事実上片腕を切断したのと同じだからだ。

「なんでやねん！！もつと良く診ろや！！戦えへんのじゃ意味ないんじゃ！！」

羅刹が夜叉に掴み掛かった。

「無理なものは無理なんだよ！あの状態で助かっただけでも良かったと思ってくれ！」

「くっ……」

「魔矢……」

由佳は魔矢と紅の居る部屋へ向かった。

それにつられる様に、ウルと羅刹も部屋に入った。

紅と魔矢は身体中に包帯を巻かれ、静かに横たわっている。口には呼吸用のマスクが付けられており重傷が伺える。

紅は意識が無い。魔矢も時折魔される様に動く程度だった。

「ゲノムを見たのか？」

ウルが羅刹に聞いた。

「ああ。おぞましい姿やった……魔矢はワイにゲノムが出た事を紅に伝える言ったんや。

それで戻ったんやけど、途中でゲノムがワイを追いついて行きよって……心配になって戻ったらこの有様やった」

「そうか」

ウルは続いて魔矢のベッドの横で座っている由佳の背中を見た。

背中を向けているので表情は分からないが、由佳の両肩が小刻みに震えていた。

決して人前で泣くような女ではないが、無理も無い。この姿を見たんじゃ……。

「由佳ちゃん、ワイ由佳ちゃんに誤らなあかんねん」

「なに？……」

「ワイ、魔矢と一緒にあったんや。せやから一緒に戦うことも出来た。けどワイは・・・」

「良いよ、そんなこと」

「けど・・・」

「きつと魔矢が逃げろって言ったんでしょ」

「まあ、そうなんやけど・・・」

「だったら誤る事ないじゃない。それに、あなたが逃げるような人じゃないって事くらい、私だって分かってる」

「ホンマ、すまん。ワイ、何も出来へんかった」

「ううん、してくれたよ。魔矢を運んでくれた。ありがとね」

羅刹の拳が震えた。これほどまで自分が情けないと思った事はなかった。

バーサーカーが聞いて呆れる・・・羅刹は自分を不甲斐なく感じた。

だが不甲斐なく感じていたのは羅刹だけではなかった。ウルも同じだった。

共に戦ってきた仲間がこんな目に合わされた。もしあの時仕事へ行かず二人と一緒に居れば

紅も魔矢も、こんな姿になることは無かっただろう。

ゲノムを一番甘く見ていたのは他ならぬウルだったのだ。

やはり魔矢の言った通りだった。蘇ったゲノムは以前にも増して凶暴になっている。

静かに横たわる紅の隣に、ゲノムによって折られた天叢雲剣があった。

凄まじい怒りと憎しみがウルの心に広がる。

「二人を頼む」

「なんやて」

そう言つとウルは病室から出て行った。

「おい、ちよつと待てや！何処行くねん!？」

「煉獄・・・ゲノムを倒す」

「バカかワレ！ワレ一人でどうにかなるとでも思つとるんか」

「ヤツを倒せるとすれば、それは俺だけだ」

「仲間やられて頭のネジ一本飛んだようやな！今だからこそ魔矢が言つたように他の連中を見方に付けるべきやで！」

「これ以上巻き込みたくない。これは俺とヤツとの戦いだ」

「あつ！ちよ、待て！コラ！」

そう言つたウルは目は心なしか悲しそうだった。

羅刹がウルを引き止めようとしたとき、病室から声が聞こえた。

「まだ動いちゃダメだつて！」

「うつ・・ウ、ウルは・・ウルは何処に居る」

「ウルなら行つてもうた」

「羅刹」

そこには意識を取り戻した魔矢が由佳に押さえられていた。

「あのアホ、全然人の話聞かへん！ごつつム力つくわ」

「ら、羅刹・・これを」

「なんや？」

魔矢はポケットの中から一枚のメモを取り出した。

「ん？パイフー・鬼武、鮫島、等々力・・？・・なんやこれ？」

メモには彼らの特徴と住んでいるであろう場所の住所が書かれていた。

「恐らくウルは煉獄へ向かつた・・だ、だが、ウル一人で手に追えるほどゲノムは甘くない。

そこに書かれている連中は、最近魔界へやってきた者たち。いずれも強豪ばかりだ」

「ああ、さっき話していた連中か。徒党を組むかも知れへんって言  
う」

「そ、そうだ・・。羅刹、ウルと合流する前に、そいつらを探し  
出し手を組め。

癖のある連中ばかりだが、おそらく興味は持つだろう。連中と徒党  
を組んでゲノムを倒せ」

「せやけど、ウルのヤツは誰とも組まない言うてたやん」

「それはヤツが勝手に思っている事だ。実際に集めて向かえば、ウルも文句は言わないはずだ」

「そんなもんかね？名前の下に書かれとるんが住所やな」

「ああ、だが必ずしもその場所にいるとは限らん・・・移動している可能性もある」

メンバーとしては紅と魔矢を差し引き、ウルを含めた合計6人という事になる。

「ええけど、どいつもこいつも遠いところにいそうやな」

「恐らくな。しかし心配は要らん。由佳の店の隣に大きなガレージがある、そこに車があるから自由に使ってくれ」

「ほほう、用意のええ男や。まあええ、分かった。安心せえ、お前の仇はちゃんと討つたるさかい」

「勝手に殺さんでくれ・・・重傷とは言えまだ生きている」

「へへへ、そうやったな。ほな、行ってくる」

「頼んだぞ・・・」

そう言うのと羅刹は受け取ったメモをポケットに仕舞い、部屋を後にした。

「ちよつと待つて！？」

「ん？なんや？」

引き止められた言葉の主は由佳だった。

「私も一緒に行くわ」

「な、なんやてっ！！そらあかで！相手はゲノムやぞ」

「分かつてるわよ。ゲノムが蘇った以上、何処にいても結局危険なのよ」

「せ、せやけど・・・」

「魔矢も言つてた。いざつて時はここに居るよりも、あなたたちと一緒に居た方が逆に安全だろうって」

「でも魔矢はええのか？」

「あの人は大丈夫。自分でも大丈夫って言うてた。魔矢と紅君は夜

「又が付いていけば平気よ」

強い女と言うのは由佳のような女の事を言うのだろう。最愛の人があんな姿になってしまったというのに

なんと心強い事が分らない。羅刹の心は度肝抜かれた。

「それに人探しながら一人でやるよりも二人の方がずっと速いわ」

「ま、まあそうやけど」

「私だって魔界の住人なんだから。見過ごせない」

「わ、分かった。それやったら行こう。せやけど、約束や。全員が集まってゲノムと戦うことになったら

由佳ちゃんはこちらへ戻る。それだけは守ってもらうで。ええな？」

「分かった」

二人は病院を後にし、ひとまず由佳の店へと向かった。

END

## 22 強豪探し

主の戻った煉獄の地下に地響きが轟く。まるで人々の憎しみを溜め込んだようなマグマが流れる。

久しぶりに激しい運動を繰り返し、体力の消耗したゲノムは、そのマグマの中で身を屈めた。

夥しい数の怨念が支配するこの醜い身体は、連続して動く事が出来ない。

圧倒的な強さを誇るゲノムでも、その辺だけは唯一の弱点である。

携帯電話の充電をするように、疲労するとこのマグマに身を沈めなければならなかった。

だがしかし、もはや焦る事はない。ゲノムが動かなくとも、最大の標的は自分からやって来るだろう。

そのターゲットを始末した後、この魔界を破壊し、表の世界へ出る。そのためにはヤツを始末しなきゃならない。

我が子であり、我が最大の宿敵「神殺しのウル」を……。

「しばらく使ってなかったから大丈夫かな・・・」

ガレージの扉を開けようとした由佳がそう言った。

「最後に使ったのは何時なん？」

「何時だったかな、覚えてないけどもうずいぶん前なのよ」

「それやと動くかどうか心配やな」

由佳がガレージを開けると、そこには一台の車が停めてあった。

「こ、これってブレイドやないか!!」

ブレイドとはトヨタから出ている有名な車種の一つである。

停まっているブレイドには少々ほこりを被っているが、新車同然の代物だ。

「そうよ。魔矢が緊急用に使うためにここに置いているの」



「かあゝさすがリアル世界の警視總監やな。所有する車も超一流つてわけかい」

「ところであなた、運転は出来るの？」

「ワイか？ワイはな・・・そりやまあ・・・なんちゅーか・・・出来ないわけでも無いんやが・・・その・・・」

由佳の目が据わっている・・・。

「免許持っていないのね」

「ちょ、まっ、えっと・・・ガハハハ！！ワイ、車の免許無いんや・・・」

「まったく！！ホント、世話が掛かるわね、アンタは！！」

「しゃ、しゃーないやんか。ワイ、車興味無いねん」

「使えない男・・・」

「そ、そんなあゝそないなと言わんといてえな」

紅・羅刹のコンビよりも、羅刹・由佳の方が芸人向きである。

無論、由佳も本心でそう言っているわけではない。羅刹と言うキャラがすっかり定着しているのだ。

由佳は運転席のドアを開け乗り込んだ。羅刹もそれに続いて助手席に乗り込む。

「由佳ちゃん、免許持ってるんか」

「まあね。トラックだつて運転できるわよ」

「ひええゝ頼もしいわあゝ羅刹ちゃん、ドッキドキ」

そう言っていると羅刹は目を輝かせた。

「一度死ぬ？」

「じよ、冗談です。ハイ・・・」

抜け目が無いと言うか、緊張が無いと言うか。

「それで、何処行く？」

「そやな。とりあえずメモに書かれているのはパイパー、鬼武、等々力、鮫島の4人や。

魔矢の調べに寄れば、パイパーと鬼武は一緒における可能性が強い。鮫島は魔界の鍋蓋とか言う場所。

等々力とか言うヤツに関しては消息不明って書かれとるな」

「ここから一番近いのは何処になるんだろう」

「ん」と、ああ、住所が書かれとるな。一番近場はパイファー・鬼武の二人。ここからすぐ近くや」

「じゃあ、近い場所から行ってみましょう」

「おっしや！」

由佳はエンジンを掛けるとブレイドを起動させた。ブランド名の負けない排気量と運転環境である。

「ワイも今度車の免許取りに行こ」

「教官が気に入らないとか言って暴れないようにね」

「そんなあ、いくらワイでもそないな事せえへんよ」

「そうかしら？」

「そうや。ワイだってやる時はやる男やねん」

「やる・・・が殺るに変わらない事を祈るわ」

「上手い！由佳ちゃんに座布団三枚や！」

何とも緊張感の無い二人である。

目的の場所に辿り着いた羅刹と由佳の目に飛び込んできたのはまるで月のクレーターのようには凹んでいる広大な大地だった。

「なに、これ・・・」

「ここで何かあったんやな。ま、明らかに戦闘やけどな」

大地の凹み具合から察するに、一定の方向から集中的に攻撃したと見て間違いなかった。

更に破壊された大地の規模から推測するに、少なくとも二人以上の人間がいたのは明白である。

「ここで誰かが戦ったのかな」

「多分な。住居がこの辺である事を考慮すると、その中にパイファーと鬼武が含まれていた可能性が高いな」

「魔矢の書いた住所に行ってみよう」

「そうやな」

そこはすぐに見つかった。クレーターから離れる事およそ300メートル。

そこにパイフーと鬼武が居たと思われるアパートがあった。

羅刹は聖魔刀で鍵を外し、中に入った。部屋の中はつい先ほどまで住人がいたような痕跡が残っている。

「どうやらさつきまで人がおったようやな。けど何らかの理由で別の場所へ移動しおったんや」

「あのクレーターが関係しているのかしら」

「そうやろうな。多分二人を襲ってきたんや。勝敗はそうなったか分からへんけど、それが原因で去ったんやな、きつと」

羅刹はしばらく部屋の中を調べた、由佳は外の様子を伺っている。ベッドが酷く乱れているのが印象的だった。パイフーの鬼武も男だと聞いていたが、まさか同性愛者なのだろうか……。

「ねえ、羅刹。ちよつと来て」

「どないしたんや」

「これ見て」

由佳はブレイドのすぐそばにあったタイヤの後のような痕跡を指差した。

「これってタイヤの跡だと思わない？」

羅刹はブレイドのタイヤと残っていたタイヤの形を見比べた。

「ホンマや。車のタイヤやな」

「思うんだけど、パイフーと鬼武の他に誰かが来たんじゃないかな」

「誰かが来た？」

「うん。この魔界で車を所有しているのって、実は魔矢だけなのよ。この車も魔矢の物だし。」

彼以外に、今まで魔界の住人が車を使うなんて聞いたことが無いわ。これにっちを見て」

羅刹は由佳の指差す方向を見た。そこにはわずかだが同じタイヤの跡が残っており、それは西の方角で途切れている。

「ここから西へ向かってるわ」

「ははあゝん。なんとなく見えて来たで。つまりこう言う事や。パイフーと鬼武は何者かを戦った。」

そこに予期せぬ誰かが車に乗って現れた。二人の部屋に生活臭が残っていた事を考えると

二人はその誰かの車に乗って逃げたんや。戦っていた相手があまりにも強すぎて」

「その戦っていた相手って・・・もしかして・・・」

「ああ、ゲノムやろうな。ゲノムのヤツ、魔矢を倒して紅のところに行く前に、パイフーと鬼武を相手にしたんや」

「タイヤの跡、調べてみようか」

「そないなこと出来るんか？」

「それがブレイドの秘密なのよ」

由佳は得意げな表情で運転席に戻った。そしてフロントガラスの横についていたモニターをオンにした。

「これはタイヤの痕跡を特定する機会なの。タイヤの痕跡を画像としてアップすると

その車が何処に向かったのか、ある程度判別が付くの」

「ほへえゝお利口さんやな」

「魔矢の持っている物って全部便利な物ばかりなのよね」

由佳はタイヤの痕跡を撮影し、画像としてアップした。

するとモニターには「判別痕跡、西の方角。推定場所、魔界処理場」と表示された。

「魔界処理場ってなんや？」

「魔界のゴミ捨て場のような場所。使い古しの機械や武器などがまとめて捨てられる場所よ」

「そこへ向かったつちゅうわけやな」

「そうだと思う。けど、なんで処理場なんかに・・・」

魔界処理場は魔界の最西端にある工場である。中心部ほど人の出入りは激しくは無いが、それなりに栄えている場所だ。

謎の車はその場所へ向かった可能性が強い。

「由佳ちゃんは知ってるんか？その処理場」

「勿論よ。何度か行った事あるしね。行ってみようか」

「レッツラ・ゴーや！」

羅刹と由佳を載せたブレイドは、魔界最西端「魔界処理場」へ向かった。

END

## 23 〴〵魔界処理場

ブレイドは約1時間ほど停まる事無く西へ向かって走り続けた。その間車内の羅刹と由佳は、時折冗談を交えながら会話を続けていたが

その流れを100%楽しむ事は出来なかった。これで紅、魔矢が健全であれば言う事は無いが

今となっては魔界屈指の彼らは不在も同然。その頂点に立つウルは単独行動と来ている。

自分たちがこの戦いの鍵となる事を承知している羅刹の頭の片隅には常にゲノムと言うおぞましい存在があった。本音を言うならもう二度と戦いたくない相手である。

しかし魔界に來た運命は決して変えられない。来てしまった以上、関わらざるを得ないのだ。

それは新参加者と謳われるパイパー・鬼武・鮫島・等々力も同じである。

彼らが自らの意志で魔界へ來た以上、ゲノム撃破と言う現実から逃れる事は出来ないのだ。

関わりあう事を避けようとも、既にその魔界でド派手に動いている以上、無視するわけは行かない。

例えば彼が協力する事を拒もうと、上級ランクの殺人鬼には絶対服従と言う掟がある限り、従わせるしかない。

魔界No.2、No.3を失った今、ウルを覗けば次の実力者はNo.4の羅刹が事実上のリーダーと言う事になる。

本来ならウルがその役割を果たすはずなのだが、神殺しと言う異名や魔界No.1などと言う榮譽には興味の無いウルはその権利はあっても義務は無いのだ。彼が魔界の掟を作ったと言うのなら適任なのだが

掟を作ったのは暗黙の了解であり、人工的な作為はない。

むしろ魔界を管理していたのは魔矢と言って良い。魔界唯一の良心が魔矢であった。

だがその魔矢はもはや戦えない。となると否が応にも羅刹がそのポジションに来る事になる。

魔界と言う突然変異的な場所を既に気に入っている羅刹に取っても、諸悪の根源を絶つ必要があると言うことくらい分かっていた。

「あれが魔界処理場よ」

左手でハンドルを握ったまま由佳が指差した。

「なんか、ごつつ根暗な雰囲気やな」

「まあゴミ捨て場だからね」

そこは夥しいほどに積み上げられたガラクタの山が無数に点在していた。

ガラクタの山はまるで堀のようになっており、その中央にある廃墟を守っているようにも見える。

廃墟は4階建てのビルのような建物で、窓ガラスはほとんど割れており、コンクリートの壁も所々劣化が進んでいる。

「でも変ね。以前来たときはあんなもの無かったんだけど・・・」

「なんや？」

「屋上を見て。あれ、なんだろう」

羅刹と由佳は目を凝らして屋上を見た。そこには今にも発射しそうな大砲やバズーカが無造作に設置されている。

「ねえ！今屋上で何か動かなかった！？」

「そか？ワイには見えなかったんやけどな」

と、羅刹が呑気にそう言った時だった。

走るブレイドの進行方向で何かが落ち、大爆発が起こった。

「きゃあああっ！！」

「ぐわっち！！」

由佳は咄嗟にハンドルを切り、難を逃れた。

「見て！屋上から誰かがこっちに撃ってるわ」

「な、なんやてっ!!」

屋上に設置された無数の大砲、そしてバズーカが火を噴いた。

「あわわわっ! あ、あかん! 由佳ちゃん、避け! 避け!」

「分かつてるわよ!!」

見事なハンドル捌きである。

ブレイド目掛けて飛んできた銃撃は、地面の至る所で大爆発を起こした。

「コノヤロ! やめれ!! ワイたちは敵やないで」

いくら叫んだところでまだ距離があるため無駄だった。

「クソッ! あの車の運転手レーサー並だぜ! 全部避けやがって!」

パイフーから受け取ったバズーカの弾を止めながら鬼武が言った。

「等々力の車とは別の車だよな。またバウンティハンターかよ」

やれやれと言った表情でパイフーがこちる。

「こんな事なら等々力と一緒にに行けば良かったかもな」

「冗談じゃないぜ! アイツは鮫島の下へ向かったんだろ? 俺は嫌だからな」

今度会ったら殺し合い。それはパイフーと犬猿の仲である鮫島との暗黙の了解である。

「ったくこんな時に好きだの嫌いなのって。世話が掛かる」

「お前に言われたくないぞ! 黒猫!」

「ああ! ? だゝれが黒猫だって! ?」

そんな痴話げんかをしている間に車はビルの真下で停車した。

パイフーと鬼武は咄嗟に身を屈め、下の様子を伺う。

「おい、女がいるぞ」

望遠鏡で下の様子を見ているパイフーが言った。

「俺にも見せる・・・。ホントだ、女だ。それに片割れは男か。なんだあの真っ黒な服装は。センスねえな」



「ハックシヨン！！ブルル、おお〜さぶ！誰やワイの噂しとるやつは」

「あんたの噂なんて誰もしないわよ」

「そ、そんなあ〜吊れない事言わんといて〜」

パイパー・鬼武 「なんだ、あいつは」

「ちよつとそこのあんたたち！！」

ビルの真下から由佳が叫んだ。

「な、なんだ一体」

二人とも手すりから下を見た。

「な、なんだてめえらは！！」

「なんだじゃないわよ！！せつかくこつちから出向いて上げたのに、バズー力で攻撃するなんてバカじゃないの！？

あやうく事故るとこだったじゃない！！」

その前に死ぬと思うのだが……。

羅刹はもはやあんぐりである。

「今そつち行くからね！首洗って待つてなさい！」

そう言う由佳は猛然とビルの階段を駆け上がった。

「パ、パワフルやな……」

「おいおい、あの連中来るぞ。どうするよ！」

「どうするたつて、ここ屋上だし逃げ場無いぜ」

「だから言ったんだよ。いきなり攻撃はやバイって」

「しょうがないだろ、あのゲノムとか言うモンスターだったらどうするんだよ」

「考えてみりゃあのモンスターが車運転するなんてあり得ない話だぜ！」

「い、今さら言っても遅いだろうが」

と、その時、屋上に繋がる扉がボタンと開いた。

「ひい！で、出た！！」

「私は幽霊か！！」

パイフーと鬼武が縮こまる。

「さあ、観念しなさい！どっち！？バズーカ撃つたのは！！」

「お、俺じゃないぜ」

パイフーは目の前で手を振った。

「お前！裏切るのか！？」

「あんたね！！」

由佳はズカズカと鬼武の前に歩み寄り、目の前で停まった。

「あんた、どういう神経してんのよ！！死ぬとこだったじゃない！！」

「あ、当たり前だろ！！殺す気で撃つたんだからさ！！」

「敵じゃないって羅刹のバカが叫んだの聞こえなかったわけ！！」

そ、そりや無理だぞ由佳 作者（^^;）

「聞こえるか！そんなもん！！」

「ゼエ・・・ゼエ・・・バ、バカ言わんとして・・・あ、あかん。足がもう限界や」

ようやく屋上に辿り着いた羅刹が半ばギブアップ状態でやって来た。

「おいおい、大丈夫かよ」

今にも死にそうな羅刹にパイフーが近づく。そして肩を貸し、羅刹を立てせた。

「おおきに。な、なんで由佳ちゃんは息切れてないねん・・・」

「さ、さあな・・・あの剣幕じゃ出るにすらねえ・・・」

由佳と鬼武の攻防は尚続く。

「あんたでしょ、鬼武って男は」

「だったらなんだってんだ？」

「まったく曲がりなりにもあの巨漢の連れなら、もっとおしとやかにしたらどうなの！？」

「な、なんだと！！」

「あの巨漢って・・・俺の事か・・・？」

パイフーが羅刹に聞いた。

「せやろうな」

「あんた以外誰がいるって!？」

「ひいい!!ゆ、由佳ちゃんマックス状態や・・・」

「こ、こええなこの女・・・良い女だけど」

「なにっ!!」

パイフーの一言を聞き漏らさなかったのは鬼武だった。

「おい、パイ公!？お前今この女の事良い女って言っただろ!？」

嫉妬深い鬼武の矛先が変わった。

「え、あ、いや・・・別に深い意味は無いぜ・・・うん・・・」

「コノヤロ!俺と言う相手がいながらてめえってやつは!!」

「オホホ、彼言い事言うじゃない。まあ、事実だしね」

「なに!？」

またまた力チンと来る鬼武。

「このアマア!!ちよつと可愛いからって調子に乗るなよ!!」

「フン!嫉妬深い女男に言われたくないわね」

「なんだとお!!」

「なによっ!!」

パイフーと鮫島が犬猿の仲であるように、どうやら鬼武と由佳も犬猿の仲のようだ。

恋愛と言う世界において、鬼武と由佳は常に受身の側である。

分かり易く言い換えれば、本来の恋愛においては形式上、男がパイフーで女が鬼武と言う構図になる。

つまり同じ女・・・鬼武からすれば「女役」だが、二人とも同じ共通点を持っているという事になる。

そのため気が合う合わないはどうしても露骨になってくる。それが著しく悪い方向へ出るのが鬼武と由佳のようだ。

「ちよつと羅刹!私嫌よ、こんなヤツ仲間にするなんて!!」

「ふざけんな!おいパイフー!俺も嫌だぜこの女!気に入らねえ!なんとかしろ」

パイパー・羅刹 「そ、そんなこと言われてもさ・・・」 (^ ^ ;)

このユニークなやり取りは、その後2時間ほど続いたとさ。

END

## 24 新たな仲間

「ふん。その等々力とか言うヤツは、鮫島とか言う男の下へ向かったつちゆうことか」

由佳と鬼武の喧嘩が鎮火したところで羅刹はパイパーからこれまでの経緯を聞いた。

ゲノムと遭遇し、等々力の手によって難を逃れたパイパーと鬼武は、彼の運転する車でこの処理工場にやって来た。

「後のことは自分たちで好きにするんだな……そう言って行っちゃったぜ」

鬼武は由佳に背を向け押し黙ったままである。由佳もそっぽを向いて黙っている。

「等々力は鮫島と一緒にいる可能性があるわけやな。なんや結構探す手間が省けそうやな」

「探す？俺たちだけじゃなく等々力と鮫島にも用があるのか？つうか、大体あんたたちは何者よ？」

それに俺たちに何の用なんだ？」  
ようやく口を開いた鬼武が聞いた。

「説明すると長くなるさかいに、どこから説明したるか迷うわ」

「私たちは神殺しウル一座の仲間。私の名前は由佳。こっちの関西人は焰 羅刹。

ゲノムを倒すためにあんたたちの力が必要なのよ。それで探してるの」

「ゲ、ゲノムってあの……」

パイパーの身の毛が張り詰める。

「戦った事あるんやったら、もう分かるやろ。あのバケモノを始末せなあかんのよ」

「でも待てよ。あんなバケモノ相手に俺らが居ても意味無いぞ。むしろあんたの方が強いだろうし」

鬼武が言った。

「その強い連中がやられよったんや」

「やられた!？」

「No.3の魔矢、それにNo.2の紅。二人ともゲノムにやられた。あの二人はもう戦えんのや」

「あの二人が……」

パイフーも鬼武も頭の中で魔矢と紅の実態を浮かべた。鬼武に居たつては魔矢にも紅にも会った事は無い。

しかしパイフーはあの二人が自分たちの住居を訪れてきたのを経験している。

リアル世界で起こった20人殺しの主犯「神殺しウル」に惹かれ、やってきた魔界で

そのウルよりも下のランクに位置する魔矢と紅だったが、その強さは二人が思っている以上に強大であった。

無論、パイフーにしろ鬼武にしろ、その実力は常軌を逸しているが、それでも上には上がいる。

魔界に來た事を後悔している訳じゃないが、考え方が甘かったと思う節があるのもまた事実だった。

ウルにしろゲノムにしろ、ここまで強大な連中がうろつく世界だと分かっていれば、魔界には来なかったかも知れない。

「事実上、戦えるのはワイとあんさんたち二人。そして等々力、鯨島を含め、そこにウルを加えた6人しかおらん。

ワイが思うに、ウルとワイだけじゃゲノムを倒せるとは思えへん。そこであんさんたちの力が欲しいっちゅうわけや」

「つまり仲間になれと……そういう事か？」

「ま、そんなとこや」

パイフーの質問に羅刹が答えた。

「俺らはそんなつもりで来たんじゃないんだけどな」

「要するに怖いんでしょ？ウルとゲノムが」

「んだとっ！このアマ!!」

犬猿の仲、由佳と鬼武の戦闘開始である。

「誰がビビってるって!？」

「あんたよ。良い?この魔界に住んでいて俺たちは関係ありませんなんて通用すると思ってるの？」

ここに来た以上、ランクの低い連中は上級ランクの言う事に従うのがルールなの」

「コノヤロー、俺たちが低レベルだと言うのか!？」

「そうでしょ。あんたたちはNo.5。でも羅刹はNo.4なのよ」

「そ、そうなのか？」

パイフーが羅刹に聞く。

「まあ一応そういう事になっちやるね」

「そうかいそうかい!だけどお前は俺たちよりも下だろうがっ!」

「当たり前でしょ!私は女!戦えません」

羅刹 「い、いや・・・ある意味魔界No.1は由佳ちゃんやと思うで・・・」

パイフー 「うん・・・俺もそう思う」

「それでもこうして関わっているでしょ。私だって魔界の住人だから」

「ぐう・・・生意気な女だぜ!!」

「いずれにしても命懸けの喧嘩になるけどな。無理にとは言わん。せやけど来てくれるんやったら助かるわ。

魔矢の言ったとおり、どうやらごつつ強そうやしな」

「俺は構わねえぜ。きつと神殺しのウルにも会えそうだし。何よりあのクソモンスターをぶつ殺すのは大賛成だ。

あのクサレモンスターにはやりたい放題やられたからな!!その借りは返さねえと気が済まねえ!!」

パイフーが両拳を床に叩きつけた。そこに小さなクレーターが出来

た。

「だってよ、どないする？鬼武はん」

「どうするって言われてもな・・・パイファーが行くなら行くしかないわけ」

「じゃ、決まりね。車の準備してくるわ」

由佳はそう言うと言って行った。

「それにしてもあんたがNo.4ねえ、正直そんな風には見えないが・・・。それを言うって紅も同じか」

美貌の紅を思い出し、パイファーは口をつぐんだ。見かけで判断できないのが魔界である。

「刀持つてるって部分では鮫島と一緒にだな」

鬼武がそう言う

「なあ、鮫島のところにも行くんだろ？」

とパイファーが羅刹に聞いた。

「勿論や。なんや？問題でもあるんかいな」

「こいつと鮫島仲悪いんだよ」

「ほう、鬼武はんと由佳ちゃんみたいなもんかいな」

「あのヤロー、ムカつくぜ！！」

「まあせやけど、今回だけは嫌々でも協力してや。さっき由佳ちゃんが言ったように、あんさんたちは自分たちの意志で

魔界に来たんや。自分たちだけ知りませんは通らんで。等々力も鮫島も同じやけどな」

「ケツ！分かってるよ」

「んで、その等々力はどこ行ったんや？」

「あいつは鮫島をリアル世界に無事生還させるのが目的の一つだからな。今頃多分魔界の鍋蓋に向かったんじゃないか？」

「まだ魔界の鍋蓋にあるんか？」

「いや、等々力の話では鮫島が本当に茨木童子が死んだかどうか確かめたいって言い出して

戻る前にもう一度魔界の鍋蓋へ行くって言ってたぜ」



鬼武がそう説明した。

「ほんじゃ、決まりや。次の目的地は魔界の鍋蓋や」

パイパー・鬼武と言うツワモノが加わった。

END

## 25 〱殺人鬼3人、美女1人の旅〱

ブレイドは魔界処理場を離れ、魔界の鍋蓋へ向かっている。

茨木童子を撃破した鮫島が、本当に茨木童子の死を確認するために、再び魔界の鍋蓋を訪れているという。

そしてそんな彼を無事生還させる任務を担っているのが等々力と言う男だった。

いずれにしても奇妙な連中だなと羅刹は思った。数多の修羅場を潜り抜けて来た羅刹の洞察力から推察するに

パイフー・鬼武両名の強さはほぼ互角と見ている。パイフーの特徴と鬼武の特徴は似ても似付かぬが

それぞれが独立した個性を攻撃に変える力を持っている。敵に対する攻撃の違いも顕著で

その破壊力たるや常軌を逸しているのは明白だった。

それに鬼武から得た情報を分析する限り、等々力と言う男もこの二人に勝るとも劣らない実力を持っているように思う。

二十代前半にして、優秀な傭兵と言う経験とずば抜けた記憶力。

一度敵に回すと、命を落とす確率が天井知らずに高くなる。

逆に、運良く味方につけると、彼以上に頼もしい奴は居ないと鬼武は言う。

一方、パイフーと犬猿の仲である鮫島に関しても同様のことが言える。

年齢・38歳。実年齢より若く見えるが、凄腕のスナイパーであり、21世紀の剣客。

傭兵だった経験もあるらしく、あらゆる武器・重火器を華麗に使いこなす。

しかし鮫島の持つ強さが最も力を発揮するのは、間違いなく彼の愛刀「鬼三」だろう。

刀であるにも関わらず自らの意志を持ち、持ち主である鮫島に力を

貸している。

魔矢の情報に寄れば、鮫島は以前、紅と手合わせをしており、その際に紅に傷を負わせたと聞いている。

いくら天然少年とは言え、魔界No.2の紅にダメージを与えた辺り、やはりその実力は計り知れない。

羅刹は病院から出るときに、意識を取り戻した紅が言っていた事を思い出した。

「鮫島のお兄さんに会ったら、絶対に死なないでねって伝えて」と紅は言った。

羅刹には紅のこの発言が何を意味するのかは分からなかったが同じ刀を持つ者同士としての「絆」のようなものがあるのだろうと個人的にそう思っていた。

逆に羅刹が紅の立場だったら、羅刹も同じ事を言っていたかも知れない。実に奇妙な話だった。

等々力と鮫島の間には奇妙な上下関係が存在するようで、その詳細は明らかではないが

いずれにしても等々力、鮫島の二人も、その実力はおおよそ互角と見ている。

殺し合いの死闘を繰り広げた経験のあるパイフーと鮫島。

その勝敗が両者痛み分けであった事からも、パイフー、鬼武、等々力、鮫島の4人の実力はほぼ平行線であると言えるかも知れない。

それならそれで都合が良い。それだけの強さがあるならむしろ頼もしい限りだった。

「にしてもウルのヤツは何考えとるんやろな」

「そうだ！そのウルは今どうしてんだ？」

羅刹の言葉を聞いて鬼武が質問した。

「今頃ゲノムのところへ向かっとるやろうな。もう居場所は割れとるから急ぐ必要も無い。多分歩いて行きよったはずや」

「お前たちみたいに一緒に行動はしないのか？」

今度はパイフーが聞いた。

「ウルは人と一緒に行動するのは嫌いなよ。例え仲間の紅君や魔矢であつてもね」

「それに、あのゲノムつてのはウルの母親らしいからのう」

「は、母親！！」

見事にパイフーと鬼武がハモった。

「あのバケモノ・・・女なのか・・・」

「元はな。今じゃウルたちに殺された殺人鬼たちの怨念の塊やけど、原型はウルの母親やつたらしい」

「ウルとしては自分だけでケリを着けたいんだと思うの。自分のせいで仲間が犠牲になったと思ってるだろうから」

「そないな優しいところあるんかいな？あの男に」

「ウルは口数が少ないだけで、本当は優しいのよ。神殺しなんて言われているけど、あれは殺し屋をやっているから

そう言われているだけで、彼にとって殺しは仕事なの。だから彼は自分の意志だけで人を殺したことなくて無いはずよ」

「なんか、想像していた神殺しとは違うんだな」

パイフーが頭を掻きながら言った。

「そりゃあなたたちが想像している通り、凄く強いし、負けた事もないけど実際はそういう人なのよ」

「はは、ん、何となく紅と魔矢が慕った理由が分かりそうや」

「俺、以前コンビ二で神殺しウルに会ったんだけど、そん時に思った。実は一番人間らしい殺人鬼なんじゃないかなって」

「人間らしい？」

パイフーが反芻する。

「ああ。なんて言うか、単純に独立しているだけっぽい感じって言うか。普通に会話の返事が返ってきたからさ」

「何考えとるんだか分からんようなヤツやからな」

「なあ、魔界はウルが居ないとダメになるのか？」

パイフーがそれとなく聞いた。

「もしウルが居なかったら魔界の秩序は無くなるわ。ウルのような物言わぬ鬼のような人が居るから

それを恐れてみんな魔界のルールに従うのよ。不動明王のような人ね」

「ああ、なるほどな。それごつつ分かるわ」

「それにあなたたち二人だってそうでしょ。ウルと言う存在がなかったら、あなたたち好き勝手やってたでしょ」

「うつ！・・・」

凶星である。

自分たちよりも上の存在がなかったら、パイフーも鬼武も好き勝手に殺人鬼たちを相手にしていただろう。

それはつまり先ほどパイフーの言った「ダメになる」を意味している。

「ウルって殺人鬼っぽくないのよ。私からしたらあなたたち3人の方がよっぽど殺人鬼らしく見えるわ」

「そうかも知れねえな」

パイフーが一人でごちる。そして続けて話し出した。

「結局のところ、俺たちの行動って特に意味がねえもんよ。暴れる目的も無ければ、何かを守るって事でもない。

でもウルは違う感じだよな。俺たち勘違いしていたのかも知れねえな」

「言われて見ればそうかも知れへん。好きなだけ殺して好きなだけ暴れてきたのはワイも同じや」

「だからウルの実在は必要なのか」

鬼武が静かに言った。

「そう言う事。ウルが死ぬ事は魔界の消滅を意味する。まあ、ウルが死ぬとは思えないけどね」

なんだか自分たちがとても小さい存在のような気がした。自己主張はウルよりも羅刹たちのほうが上である。

だが人間としては圧倒的にウルのほうが上なのかもしれない。無意味に人を殺さないという部分が特にそう思えてならない。

「見て、もうすぐ着くわ。あれが魔界の鍋蓋よ」

フロントガラスの向こうにはいかにも禍々しい空間が広がっていた。

「おい、あれ等々力の車だぜ」

鬼武が指差しながら言った。

「本当だ。あの車だ、俺たちが等々力と一緒に乗ってきたのは」

パイファーが続く。

「等々力とか言う男がおるのは確かみたいやな。これで鮫島もおれは一石二鳥や」

「まあ何気に私、等々力って人も鮫島って人も一度会っているんだけどね」

「えええっ!？」

羅刹、パイファー・鬼武が同時に叫んだ。

「以前、一度だけ店に来たのよ。ただ一瞬見ただけだからどんな人だったかは良く覚えてないけど」

パイファー・鬼武 「只者じゃねえ・・・この女・・・」

「一気に行きましょう」

「おっしや!」

魔界の鍋蓋は目の前まで迫っていた。

END

## 26 く破天荒な出会い

「気は済みましたか？ 鮫島さん」

先ほどから一点のみを見つめている鮫島に等々力が話しかけた。

「ああ。どうやらちゃんと始末できたようだ」

「当然だ。兄の獸斬けうちがその命を賭けた相手だ。生きているはずが無い」

鮫島の手握られている鬼三が言った。

「悲しいか？ 鬼三。兄を失って」

「少しな。だが、それが兄の運命だったんだろう。俺とお前が無事である。それが一番良い結果だ」

鬼三は静かにそう言った。

茨木童子との死闘の後、傷付いた身体がどうにか回復の兆しに向かうまで療養していた鮫島だったが

自分が本当に茨木童子を始末できたのか、実はその真意を確かめられずに終わったのだ。

茨木童子が消滅したときには既に鮫島の意識は無く、自分の目でその死を確認できなかったのだ。

そのため鮫島は魔界を離れるその最後に、本当に茨木童子を倒した事を確認しておく必要があった。

だがその心配は無用だった。鮫島は確かに茨木童子を始末した。これで依頼は果たした事になる。

となればもはや魔界にいる必要は無い。こんな危険極まりない場所からは離れるべきだった。

しかし鮫島の頭の中には気になる事があった。何を隠そう魔界に降り立った直後に会った紅と言う少年である。

あの時の感触は忘れるにも忘れられない。強豪を相手に恐怖を感じたのと同時に、襲ってきた好機な感触。

刀を持つ者だけが感じる、いわば「同士」のような感触は鮫島に根

付いていたのだ。

鮫島は見抜いていた。あの少年が自らの最大の敵である茨木童子を、遙かの凌ぐ強さを持つている事に。

本当に魔界を去って良いのだろうか・・・。

「そろそろ行きましよう、鮫島さん。あまり長居をすると厄介な事になる」

「何か思い当たる節でもあるのか？」

「ええ、まあ。実はパイフーと鬼武も魔界に来ているんです」

「なんだとっ！！」

どうやら鮫島はその事実を知らなかったらしい。まあ当然である。

彼は魔界に降り立った直後にこの魔界の鍋蓋を訪れている。

他の場所との接触はないのだから、知らなくても当然である。

「連中と会ったのか？」

「ええ。ついさっきね。それに今魔界はヤバイですよ。ゲノムとか言う超凶悪なモンスターまでいる」

「モンスターとな」

鬼三がいぶかしがった。

「俺が掴んだ情報に寄れば、魔界No.3の魔矢という男が、そのゲノムにやられたそうで

ウル一座はゲノムを倒そうって目論んでいるらしいんですね。ホント、危なっかしい連中です」

「聖よ、あまり関わらない方が良さそうだな」

「ああ、そうだな」

鮫島の返事は素っ気無かった。何かを迷っているような、そんな返事だ。

その時だった。

「ゲオオオオオオオオ」

「な、なんだ！！」

突然雄叫びのような声が響いた。場所はこの魔界の鍋蓋とは正反対の方角。この世のものとは思えぬ抱擁だった。



「凄まじい殺気・・・聖、こいつは茨木童子以上の・・・」

「ああ、とてつもない力を感じる・・・」

「ゲノムだな、きつと。急ぎましよう、鮫島さん」

「ああ」

等々力がきびすを返し、乗ってきた車に向かおうと思った時だった。

「ちよつと待ちいや！お二人さん！」

一台の車がまるでレーサーのようなドリフトを見せながら、等々力の車の真横に停車した。車種はブレイドである。

「ああ、どうやら遅かったようです」

「なに？」

車の扉が開くと、そこには見慣れない男が二人と見覚えのある女が一人。

そしてかつて殺しの死闘を繰り広げたパイフーの姿があった。

「久しぶりじゃねえか、鮫島」

「パイフー！なんでここに」

鮫島は目を見張った。

「やれやれ、手遅れだ」

等々力が頂垂れた。

「一体何者だ、こいつらは」

鬼三つが言った。

「等々力ほんと鮫島はんやな？」

「そうですか」

「そうだが、俺たちに何のようだ？」

「あれが鮫島か・・・」

鬼武は初めて見る鮫島の姿に少々驚いた。パイフーからある程度は聞いていたが実物を見ると、その佇まいには威厳が感じられた。

「ワイは焰 羅刹。こっちは由佳ちゃん。んで、こっちはもう知つとるやろ？」

「まあな。いずれケリを着けなきゃいけない相手と、その相棒」

「ケツ、いずれケリねえ。その前に誰かに殺されなきゃ良いけどよ」

犬猿の仲、パイファーが言った。

「お前がな」

「んだとっ!!」

「待てや!こつちの話はまだ済んでないんや」

羅刹がそう言うのと二人とも口をつぐんだ。

「貴方は・・・あの時の!？」

「お久しぶりと、言うべきかな」

「由佳さんでしたね。あの時は助かりました」

由佳を前にした等々力の顔は少々だらしなかった。まあ無理も無い。由佳ほどの美女を前に照れぬ男などいない。

「騒々しくなってきたな」

「ほほう、あんさんが鬼三はんか」

「!？貴様なんで知っている？」

鬼三がそう言った。

「ワイたちに知らん事なんかないんや。あんさんたちはここで茨木童子と戦ったんやろ」

「魔界と言うのはどうしてこつも見抜かれるんだかな」

鮫島がやれやれと言った様子で言った。

「倒したみたいだな、茨木童子」

「当然だ。お前、鬼武とか言うヤツだな。腐れヴァンパイアの世話は何かと疲れるだろう」

「ゴルア、鮫島!!てめえ喧嘩売ってんのか!？」

「どつかの誰かと同じ事言つてやがる」

鬼武は等々力を見た。

「ん？僕ですか？さて、そんな事言いましたかね？」  
等々力はしらばっくれている。

まったく持つてまとまりが無い・・・。

「ちよつとストップ!皆黙つて!？」

見かねた由佳が叫んだ。一同凍り付く。

「やつぱこの女怖え・・・」

「羅刹、二人に説明してあげて」

「ほいさ」

静まったところで羅刹が話し始めた。

「とある事情でこっちの二人には協力してもらった。ワイと由佳ちゃんはウル一座の仲間や。」

まあ本来ならあんさんたちとは関わり合いの無い関係やが、ちょっと状況が変わってもうてな」

「今さっき聞こえた雄叫びの持ち主と関係があるのか？」

鮫島が言った。

「ご名答、ゲノムってヤツや。簡単に言うと、そのゲノムを倒すために力を貸してほしいって事や」

「へえ、それでそっちの二人は承諾したんですか」

「そういう事や」

等々力の質問に羅刹は答えた。

「いちいち我々の力を要する事は無いだろう。そっちにはウルを始め、魔矢、そしてあの紅と言う少年も居るんだろう？」

「その魔矢と紅がやられたんだとよ」

パイフーが言った。

「なにっ!!」

「バカな！魔矢と言う男は良く知らんが、天叢雲剣を持ったあの少年が!？」

さすがに驚いたのか鬼三が叫んだ。

「それで、あの少年はどうなった？」

「心配すな。ちゃんと生きてる。そうそう、あんさんに伝えてくれて伝言頼まれとるんや。」

絶対に死なないでね・・・だつてよ」

「あの少年・・・」

鬼三を握る手に自然と力が入った。

「あの少年をやったのは・・・?・・・」

「ゲノムや。天叢雲剣もへし折られた」

鬼三の問い掛けに羅刹がそう言った。

「どうや？紅を半殺しにまでさせた相手や。剣客として興味あらへんか？」

無いわけが無い……。宿命の相手になりえたあの紅が倒されたのだ。ゲノムとはいかなる相手なのか……。

「等々力さん、あなたの力も貸して欲しいんだけど」  
由佳が等々力に聞いた。

「僕ですか？そうですね、じゃあこういうのはどうですか？ゲノムを倒したら僕と一度デートしてください」

「な、なんやとっ！！ゴルフ！！」

すかさず羅刹が噛み付いた。

「ワレエ！なんやその条件は！！」

「アイタタ……。離してくださいよお、交換条件ですってば」

「由佳ちゃんはいとデートするんや！！手え出すなヴォケ！！」

「誰があんとデートするのよ」

冷やかな視線が羅刹に注がれる。

「良いじゃないですか、減るもんじゃないんだしい」

等々力、愉快的な男である。

「なんなんだ、こいつらは……」

鮫島もパイフーも鬼武もポカンと口を開けるより他になかった。

こんなんでもゲノムを倒せるのかどうか……。

一人頭を悩ませる由佳であった。

END

## 27 〱戦う条件〱

「分かったわ。あなたの条件飲みます」

由佳がそう言う

「ええええっ!？」

羅刹と等々力は共に驚いた。

「なんでワレが驚くねん!!」

「あ、いや、だって、まさか通るとは思ってたもので」

「言っておくけど、デートだけだからね。その辺勘違いしないでよね」

「え、ええ。勿論です」

しどろもどろの等々力。

「そ、そ、そんなあ〱ワイと言う男がいながらそりやないでえ〱」

「誰が私の彼氏だって？」

由佳は羅刹の首を思い切り締め上げた。

「ぐ、ぐるじい……」

「まったく……」

「俺たち、そういうの無関係で良かったよな」

「ああ」

鬼武とパイフーが頷いた。

「やれやれ、馬鹿馬鹿しくてやってられん」

鮫島が背を向けた。

「鮫島はん、力貸してくれへんか？」

「俺の仕事はもう終わった。依頼はちゃんと果たした。どれだけの力を持っているか知らんが」

手を貸す道理は俺たちには無い」

「どれだけの力って、そりやワイの事かいな？ワイは聖魔剣士。この刀は……」

「知っている。聖魔刀だろ？」

鮫島が聖魔刀の事を口にすると、その場が一気に緊張感で張り詰めた。

「ほうよう知つとるな。さすが同じ剣客や」

「あの紅と言う少年に聞いた。自分たちの下のランクには羅刹と言う男がいて、その男が聖魔刀を操るとな。

つまりお前は魔界のNo.4だな」

「余計な説明は要らんようやな。気になるんやったら試してやつてもええで。ワイの聖魔刀の切れ味をな」

「俺が依頼主以外の仕事を受け入れるとしたら、それは自分と互角か、あるいはそれ以上の人間から頼まれたときのみ。

お前の実力も知らないまま、はい、そうですか。と、引き受けるわけにはいかん」

「それはつまり、ワイと戦ってから決める……そういう事やな？」

「そうだ」

「聖よ、本気か？ 聖魔刀は天叢雲剣とは別の魔力を秘めた魔剣だぞ。それにあの羅刹とか言う男

聖魔刀以外にも何か得体の知れないものを感じる」

「本気だ。紅とも最初はそうだった。これは刀を持つ者同士の宿命」

「ええやろう。相手になつたるさかい」

「ちよつと待ちな！！」

羅刹と鮫島が一步前に出たとき、羅刹の後ろからパイフーが飛び出した。

「なんや？」

「引つ込めパイフー。貴様に用は無い」

「用は無いだとっ！ ぶざけるなよ。てめえ、さっきから聞いてりやずいぶん偉そうじゃねえか！！」

「フン！ それを言うだけの事はしているんでな。貴様と違って」

「ここは魔界だ。魔界にはルールがある。どういう経緯でこいつが魔界のNo.4になつたか知らねえが

その下のNo.5は俺と鬼武なんだぜ。だったらまず俺と勝負する  
のが筋つてもんだろ」

「ずいぶん奇想天外な発想やな」

「こいつとは昔ガチの殺し合いをやってる。勝敗は痛み分けだった  
が、いずれケリを着けなきゃならねえ。」

下のランクから戦っていくのが順当つてもんだろ」

「なんだか大変な事になってきましたねえ」

「私には理解できないわ」

等々力と由佳がぼやいた。

「おい、パイフー。何も今やらなくなつて」

続いて鬼武が言った。

「いや、こういう機会でもなきゃ力チ合わないだろうからな」

「つまり俺とケリを着けようと、そう言う事か」

鮫島が言った。

「そういうこつた」

「なんや予定外の方角に行つてもうたな。まあええわい。せやけど  
殺し合いはあかんで。」

この後二人の力が必要なんや。地面に倒れた方の負け、それでええ  
な？」

「おうよ！」

「よかるう」

パイフーと鮫島が向き合つた。

予想外の展開に予想外の死闘。その結末やいかに……。

END

## 28・パイパー vs 鮫島 聖、二度目の直接対決！??

未知数とは言え、少なくともこれでパイパーと鮫島の力量は計れると、羅刹は思っていた。

どっちが勝とうが問題は無いが、彼らの実力を見るには「対決」と言う形式は打ってつけである。

肉体的な強さを滲ませるパイパーは拳による直接攻撃タイプ。

鬼三と言う刀を操る鮫島は刀による攻撃タイプ。いずれにしても興味深い戦いだ。

同じ刀を扱うと言う部分では羅刹と同タイプである鮫島だが、自らの意志を持つ鬼三をどのように捌くのか。その辺も含めて気になるところだ。

「凄い事になったな」

鬼武が呟いた。

「前はケリが着かなかったんでしょ？」

「ああ。どっちも強すぎて痛み分けだったからな」

由佳の問いに鬼武は少々興奮気味に答えた。

「今世紀最大の喧嘩・・・そんな感じですね」

「呑気なこと言ってる場合じゃないで」

どこか呑気な等々力に羅刹が正した。

「昔お前と戦ったときの事が妙に懐かしく思えるぜ」

「あの時はまだ手の内を知らなかったからな。でも今は違う」

鮫島は鬼三を構えた。

「お前のそのオンボロ刀が強いか・・・」

「それとも貴様の隆々筋肉が強いか・・・」

「勝負!？」



鮫島は戸惑う事無く鬼三を抜き、一直線にパイファーへと駆け寄った。それを見抜いていたパイファーも先制攻撃に転ずるために身体を反すうさせる。

しかし鮫島もまたパイファーの行動を見抜いており、パイファーの鋭い爪が直撃する前に上空へと舞い上がった。

「おらぁ！！！」

「ぬうつん！！！」

振り下ろされた鬼三は怪力を誇るパイファーの爪の間で鈍い音を響かせながら、その動きを止めた。

「コノヤロー」

「フン！」

解き放たれた矢が散っていくように、凄まじいスピードで両者の攻撃が続いた。

「こりや凄い・・・早すぎてよく見えませんよ」

等々力は目を凝らして見ていた。

「二人とも初めてやり合った時より強くなってやがる」

鬼武が感心した。

「私には二人がどうなっているかさえ見えないんだけど」

「スピードは鮫島の方が若干上やな。ただ攻撃力だけで見ると、圧倒的にパイファーの方が上。」

せやけど、鮫島には鬼三がある。この勝負、長引きそうやで」

もはや幾度と無く繰り返した競り合いで、一時的にその攻撃を止めた二人は、敵ながら関心していた。

どちらも前回よりも確実に強くなっている。

「やるじゃねえか、グラサンヤロー」

「貴様もな、腐れヴァンパイア」

パイファーにしても鮫島にしても想定外の強さだと言って良い。お互いに擦り傷、かすり傷程度なら負っているが

まだ致命的なダメージにまでは至ってない。どちらかが地面に倒れ

ればそれで終わりなのだ。

パイファーにはパイファーの、鯨島には鯨島の意地とプライドがある。負けるわけに行かなかった。

「行くぜ！！」

仕掛けたのはパイファーだった。その巨漢からは想像も出来ぬスピードで鯨島に迫ると、そのまま拳を繰り出した。

「バカの一つ覚えとはこの事だな！！」

もはや見据えていた鯨島は、左斜め下から鬼三を斬り上げた。しかし、そこまで単純なパイファーではなかった。

「な、なにつ、ぐはああっ！！」

鯨島の脇腹にパイファーの強烈な左足の蹴りが入った。拳はフェイントだったのだ。

鯨島はそのまま巨大な岩へ激突した。しかし倒れるまでには至らなかった。

「へへ、毎回同じパターンじゃつまらないだろ」

パイファーが得意げに言った。

「さすがパイファー。あれを受けたんじゃちょっとキツイぜ」

鬼武が言った。

「油断したな、鯨島さんよお」

「それは貴様も同じだろ」

「なにつ、うお！！なんだこりゃ！！ぐうっ・・・」

パイファーの両腕に切り刻まれた跡が浮き上がると、そこから鮮血が飛び散った。

蹴りを食らった一瞬に隙に、鬼三が自らの意志でパイファーを切り刻んだのである。

倒れては居ないとは言え二人とも息が上がっている。

乱れた呼吸によって肩が大きく上下し、苦戦しているのが一目で分かった。

「ここまで来ると意地の張り合いだな」

鬼武が呟いた。

「せや、そもそもなんであの二人は仲悪いんや？」

「俺にも良く分からないんだよな、その辺は。まあ似たようなタイプって事は確かなんだけど」

「二人ともプライドが高いんじゃないですか？そんな気がするんですけど」

鬼武と等々力がそう言った。

「私には子供の喧嘩に見えるけど」

羅刹・等々力・鬼武 「それは禁句でっせ！」

「そろそろ止めといった方がええな。ゲノムとの決戦前に疲労したんじゃない、話にならん」

羅刹は次の交戦を見計らった。

同じ程度の疲労ならそれは一触即発の前触れ。

身構えたパイフーと鮫島は次が最後の一打になる事を悟っていた。

「これで終いだ」

パイフーは尖った爪を一舐めた。

「かかって来い」

「行くぞー！！」

今度は鮫島から飛び出した。身構えたパイフーの右肩に鬼三が食い込む。

しかしその反動を利用したパイフーの拳も、鮫島の腹部に打ち込まれた。

「ぐはああっ！！」

一瞬、宙に浮いた両者はそのまま腰から地面に叩きつけられた。二人とも倒れていないが、尻餅をついている。

「ほい、そこまでや」

「なにっ！！」

「まだケリは着いてないぞ」

「もうええやろ。このままやっても同じ事や。あんさんたちはどっちも敗北や」

「バカな！！まだ戦える！」

「俺だつてやれるぞ」

「アホ抜かすなや。真剣勝負で一度地面に尻着いたらそれは何を意味する？死やで」

「くっ・・・」

「今はあんさんたちだけやから問題ない。せやけどこれがゲノムやったら、二人もジ・エンドや」

「チッ！」

剣客としてその意味を知っている鮫島は鬼三を鞘に収めた。羅刹の言うとおりである。

「クソッ！また痛み分けかよ」

パイフーがごちた。

「どうする鮫島はん。これで納得しよったか？」

「いや、まだだ」

「なんや、まだ何かあるんかいな！！」  
「たく、融通の利かんやつちやのう」

「お前の実力が知りたい。それだけだ」

今度は鋭い視線を羅刹に向けた。

「まあええけど。面倒なやつぢやな」

「鮫島さん、止めて置いた方が良いと思う。あなたまだ傷が完全に癒えて無いでしょ？」

そんな状態で羅刹と戦うなんて自殺行為と同じ。アイツかなりいい加減だけど、強さはまさに鬼神よ」

「いい加減・・・が、邪魔やつたな」

「ちよつと興味あるな・・・あの関西人がどんだけ強いのか」

「そうだな、それは僕も一緒」

鬼武と等々力が交互に言った。

「だからこそ戦ってみる必要がある。頼まれた相手の強さを知らず

して、力は貸せない」

「あまり無理をするな、聖よ」

「大丈夫さ」

「鮫島さんもこだわりますね」

等々力が半ば呆れたように言った。

「ま、ええ機会や。ワイがどれだけ強いが見せたる。そうすりゃちよつとは協力的になるやろ。」

せやけど、さすがに連戦は辛いやろ。ええ事思い付いたで、なあパイちゃん」

「パ、パイちゃん！？」

勿論、パイフーのことである。

「連戦続きの鮫島はん一人じゃ心元ない。せやからパイちゃん、鮫島はんに加勢してええよ」

「なつ、なに！！」

「つまり2対1か」

「フン、舐められたもんだぜ」

鬼武に続き、鮫島が言った。

「冗談じゃねえ！！なんで俺が鮫島に着くんだよ！！」

「ええやんか。仲直りするええ機会や」

パイフー・鮫島「そんな機会、いらねえよ！！」

「しかし凄い自信ですね。あの鮫島さんとパイフーを同時に相手しようなんて。さすがにちよつと無謀じゃありませんか？」

等々力が言った。

「あなたたちは羅刹の強さを知らない。普段はあんなだけど、彼、強いわ」

「ほほう、それは見ものですな」

END

## 29 異色のタッグ？パイファー・鮫島 vs 羅刹

「チッ！」

「ゼエ・・・ゼエ・・・クソッ！、なんだよこの展開は！？」

異色のタッグによる戦いはまだ始まって数分である。にも関わらずパイファー、鮫島の息は大きく上がっていた。

特にパイファーは既に肩で息をしており、疲労が大きい。

一方の鮫島もまさかこのような事になるとは想像もしていなかったような表情になっている。

しかし、同じ剣客として一番驚いていたのは、やはり鬼三だった。

羅刹から繰り出される聖魔刀の威力は、否応無しに鬼三の嫌な部分を攻撃してくる。

聖魔刀から放たれる邪気は、鬼三にかなり大きなダメージを与えていたのだ。

同じ刀でも相性と言うものがある。何が理由だか分からないが、羅刹の聖魔刀と鬼三は相性が悪いようだ。

「強い・・・」

開いた口が塞がらない。そんな感じで鬼武が呟いた。

「これが、魔界No.4の実力ですか・・・」

等々力の額から冷たい汗が流れる。

「アイツ、また強くなった。今となってはもう魔矢より上かも知れないわ」

いつも茶化す相手である羅刹を見て、由佳は思わず息を飲んだ。

「なんや、二人掛かりでこんなもんかいな。話にならんのか」

「な、なにっ！！」

先ほどから羅刹は一切攻撃をしていない。ただ縦横無尽に注がれる鮫島とパイファーの攻撃を受け流しているだけだった。

鮫島の攻撃も、パイファーの攻撃も、一度たりともヒットしてないのだ。

「それにしても気にいらねえ・・・なんでてめえと一緒になんだ」

「バカ言うな、俺だって死ぬほど嫌なんだ」  
相変わらず仲の悪い二人である。

「これでNo.4なのか・・・その上にいるあの三人はどれだけ強いってんだよ」

鬼武が言った。

「そう思うでしょ。だけどそのうち二人はゲノムにやられてしまった。ゲノムはこんなもんじゃないって事ね」

「やっぱり来るべきじゃなかったな、魔界なんて」

等々力の後悔はまさに先に立たずである。

「鬼三、行けるか？」

「なんとか・・・ただあの刀はどうも苦手だ。長期戦は致命的になる」

「大丈夫。ここから本気で行く」

「出来れば短時間で済ませてくれ」

「ああ、任せろ」

鮫島の目付きが変わった。

それと同時に鮫島の変化に気付いた羅刹は同じように構えた。

「ケケ、どうやら火い点けちゃったようやな」

「行くぞ」

「上等や」

羅刹が言い終える前に、鮫島の姿は消えた。

「き、消えた!!」

鬼武が叫んだ。

既に鮫島と羅刹は遥か上空まで舞い上がっていた。

剣と剣がぶつかり合う金属音が響く。凄まじいぶつかり合いが始まった。

「鮫島さん、ありやマジだな」

普通の人間である由佳には何が起きているのか見えなかった。それほど凄まじいスピードで互いに攻撃し合っている。

「俺様を無視するな！！！」

無性に腹が立ったパイフーも飛び上がり鮫島と一緒に羅刹に襲い掛かった。

「およ？パイちゃんもマジやんか」

「つたり前よ！！鮫島だけ良いカツコさせねえぞ！！」

鮫島の鬼三、パイフーの豪腕。本気と化した二人の攻撃は猛攻へと変わる。

「おろろろ、さすがに本気になるとワイもしんどいな」

地上へと降り、羅刹と距離を取った鮫島は、もはや息切れなどと言うレベルではなかった。

「はあ・・・はああ・・・な、何故攻撃が当たらん！」

「ふう・・・ふう・・・一発でも入れば・・・こつちのもんなのによ！！」

方や羅刹はと言うと、息一つ切れていない。

「あんさんたちの攻撃はよう分かったさかい、その礼や。今度はワイから行くで」

と言った羅刹は何故か聖魔刀を鞘に納めてしまった。

「来る！」

「へ？何がですか？」

突然来ると言った由佳に等々力が聞いた。

「羅刹の本当の強さが・・・」

「強さ？」

「ケケケ、あんさんたちようやったで。けど、相手が悪かったな、結局ワイの勝ちや！！！」

「おわっ！なんだ！！」

羅刹の身体から鋭い風が吹き荒れると、その身体は褐色を帯び、両目が赤く染まっていく。

更に肉体が変化を始め、元の身体よりも一回り大きくなった。

異常なほど発達した筋肉。それと同時に巻き起こる夥しい邪気。

「こ、これは！！！」



「な、なんだ、一体！」

鮫島とパイファーが共に叫ぶ。

爆風が止むと、そこに変化した羅刹の姿が明らかとなる。

「あれは・・・な、なんなんだ、アイツは!!！」

「バーサーカー・・・羅刹の真の姿よ」

三つ巴の戦いの最中に一度だけ見せた羅刹のフルパワー。バーサーカー羅刹がそこにいた。

「こ、こんな事が!!！」

「いかん、聖！あれは我々の手に負える相手ではないぞ」

「パイファー！ヤバイぞ!!！」

「そ、そんなこと言われてもよ」

鬼三、パイファーが叫ぶ。

「良かった、僕戦わなくて」

等々力が胸を撫で下ろした。

「これがワイのフルパワーや。行くぞ!!！」

魔物のように姿を変えた羅刹は凄まじい速さで突進し、両腕を広げた。

「があああつ!!！」

「うがああ!!！」

右腕に鮫島の顎が、左腕にパイファーの顎がヒットし、二人は瓦礫に突っ込んだ。

「くそ!!！」

いち早く起き上がったのは鮫島だった。そこに再び羅刹が突進する。

「ぐうっ・・・!!！」

羅刹の拳が顔の前で止まる。身構えた鬼三が羅刹の拳を止めたのである。

「さあて、いつまで持つかな？」

「ヤロー!!！」

なんとか起き上がったパイファーも羅刹に飛び掛る。渾身の一撃が羅刹の腹に食い込むが、羅刹は動じていない。

「あかんで、邪魔しちゃ」

「ぐわっ!!」

羅刹は左手でパイフーの頭を掴むと、そのまま地面に叩きつけた。

「さて、鮫島はん。あんさんはどうかな？」

「せ、聖……も、もう……」

羅刹の攻撃は凄まじく、鬼三はもはや限界だった。これ以上は鬼三が死に兼ねない。

「わ、分かった、手を貸そう」

とうとう鮫島が降参した。

「そか!!なら安心や」

羅刹はすぐに拳を離すと、バーサーカーから元の羅刹に戻った。

「すまんかったな、鬼三はん。大丈夫かいな？」

「誤るならやるな!!」

「ハハハ!!それもそうやな」

「パイちゃんも悪かったのう」

「パイちゃんって言うんじゃねえ!!クソ!思いっきり叩き付けやがって」

パイフーは鼻を押さえている。どうやらかなり痛かったらしい。

「ゲノムを倒したら、俺、リアル世界に帰るかしんない」

鬼武がポツリと呟いた。

「そ、その方が賢明かもしれないな……」  
等々力が続く。

「まあ、長生きしたければ魔界は止めた方が良いよ」

由佳も苦笑いである。

「大丈夫か?鬼三」

「まったく、危うく折れるとこだったぞ。茨木童子が子供に思えてくる」

「同感だな。やれやれ、これ以上強いのか、紅とゲノム、そしてウルは」

あの時紅と競り合ったときの事を鮫島は思い出した。

進むべき方向へ進む。それが自然の摂理であり運命でもある。  
だがその運命は人の力によって変えられる。  
ゲノムとの決戦はすぐそこまで迫っていた。

END

### 30 ー 決戦の時、迫るー

殺し屋の仕事で手にした金で購入したランドクルーザーは唸りを上げていた。

魔界の中心部、魔矢・紅たちを別れて既に4時間が経過している。ウルは運転するランドクルーザーは絶海の孤島「煉獄」を目指して疾走していた。

車内は静まり返っている。オーディオはセットされているが音楽を流すような気分ではなかった。

それにウルは運転中にエンジン音以外の音が耳に入る事を嫌っていた。

孤独、そして孤高を好むウルにとって雑音は無用なのだ。

常に単独行動で束縛を嫌う彼の性格がそうしているのかも知れない。車内には疾走する車の音だけが五月蠅く流れていた。

ランドクルーザーは時速80kで走行している。この分だと残り4時間ほどで煉獄に到着するだろう。

煉獄が魔界の中心部から離れているとは言え、このペースなら予定通りの時間に着く。

ウルは走る車が唸りをあげるように、最後の決戦に備えて覚悟を決めていた。

迂闊だったとは言え仲間たちを巻き込み、重傷を負わせてしまった。魔矢と紅の容態が気になるところだが、今はそれ所ではない。ゲノムを・・・いや母親を始末せねばならないのだ。

そのためには完全に息の根を止める必要がある。数年前の死闘のようには封印ではなく

真の意味で「無」にしなければならないのだ。でなければ何かの拍子で再び蘇るという事も考えられる。

ゲノムを本当の意味で始末のに必要なもの。

それが後部座席に積んである「液体水素」である。

液体水素の沸点は摂氏 - 252.6 で、融点は摂氏 - 259.2 と言う限りなく絶対零度に近い温度を誇る。

本来水素と言うものは酸素と結びつくことでエネルギーと水が生まれるが

液体と化した水素をそのまま使用するとどうなるか。

ただでさえ絶対零度に近い冷たさを誇る液体である。そのまま使用すれば凍るのは必至だ。

それが例え一般的なペットボトル量であっても、半径20mほどが一瞬で凍結する。

しかも絶対零度に近い冷気は物質のほとんどを破壊してしまう。例えば解凍に成功しても物質そのものは死んでしまうのだ。

おまけに液体水素をかけられた物質に極端な熱を加えると、冷気と熱の摩擦が生じ気圧が変化する。

その気圧が物質全体の7割に達したとき、その物質は大爆発を起こすのだ。

今回、ウルを用意した液体水素の量はドラム缶2本分にも及ぶ。

煉獄の地下に眠るマグマの量を考えると、ドラム缶2本分の液体水素は適量と言えるだろう。

だがこの試みはウルに取っても、まさに命懸けだった。

万が一液体水素が微量でもウルに降りかかったらもはやアウトである。

失敗は即ち自らの死を意味していた。

それでもやらなければならない。不思議とウルには自分がこの戦いで死ぬ事は視野から外れていた。

何故ならウルの手には、まだ誰にも知られていない「ある秘密」が隠されているのだから……。

ウルは運転しながら改めて魔界を見た。

依然として良い場所であると言う気持ちに変化は無い。ウルにとって帰るべき場所は魔界なのだ。

もはやリアル世界で生活が出来るほどの清らかさは持っていない。リアル世界で生きるにはあまりにも多くの人間を殺し過ぎた。

ウルには故郷こそが魔界であり、魔界こそが心の拠り所だった。

そんな魔界を良い様にさせてはならない。今度こそゲノムと決着を着けるのだ。

時は満ちた。煉獄到着まで、残り4時間を切った・・・。

一方、魔矢の提案によって全ての強豪を探し当てた羅刹と由佳、そしてパイファー、鬼武、等々力、鮫島の計6人は

魔界の鍋蓋を後にし、煉獄へと車を走らせていた。

8人乗りのブレイドは羅刹と由佳を除いた4人に有利な大きさとなった。

座る配置によっては喧嘩が起こりえる関係の4人である。運転席には由佳、助手席に羅刹。

そのすぐ後ろの後部席にパイファー、鬼武を。その更に後ろの座席に鮫島と等々力を配置した。

間違ってもパイファーと鮫島を隣同士にしてはならないからだ。

等々力の乗ってきた車はそのまま魔界の鍋蓋に停車させたままである。

等々力曰く「ゲノムとの決戦で巻き添えを食らわせたくない」と言うことだった。

なるほど、確かにその可能性は強い。スクラップになるのを避けて、あえて置いてきたのだ。

車ならゲノムを始末した後、また取りに来れば良い。

更に、置いてくる予定だった由佳も結局同行する事になった。

全員が揃ったら魔矢のいる病院へ戻ると言う事だったのだが、由佳

は「私も行く」と言い張って聞かなかった。

一度言い出したら何を言っても聞かない性格の由佳を、さすがの羅刹も動かす事はできなかった。

「ここから煉獄まではどのくらい掛かるんですか？」

等々力が聞いた。

「煉獄は魔界の鍋蓋の正反対に位置しているから、かなり掛かるわ。少なくとも後6時間は掛かるかな」

「6時間も掛かるのかよ！！長旅だな」

「でもそれまでゆっくり休めるといえば休めるけどな」

パイフーと鬼武が言った。

「命懸けの死闘を前に、あまり心地良く休めるとは思えんがな」

鮫島が呟く。

「ケツ！早くもビビってんのか？」

「それはお前だろ」

「あんだとっ！！」

パイフーと鮫島の席を離れたと言うのに、やれやれである。

「やめれや、二人とも。ゲノムを倒すまでは協力せえ言っただろ」

「ケツ！」

「フン！」

「それにしても今頃ウルのヤツはどの辺におるんやろか」

「さあ、多分私たちよりも先に煉獄に着くと思うけど」

「僕たちが着いた時には全部終わってる・・・なんて展開も・・・」

「それは無理だろ。お前も見ただろ、あのゲノムつてのを」

「ま、まあね・・・やっぱ無理か」

等々力と鬼武が言った。

「悪いがちょっと休ませて貰うぜ。さすがに寝不足だよ」

パイフーはそう言うのと横に倒れ、鬼武の膝に頭を置いた。

鬼武もパイフーの頭を一撫ですると、静かに目を閉じた。

「俺もそうさせてもらう。さすがに連戦続きだったからな」

「到着したら僕が起こしますので」

「ああ、頼む」

そう言っていると鮫島はそのままの体制で目を閉じた。

「魔矢と紅は大丈夫やるか」

「あの二人は平気よ。でももう、二度と戦えないでしょうけど・・・」

「」

「そんなに重傷なんですか？あの二人は」

唯一起きている等々力が聞いた。

「ええ。多分もう無理だと思う。でもその方が良いのかも知れないわ」

「そりやどうということや？」

「だって・・・何て言うか常に戦いの中に身を置くななんて本当は嫌だから」

「でもここは魔界ですよ。殺し合いは避けられないんじゃない・・・」

「そうだけど。出来ればもう戦って欲しくない。紅君も、魔矢も」

微妙な乙女心なのだろう。紅のその名を連ねてはいるが、本当は魔矢の事を示している。

最愛の人を失いたくないと言う気持ちは、男女問わずあるものだ。

「大丈夫や。ゲノムさえ始末すりゃもうそれでええねん。魔矢も喜ぶはずやしな」

「うん・・・」

それぞれの思いを胸に、いよいよゲノムとの壮絶な死闘が始まる・・・。



### 31 頂上決戦、ウル vs ゲノム

忘れられた孤島「煉獄」の地下では大量のマグマがうねりを上げていた。

元々煉獄には火山と成る山脈があつたのだが、数年前のウルとの戦いのときに山脈は消失。

今では島のあちこちに巨大な穴が開いており、その地下でマグマが煮えたぎっていた。

いつ大爆発を起こすか分からない状況の中、一台のランドクルーザーが煉獄に到着した。

ゲノムは煉獄の高台である丘の上、その丘に口を開く火口にいる。その事を知っていたウルは誰も居ない煉獄を静かに移動した。

ランドクルーザーが高台の入り口に着くと、ウルは車を降り、後部座席から液体水素が入ったドラム缶を二つ取り出した。

そして両手でそれを持ち上げると、火口的位置口でそれを置いた。「なんとまあ、醜い姿になったもんだな」

火口の真下でやはりウルが来る事を知っていたゲノムは静かに佇んでいる。下から上へとウルを見上げ

「グルルル」と叫び声を上げた。

今すぐに液体水素を使うわけには行かない。例えば火口に流しても、避けられるのは目に見えている。

ある程度攻撃をして弱らせ、直接液体水素を掛けなければ意味が無い。

「やってくれたな、ゲノム。礼をしに来たぜ」

「カミゴロシ・・・ウル・・・ヨウヤクミツケタ・・・サイゴノテキー！」

火口にいたゲノムは一気に飛び上がると、まるで同じ土俵に立つように、ウルと向き合った。

煉獄は相変わらず小刻みな地震が巻き起こり、地鳴りが響く。

「これで魔界も変わる。お前を始末して、それで終いだ!!」

「グワアアア!!」

両者のぶつかり合う音が響いた。

同じ頃、煉獄まで残り1時間と言う場所まで辿り着いていた羅刹たちは、眠っていたパイパーと鮫島を起こし

最後の決戦の向けて話し合いが始まっていた。

魔矢が残したメモにはある程度の戦い方が記されていた。勿論、メモ通りにやったからと言って上手く行くと言う保証はないが

羅刹たちを取っては未知の強豪だ。参考になる戦術があるならそれに沿うしかなかった。

「ええか?そんな感じで戦うんや」

「まったく、何故こうもム力つくヤツと組まなければならんだ!!」

「それはこつちのセリフだぜ!もっとマシな戦略はねえのかよ!」  
鮫島とパイパーがなった。

「しゃーないやろ。あんさんたち個人が持つてる能力を活かすためにはこれしかないねん」

どうやら等々力と鬼武は納得しているらしい。

「チッ!」

「くっそ!!」

「ねえ、ちょっと見て!!」

「どうした!」

もはや煉獄が肉眼でも確認できる場所まで来ると、前方の至るところで激しい爆発と炎が上がっているのが見えた。

「多分ウルよ。ゲノムと闘っているんだわ」

「マジかよ!!」

鬼武とパイパーは身を乗り出して前を見た。等々力と鮫島も窓を開けそれに習う。

だがまだウルとゲノムの姿は見えなかった。

「そろそろ準備しておいて。後少しで着くから」  
由佳の言葉に一同は息を飲み、そして緊張感が張り詰めた。

状況はウルが劣勢だった。ゲノムの猛攻はほとんどウルには通用していない。時折放たれる刃の触手には手こずったが

一見すると誰もがウルの勝利を確信するだろう。しかしウルの攻撃が致命的になっていない点は否定出来ない事実である。

「こいつ・・・以前より厄介になりやがって」

致命的な弱点の無いゲノムだが、無数の心臓に無数の脳とあつては、どれが本体のコアなのか判断が付かない。

的確なダメージを与えなければゲノムを弱らせる事は出ないのだ。

その辺、ウルには不利だった。やはりスタミナと言う問題が生じる。

「フン、弱点がないなら、その弱点らしきもん全て潰すまで!!」

急降下したウルはその拳で無数にあるゲノムの眼球、そして心臓や脳を潰しに掛かった。

もはやそれしかない。致命的となる場所が無数にあるのなら、その全てを潰せば良い。

そうすればいずれは最後のコアに辿り着く。ウルは文字通り鬼の形相で潰しに掛かった。

しかしそう簡単にさせてくれないのがゲノムである。

打ち込まれたウルの拳に異様なまでに繁殖した触手が纏わり付く。

「くっ!!」

半永久的に再生を繰り返すゲノムに対し、人間であるウルの身体はモロい。

いくら「ある秘密」が隠されているとは言え・・・。

「ぐおお!!」

ゲノムは巨漢のウルを軽々と持ち上げ、今にも噴火しようとしている火口に頼り投げた。

「ぐっはっ!!」

叩きつけられた衝撃で岩石が背中に刺さる。流れ出す鮮血。形勢逆

転とはこの事である。

「コレデオウル・・・ナニモカモガ・・・」

ゲノムはウルの手を踏み付けた。

「クソッ！」

万事休す・・・、これでは何のために液体水素を用意したのか分からない。

使い暇も無く終わってしまうのか・・・。

「そうは行くかいな!!」

その時、凄まじいスピードで影が移動すると、ウルの手を踏み付けていたゲノムが後方へと吹っ飛んだ。

「ら、羅刹!!」

「危ないとこやったのう」

そこには羅刹がいた。いや、羅刹だけではなかった。すぐそばに由佳があり、パイフー、鬼武、鮫島、等々力がいた。

「あ、あれが、神殺し・・・ウル・・・」

「ああ、アイツだよ。コンビニであった男・・・」  
パイフーと鬼武が驚愕したように言った。

「あわわわ・・・やっぱり来るんじゃない!!」

等々力はもはや半ベソ状態である。

「あれが神殺し・・・」

「噂通りの男だな。凄まじい威圧感を感じる」

鮫島に続き、鬼三が叫んだ。

「お前たち、何しに来た」

「何しにつて決つとるやないか。ゲノムを始末しに来たんや」

「バカな!!お前たちの手に負える相手ではない」

「せやかて、あんさん一人でも勝てそうに無いやんけ」

「・・・」

「ウル、無理だよ。一人で戦おうなんて」

「由佳」

「おいおい!!どうでも良いけど、あのヤロー来るぞ!!」

パイフーが叫んだ。

視線の先には案の定無傷のゲノムがいた。こちらへ向かってくる。

「ジャマナレンチュウバカリ・・・ゼンインマツサツ!!」

「由佳ちゃん、ウルの傷見たってや」

「分かった」

「準備はええな? あんさんたち」

「おうよ!!」

「覚悟は出来ている」

「やっぱり帰ろうかな・・・」

「今さら嘆くな、等々力。いつでも良いぜ!!」

「マツサツ!!」

「行くぞ!!」

最終章、第一局面の幕が開かれた・・・。

### 32 〱 最終戦 1 「平成の剣客の名に置いて」〱

「おらあー!!」

「でやあー!!」

縦横無尽に叩きつけ、斬りつけるのはパイファーと鮫島だった。そしてその仕上げとして羅刹が続く。

拳と刀。この二つを操る、羅刹、パイファー、鮫島の三人が最前線にそして飛び道具を駆使する鬼武と等々力を後方に置き、援護に回ると言っのが作戦だった。

「このバケモノヤロー!!」

パイファーの強烈な拳はゲノムの至る部分を抉る。繰り出された豪腕の破壊力は計り知れない。

それに続き今度は鮫島の刀、鬼三が猛威を揮う。文字通り目にも止まらぬ太刀捌きでゲノムを切り刻み、切断する。

その合間を縫って鬼武、等々力による遠距離からの攻撃が火を噴くと、ある程度ダメージを負わせたゲノムに羅刹が襲い掛かる。

しかしゲノムも無反応ではない。頭の良いゲノムはさすがに5人を同時に相手にするのは酷なのか

飛び出す触手の量が一段と増えていた。

「このバケモノ、本当に死にやがるのか!!」

「文句を言っている暇があったら攻撃しろ!!」

「鮫島、てめえ!! 見てろよ、この戦いが終わったらキツチリケリ付けるからな!!」

パイファーも鮫島も、互いに攻撃をせねば倒せない事は良く分かっている。

「くそ!! ちつとも効果が無いぜ! おい、等々力! 弾はまだかよ」

「そんな事言われたってちよつと待ってくれよ」

無数のマガジンが地面に落ちる、先ほどの攻撃はほとんどダメージを与えていないようだった。

「ぐはあっ!!」

「パイファー!」

パイファーはゲノムを攻撃を正面から食らった。

「あかん!!」

上空へと吹き飛ばされるパイファーを追うように、ゲノムが続いた。

「形無し夢幻陣!!」

メテオと化した無数の刃がゲノムに襲い掛かる。

だがゲノムに効果は無い!!

羅刹の切り出した聖魔刀にゲノムの触手が重なる。

「羅刹!!」

「は、はよ逃げんかい、パイちゃん」

「あ、ああ・・・」

羅刹のかばわれる形となったパイファーは即座に真横に避けた。しかしそれを見逃すゲノムではない。

「があああっ!!」

「パイファー!!!!!!」

ゲノムの触手がモロにパイファーの脇腹に突き刺さった。鬼武の悲鳴が響く。

急降下で落下するパイファー。その身体が叩きつけられる直前、鬼武はその腕でなんとかパイファーを受け止めた。

「おい、しっかりしろ!!」

「だ、大丈夫さ。こ、こんなもん・・・」

「無理すんな、バカ!」

起き上がったパイファーだったが脇腹からは血が流れている。

「ワ、ワレエ!!死なすぞ!!アホンダラ!!」

羅刹がキレた。その勢いで速度を増した聖魔刀で斬り付ける。何度も何度も。

「ウラァ!!」

「は、速え!!」

「羅刹、後ろだ!!」

鮫島が叫んだ。だがそのときにはもう遅かった。

「な、なにっ！！ぐわあっ！！」

伸びた触手が羅刹の身体に絡まり、そのまま身体を持ち上げる。そして羅刹の身体は地面に叩きつけられた。

「ぐ、ぐう……」

「羅刹！お、おのれえ！！」

鮫島が勢い良く飛び上がった。その手には鬼三がしっかりと握られている。

「鮫島さん！！」

「おおおおおおっ！！」

凄まじい速さで繰り出す鬼三は、以前にも増して切れ味が良くなっている。しかしそう何度も通用しない。

ゲノムは身体を反転させ鮫島の背後に飛び移ると、かつてないほどの勢いで鮫島を吹き飛ばした。

「ぐはあああっ！！」

「鮫島！！」

パイプの叫びが響いた。

冷めた溶岩に叩きつけられた鮫島の体の至る所で嫌な音がした。骨が折れる音だった。

「ぐうう……」

「せ、聖よ……」

「鮫島さん……くそ……なんでこんな事に……クソツタレ！！」

「等々力！よせ！」

呼び出した等々力に鬼武が叫んだ。しかし鬼武の声は彼に届いていない。

等々力の手には鋭利なサバイバルナイフが握られていた。傭兵としての本能が目覚めたのかも知れない。

凄まじい速度で飛び出した等々力はゲノムへ向かって進んでゆく。等々力の左手には得意の毒針も握られており、いつでも攻撃が可能



だった。

弱い発言を繰り返していた先ほどとは違い、その戦いぶりは見事だった。

等々力の狙いは次の攻撃。つまり仲間が立ち上がるまでの時間稼ぎである。

「お、鬼三、大丈夫か・・・」

「な、なんとかな・・・聖、お、お前は？」

「ああ、俺もなんとか・・・」

「強すぎる・・・あまりにも強すぎる・・・」

「鬼三・・・俺は悟ったぞ」

「なに？」

鮫島は静かに語り始めた。骨の折れた身体を起こしながら。

「俺は今まで、自分の宿敵は茨木童子だとばかり思っていた。しかし、その茨木童子はゲノムに比べれば小物同然。

おまけに魔界に来て早々、あの矢吹紅と言う少年に深手を負わされた。

俺は剣客として依頼は果たした。だからもはや魔界に居る必要ないと思っていたんだ」

「聖・・・」

「しかし違ったぞ。今こそ分かった事がある」

鮫島は呼吸を整えた。

「ゲノムを倒さない限り、生きて魔界から帰れない。そして、茨木童子を撃破した今

俺の本当の宿敵は矢吹紅ただ一人！！お前の兄、獣斬の犠牲はゲノム撃破によって浄化されるとな！！」

「せ、聖よ・・・お前と言うヤツは・・・」

鬼三に涙と言うものがあつたら、きつと流していただろう。

「ゲノムを倒し、生きて魔界から帰る！そのために、ヤツを、ゲノムを倒す！！」

鬼三よ、ここからは限界を超える。最後まで付き合ってくれるか？」

「死は元より覚悟の上。聖、お前に全てを託す」

「ありがとう」

鮫島は自前のサングラスを外し、そのまま捨てた。

「行くぞ、鬼三。真の戦いへ」

「ああ！」

鮫島は等々力とやり合うゲノムに向かって飛び上がった。

「ああ・・・があああ・・・」

ゲノムの触手が等々力の腹部に叩きつけられる。それと共に等々力の口から血が吐き出される。

等々力が倒れそうになったとき、その肩に手が置かれた。

「さ、鮫島・・・さん・・・」

そこに鮫島が立っていた。

「無理するな、等々力。時間稼ぎすまなかったな」

「へへ、す、少しは・・・役に立ったでしょ・・・」

「ああ。ゆっくり休んでいろ。ここからは俺がやる」

「鮫島」

「鮫島はん・・・」

パイフーと羅刹が呻くように言った。二人とも重傷だった。動く事さえもはやまならない。

「平成の剣客の名に置いて、ゲノム、その首もらった!!」

鮫島は一直線に走り出し、ゲノムに鬼三を振りかざした。

最終局面は第2章へ・・・。

END

### 33 最終章2 「愛すべき黒猫へ」

「な、なんやあの力は……」

「信じられない……鮫島さんってあんなに強かったのか！」

一方的に斬り付ける鮫島の攻撃は、かつて茨木童子と戦ったときの比ではなかった。

「うおおおっ!!」

それは怒りなのだろうか？それとも憤怒か？いずれにしても凄まじい攻撃力を帯びた鮫島の猛攻がゲノムを襲った。

鮫島は息を切らしながらも斬り付ける事を止めず、とうとうゲノムの肉体を4等分に切り裂いてしまった。

しかし、何度でも再生するゲノムには一時の痛手に過ぎず、しばらくするとすぐに再生してしまった。

それでも全身から闘志を漲らせる鮫島の姿はまさに圧巻だった。「侍」とはこういう姿を言うのであるう。

「食らええ!!」

宙に舞った鮫島の鬼三が振りかざされると、ゲノムの後部に位置する部分が吹き飛んだ。

「やった!!」

「鮫島のヤロー、やりやがったぜ」

パイフーが叫んだ。

「はあ……はあ……はあ……」

鮫島の体はもはや限界を突破している。極度の疲労に極度の動き。

そのダメージが一身に注がれる。

そのため吐き出される呼吸の乱れも、既に常軌を逸していた。

頭部の吹き飛んだゲノムだったが、案の定再生を繰り返し、頭部が肉体に融合した。

だが完全なるノーミスではなかったらしく、動きがわずかだが乱れていた。

ゲノムとて元は人間の融合体。いくら痛みを感じないとは言え「破壊」の二文字は避けられない。

しかし、それにはゲノムの身体を残す事など吹き飛ばす事が条件となっている。

刀での攻撃しか出来ない鮫島にとって、最初から勝利は無いのである。

刀でゲノムをコナゴナにする事は不可能だからだ。

「ニンゲンニシテハ、ヨクヤッタナ・・・」

「なにを・・・」

「クロス」

「ぐはああっ!!」

鋭い鋭利な触手が、鮫島の腹部を完全に捉え、そして貫いた。

「あ・・・ああ・・・がああ・・・ぐう・・・」

「聖!!」

「鮫島さん!!」

「鮫島!!」

鮫島の腹部を貫いた触手はそのまま左右に動き、痛みを倍増させる。

「がああああああっ!!ぐがああああっ」

鮫島の口から夥しい鮮血が溢れる。

「鮫島!!て、てめえ!!」

その時、ずっと立ち往生していたパイフーがゲノム目掛けて突進した。

その勢いで鮫島から触手は抜かれ、鮫島は地面に倒れた。

「聖!!聖!!しっかりしろ!!」

鬼三が叫ぶ。

「鮫島さん」

ゲノムがパイフーによって吹き飛ばされたのを確認すると、等々力が鮫島に駆け寄った。

「まずい、貫かれている・・・このままじゃ・・・」

「大丈夫か!？」

鬼武も駆けつけた。

「がふっ！！」

鯨島の吐血は止まらない。

「だ、誰か聖を・・・聖を助けてくれ」

鬼三の悲痛な叫びが響く。だがその時だった。

「これを使うのじゃ」

「だ、誰だ！」

そこには奇妙な狐がいた。だが通常の狐とは違う・・・。何とも説明しがたい雰囲気醸し出していた。

「お前は、月読！！」

月読と呼ばれた狐の手には小さな小瓶があった。

「お前さんを助けるのもこれが最後じゃてな」

「つ・・・月読・・・か・・・」

月読は小瓶の中身を鯨島に振りかけた。すると瞬く間に吐血は止まり、出血も止まった。

「これは血を止める効果があつてのう。ただ貫かれた傷口までは塞がらんがね」

それでも出血の止まった鯨島の顔に生氣が戻って行く。

「感謝するぞ、月読」

「これでワシの役目も終わりじゃな」

鬼三の言葉に月読が答えた。

「フン！どうやら助かったみてえだな。鯨島」

「パ、パイフー・・・な、何をするつもりだ・・・」

息も絶え絶えな鯨島が言った。

そうしている間にもゲノムがこちらに向かってくる。

「バケモノヤロー、鯨島を殺すのは俺様なんだよ。勝手な真似されちゃ困るつてもんだぜ。

今度は俺様が相手だ！！かかってこい！！」

「イワレルマデモナイ・・・」

「パイフー、止める！！適いっこないぞ！」

「鬼武・・・俺様は誰だ？」

「えっ・・・」

「俺様はお前を愛する白虎、パイファーなんだぜ！誰が誰に負けるって！？」

「パイファー・・・」

「俺様がこんなクソヤローに負けるはずねえだろ・・・」

パイファーの身体から鮫島と同様の凄まじい闘気があふれ出した。

「俺が・・・俺様がこの世で一番強いんだ！！！！！」

「パイファー！！」

「うおおおおっ！！」

まるで爆風のような風を巻き起こしながら、パイファーがゲノムに襲い掛かる。

凄まじい音を響かせ、パイファーの拳がゲノムに突き刺さる。

そう、それはまさしく「突き刺さる」だった。一突き一突きが確実にゲノムを身体を貫いた。

しかしゲノムもバカではない。パイファーが拳を繰り出すたびに鋭利な触手がパイファーを襲った。

「痛くねえんだよ、こんなもん！！」

持ち前の強靱な巨漢と筋骨隆々の肉体。その全てをフル稼働させ、ゲノムの触手を致命傷の手前で抑えている。

極太な肉体だからこそ成し得る偉業だ。

だがダメージは回避できない。いくら痛くないと強がってみても、既にパイファーの身体は血に塗れている。

（鬼武・・・）

「パ、パイファー！？」

その時、鬼武にしか聞こえない一種のテレパシーのような声が響いた。

（お前と出会ったのは何時だったっけかな・・・長いようで短かったが、楽しかったぜ）

「パイファー、お前・・・何考えてんだ！」

鬼武の額から冷たい汗が流れる。パイファーが死ぬ気であることが分かったからだ。

その間にもパイファーの猛攻は続く、文字通り戦う白虎である。

（出来ればこの先もずっと一緒に居たかったがな・・・）

「おい、止める！パイファーよせ！！」

「うおおおお！！コイツは俺が連れて行く！！」

もはやこれが最後の攻撃となるであろう動き。パイファーはゲノムの背後にしがみつき、そのまま高く舞い上がった。

そして自らの身体を逆様にし、そのまま一気に急降下を始めた。

このまま地面に叩きつけられれば、もはやパイファーの命は無い！！

「パイファー！やめる！！」

鬼武が叫んだ。

「バカな事を！」

鮫島も叫ぶ。

「くそつたれ！！」

「そう上手い事行かすかいな！！」

「な、なに！！」

いつの間にかパイファーの背後に羅刹が居た。羅刹の聖魔刀はゲノムの触手を切り裂き

パイファーとゲノムの身体が引き離される。

「カッコ付けよう言う気持ちは分かるさかい。せやけど、誰も死なせへん！！」

間一髪のところ、難を逃れたパイファーは、血塗れの身体で何とか着陸。一方のゲノムは地面に叩きつけられ見るも無惨な姿となった。だがそれも束の間。ゲノムは再び再生する。

「今度はワイが相手や。バーサーカー羅刹、ナメとつたらあかんぞ

「!!」

凄まじい暴風と共に、羅刹のフルパワー、バーサーカー羅刹がそこに居た。

END



### 34 最終章3 「最終決戦へ」 「本心を隠したバーサーカー」

バーサーカーと化した羅刹に聖魔刀は必要なかった。聖魔刀よりも肉体的な攻撃力の方が上だからだ。

「うらあー!!」

羅刹の拳は岩をも砕き、その砕かれた岩がゲノムに突き刺さる。しかし再生を繰り返すゲノムにはほとんど意味が無い。

攻撃を続けながら羅刹は由佳を見た。由佳は傷付いたウルの治癒に専念している。

時折ウルは由佳と何か喋っているが、話の内容までは聞こえない。

(そもそもワイは何で魔界に来たんやっけな・・・)

繰り出す拳の力を強めながら思った。

リアル世界で殺人を繰り返していた羅刹は、とうとうギネスに残す大量殺人を実行に移した。

羅刹が天誅を下す相手はワル限定ではあるものの、それが犯罪である事は事実だ。

関西地方最強と呼ばれた暴力団を壊滅させた羅刹は、その組長から魔界の存在を聞かされた。

自分よりも強いヤツがいる。その言葉が耳に残り、興味を抱いたのだ。

リアル世界で羅刹に勝てる相手など居ない。しかし魔界では大量殺人など日常茶飯事だと言う。

更なる殺戮を求めて羅刹は魔界にやって来た。自分よりも強い男「神殺しウル」を倒すために。

いざ魔界に来てみると、組長が言ったとおりツワモノばかりだった。リアル世界で難なく始末できた人間も、ここ魔界ではそう簡単には行かなかった。

それは魔矢と死闘を繰り広げた羅刹だからこそ分かる事である。

そしてそんな血肉の飛び交う魔界で一人の女と出会った。

それが由佳だった。

羅刹は一目惚れするようなタイプではない。にも拘らず初めて由佳を見たとき、ピンと来るものがあつた。

一体それが何なのか羅刹はずっと考えていた。そして分かった事がある。。

それは、自分は由佳が好きなのではない。魔矢を愛する由佳の姿に惚れたのだと。

由佳に魔矢と言う存在が無かったら、羅刹はここまで由佳を好きにならなかつただろう。

献身的で謙虚。そして何より寛大な優しさで魔矢を支える由佳の姿は、文字通り天使のような存在だった。

そんな女と羅刹は出会ったことが無かつた。魔矢との相性は抜群である事は間違いない。

だからこそ「恋する乙女に恋した男」を受け入れる事になってしまったのだ。

由佳に良いカッコ見せるとか、もはやそんな事はどうでも良かった。ゲノムを倒さない限り、由佳は幸せになれない。だからこそ由佳を脅かすゲノムを倒す事を羅刹は誓ったのだ。

それに魔矢、紅、ウルとの微妙な関係も悪くなかつた。

三人ともいわば「同類」なのだから。人を殺すことでしか得られなかつた感触を

この三人と出会ったことで得る事ができたのもまた事実だった。

そこへパイパー・鬼武、等々力、鮫島、鬼三との出会いが重なり、いつしか魔界は羅刹の居場所となつた。

そんな折、現れたのがこのゲノムである。魔界を崩壊へと導く悪の元凶。何があつても始末しなければならぬ。

自分の居場所を守るため。そして愛する人の幸福を祈るために・・・。

(ワイってこんな役回りばっかやな・・・)

羅刹の渾身の一撃を込めた拳は、ゲノムの肉体を完全に砕いた。

「どうしてそんな事を・・・そんな事したら無事じゃ済まないよ」

「分かってる。だが、これしか方法が無い」

「だけど・・・」

治癒を施していたウルから聞かされた事実は、由佳に大きな衝撃を与えた。

「魔界を守るためだ。やるしかない」

「待ってウル！死んじゃうよ！」

「大丈夫さ、信用しろって」

ウルは久しぶりに笑った。神殺しウルに笑顔とは何ともミスマッチだが、その表情は晴々としていた。

「鬼武、それに等々力・・・だったな」

「ひい！！」

立ち上がったウルは等々力の元へ行き、彼の名前を呼んだ。

「ななな、な、な、なんで・・・ございましょう・・・？」

「ビビり過ぎだろ、等々力」

鬼武が苦笑いを浮かべた。

「お前たちに頼みがある」

バーサーカー羅刹の最大の弱点はスタミナだった。

急激に発達した筋肉を維持するためには膨大なエネルギーを要する。エネルギーの消費が長く続けば当然動きも鈍くなってしまう。

羅刹の身体はもはや限界だった。先ほどから怒涛のように続いていた攻撃のスピードが落ちている。

「クソッ！なんやねん、このバケモノは」

それを見逃すゲノムではなかった。

「ぐはあっ！」

「羅刹！」

上空から一気に急降下した羅刹の身体は地面に叩きつけられた。そこへゲノムが真つ逆さまで落ちてくる。

「うががあっ！」

ボキボキと否な音を立てて無数の骨が折れた。

羅刹の身体は元の姿に戻っていた。もはやバーサーカーを維持する事さえ出来なくなっている。

「うっ・・・ホンマ・・・なんでワイはこんな役・・・ばっかなんや」  
鞘から聖魔刀を取り出した羅刹だが、立つのがやっとである。

そこへゲノムが近づく。もうまともに戦える人間はいない。鮫島は重傷、パイフーも大怪我。

「サイゴダ・・・」

「くそつたれ・・・」

振り上げられたゲノムの鋭い触手が羅刹を狙う。勢いを付けた猛攻は一直線に羅刹へと注がれんとしている。

「最後はお前だろ」

「なんや！」

ゲノムの攻撃が羅刹に当たる瞬間、凄まじい爆風と共にゲノムが吹き飛んだ。

「ウ、ウル・・・」

羅刹の後ろにはウルが立っていた。

「ウ、ウル・・・あんさん・・・怪我は・・・」

「この程度じゃ怪我のうちに入らんさ。ゲノムは俺が倒す」

「せやけど、あんさん・・・」

「元々これは俺とゲノムとの戦い。余計な連中まで巻き込む結果となったが、それももう終わる」

「な、なんやて」

「今すぐ火口から離れる。いずれこの火山は爆発し、島は崩れる。由佳たちが待つ場所まで離れるんだ」

見ると、由佳を始めパイファーたちは火口のすぐそばに移動していた。羅刹は自分が火山の火口にいる事に気付いていなかったのだ。小さな丘を隔てた向こう側に由佳たちが居た。

「勝算はあるんかいな」

「ある。だからこそ今ここに居る」

「そうかい」

羅刹はそう言い残し由佳たちの元へ歩き出した。

「癖の多い連中を束ねてよくここまで来たな。意外とリーダーの素質があるんじゃないか」

「あんさんに言われとうない。こっちはド偉い迷惑や」

「フフ、巻き込みまっすすまなかつたな」

「もうええわ・・・勝てよ」

「ああ」

足取りのおぼつかない羅刹の元に由佳が駆け寄った。

「大丈夫？」

「なんとか・・・迎えに来てもらえてワイは幸せもんな、マイ・ワイフ」

「冗談言えるくらいなら平気ね」

そう言くと由佳は手を離し戻ってしまった。

「な、なんやそれ！！手え貸してくれるんとちゃうんかいな！」

「自分で歩きなさい」

丘の上から笑い声が聞こえた。見るとパイファーたちが腹を抱えて笑っている。

「なんやねん、もう！！」

「フフフ。ホラ、掴まって」

そう言くと由佳は手を差し出した。なんだかんだで優しい由佳である。

マグマの中に落ちたゲノムの身体は再生を繰り返し這い上がってきた。

これで火口に残ったのはウルとゲノムだけである。

「長い戦いだっただ」

「クロス・・・クロスクロスクロス！」

「終いにしよう。これで全てが終わる」

ウル、ゲノム。両者の姿は立ち込める煙の中で衝突した。

E  
N  
D

### 35 　　く聖戦、ウル vs ゲノム 決着のとき

羅刹が火口から離れると、そこには由佳たちがいた。

由佳だけではない。パイパー、鬼武、等々力、鮫島、そして鮫島の愛刀鬼三。

鬼武以外は全員が満身創痍であり、倒れながらウルの戦いを見ている者が居る。

それだけゲノムは強大であり、手強い相手であることが伺える。

火口付近で爆発音が轟いたとき、鬼武と等々力がランドクルーザーからドラム缶を下ろしてきた。

もはやともに動けるのは鬼武と等々力しか居なかった。

「な、なんに使うんや？」

「ウルからのリクエストです」

等々力がそう言った。

ドラム缶には液体水素と書かれていた。

「液体水素・・・なんや、一体・・・」

「ま、見てれば分かるって」

鬼武がそう言った。

煉獄の火山はもはや爆発寸前だった。後数分もしないうちに噴火するだろう。

だがそんな場所にウルは居るのだ。宿敵ゲノムと一緒に。

「そろそろ頃合だ」

「グルルル・・・」

鮫島、パイパー、羅刹によってたたか傷つけられたゲノムの肉体は完全に再生する事が出来なくなっている。

ゲノムとは言え生命体である。限界は付き物だ。

「長かった・・・。お前にはうんざりだ、ゲノム。お前のせいで多くの仲間が傷付いてしまった・・・。」

魔矢、紅、そしてあの連中も」

ウルはそう言うのと顔を羅刹たちが居る場所へ向けた。全員がウルとゲノムの戦いを見守っている。

「俺は今まで神殺しと言う言葉を鼻に掛けたことは一度も無い。だが、俺には魔界を守る義務がある。

それが神殺しの称号を持つ者の使命。やるべき事だ」

「ウル……」

「今一度お前を葬り、魔界に安堵をもたらす。それが俺の役目だ！  
！」

そう言った瞬間、ウルはジャケットの袖から大量の手榴弾を取り出し、ピンを引き抜いた。

「な、何をするつもりや！！」

「バ、バカな！あんな場所で爆発させたら噴火するぞ！！」  
羅刹と鮫島が叫んだ。

「これで終わりだ！！」

ウルはそう言うのと、持っていた手榴弾を全て火口に投げ入れた。

「や、やべえ！！」

「みんな、伏せて！！」

由佳が叫んだ瞬間、火口に消えて行つた手榴弾全てが爆発し、凄まじい轟音と共に火を噴いた。

「うお！！」

「ぐわっち！！」

鮫島とパイフーが共に後方へと吹き飛ばされた。だが岩に捕まり難を逃れる。

「島が……煉獄が崩壊する……」

「あかんで！ここは孤島や！このままやと海にバシャンやで！」

噴火を始めた孤島、煉獄は文字通り業火の如くマグマが吹き上がり、島の外壁を破壊して行く。

「クロス！！」

「やってみな！！」



その業火の中、ゲノムがウルに襲い掛かるのが見えた。ウルに武器は無い。あるのは己の肉体のみ。

遅い来るゲノムの触手を両手で受け止めると、そのままの格好で力押しの状態に入った。

「掛かったな！」

ウルはゲノムの後方に回ると、後ろからゲノムを羽交い絞めにした。

「鬼武、等々力！」

「あいよ！！！」

「待ってたぜ、この時を！」

「鬼武！等々力！」

いつの間にかドラム缶を持った鬼武と等々力が羅刹たちの目の前に立っていた。

「な、なんや！」

「ウルから言われてたの。火口を爆破するからその後このドラム缶を流せて」

由佳が羅刹に説明した。

「行くぞ、等々力！準備は良いか？」

「いつでも良いぜ！」

「おっしゃあ！流せ！」

「あいさ！！！」

合図と共に液体と化した水素が火口に流れる。液体水素はウルとゲノムに向かって一直線に向かって行く。

液体水素が降りかかる瞬間、自分よりも巨体であるゲノムの頭部にウルは飛び乗った。

液体水素には物質を瞬時に凍らせる力を持っている。

しかしそんな液体水素に極端な熱が加えられる、熱と化学反応を起こし、大爆発を起こす事をウルは知っていたのだ。

熱なら打って付けのマグマがある。そこに液体水素が降り込めば、島ごと吹き飛ぶ事は必至だ。

「ギョオオオオオ！！！」

液体水素がゲノムを襲う。液体水素が触れた部分は瞬時に凍り付き、身動きが取れなくなる。

「あかん！ウル、急いで戻って来い！し、島が爆発するで！」

もはや島全体が凄まじい揺れを起こしている。巨大な地震が島を襲う。

「ああ！」

「ニガサン……」

「な、なに！！！」

「ウル！！！」

もはや全体の9割が凍り付いているゲノムだったが、その意思是半端じゃなかった。

最後の悪あがきとも取れる、ウルの右腕を掴み離さないのだ。

「や、やべえぞ、あいつ！！！」

「おい、急げ！」

パイフーと鮫島が同時に叫んだ。

「なにしとんねん！！！」

「ウル！！！」

「くそつ！！！」

液体水素の流用は止まらない。掴まれたウルの右腕から冷気が伝わり、徐々に凍り付いて行く。

ちようどその時、島が大爆発を起こした！

「ぐわっ！！！」

「くそつ！！！」

「どうすんだ、おい！！！」

「もうあかん、ウル！！急げ！！！」

「島が……崩れ行く……」

ウルは静かにそう言った。

「羅刹！もう限界よ、島から離れるわ！」

「せ、せやけど・・・」

「行け・・・」

「なに!？」

それはウルの声だった。

ゲノムに右腕を掴まれたまま凍り付いたウルの意識が羅刹に言葉を送ったのだ。

「お前たちまで死ぬ事はない。こいつは俺が連れて行く」

「ウル・・・なんや、それ・・・冗談ちゃうで!!」

「良くやったよ。感謝してる」

「おい!ウル!ワイはあんさんを倒すために魔界に来たんやで!」

「俺よりも魔矢とケリを着けるのが先だろう」

「そっという問題ちゃうわ!!勝ち逃げかよ!!」

「そう思いたければ勝手に思え。じゃあな・・・」

「ウル!ウル!!」

「なにやってんだ!お前は!!」

その時、一向に離れない羅刹を見かねて、パイフーが羅刹を連れにきた。

「さっさと行くぜ!関西人!」

「せ、せやけど、ウルが・・・ウルがまだあそこにおるんや!」

「もう無理だ、諦めろ!」

そして最後の大爆発が火口で巻き起こった。

「ウルウ!!!!」

それが由佳の叫びだったのか、それとも羅刹だったのか、定かではなかった。

「ちきしょー!!もう離れようが無い!」

島へと続く道は既に海に沈んでいた。これで完全に活路は閉ざされた事になる。

「どうにかならんのか!」

鮫島が叫んだ。

「ここまで来て死ぬのかよ」

鬼武が頂垂れる。

「魔界なんて来るんじゃないかったな……」

等々力が首をガックリと曲げた。

その時、立ち上る煙に中からへりの音が聞こえた。

「なんや!!」

「へりだ!!」

「どうやら助けが来たみたいね」

「助けて、他に誰もいないぜ」

「居るじゃない。後二人、かつてのNo.2と3が」

燃え上がる爆炎の中から姿を現したのは、紅が操縦する軍事用のヘリだった!

助手席には両目に包帯を巻いた魔矢が座っていた。

「遅くなったな!みんな乗れ!!」

「早く乗って!もう煉獄は持たないよ!」

魔矢と紅が叫んだ。

「ナイスタイミングだぜ!」

パイプー、等々力、鮫島、鬼武、由佳の順にへりに飛び乗る。

「ウル……」

もはや火口は見る影も無かった。あれだけの爆発ではさすがのウルも耐えられるはずが無い。

「羅刹、急げ!」

魔矢が叫んだ。

「ああ……」

何ともやりきれない思いで羅刹はへりに飛び乗った。

「みんな、何かに掴まって!」

紅がそう叫ぶと、一同は全員壁や手すりに掴まった。

「行けるか、紅」

「うん、多分大丈夫だとは思っけど、さすがに距離が近すぎるからね」

「頼むぜ、おい」

「救いの手が来たんだ、死にたくないな」

パイパー、鬼武がそう言った。

「煉獄が・・・爆発する」

魔矢がそうだった瞬間、地平線に真っ直ぐな光が走ると共に、忘れられた孤島「煉獄」は凄まじい轟音を響かせ海へと沈んだ。

「ぐわっ!!」

ヘリが激しく揺れる。轟音は爆風を伴い、ヘリの自由が奪われる。

それでも紅は操縦の手を離さなかった。魔矢もそれに手を添え、何とか軌道を確保しようと必至になった。

「飛ばすよ!!」

「ああ!」

ヘリは立ち上る煙を脱出し、魔界の中央部へ飛んだ。

その瞬間、海に沈んだ煉獄は海中で再び大爆発を起こし、粉々に砕け散って行った・・・。

END

「最終章「それぞれの明日」」

「そっか・・・ウルはゲノムと一緒に・・・」

「どうにもならへんかった、すまん」

「お前が誤る事ではない。仕方なかったんだ」

「せやけどな・・・」

「気にするなよ」

魔界唯一の病院、魔界病院に戻ってきた一同は、夜叉によって治療が施された。

特に重症だった羅刹、パイファー、鮫島には手厚い保護がされ、三人とも徐々に回復の兆しを見せている。

ウルの実事を知った紅は酷く落胆していた。無理も無い。紅にとってウルと言う存在は自分に取って初めての理解者だったのだから。

無理してへりを飛ばした紅と魔矢の傷もまだ癒えておらず、二人ともベッドの上だ。

軽症で住んだ鬼武と等々力は夜叉の指示によって治療の手伝いに回っている。

「大丈夫か？パイファー」

「なんとか・・・かしひでえ戦いだったぜ」

「大健闘だったらしいな」

魔矢が声を掛けた。

「どうだかな、一番美味しいところをそこの関西人に持って行かれちまったけど」

「ワイ？よく言うで、パイちゃん死にそうやったやん」

「だからパイちゃんって言うんじゃねえ！！」

「アハハハ！」

その隣では鮫島と鬼三がようやく一息付いていた。

「大丈夫か？聖」

「ああ。貰かれた部分がまだ傷むが、歩けないほどではない」

「それにしても凄まじい戦闘だった」

「後にも先にもあんな戦いは最後だろう。出来れば御免被りたい」

「それにしても鮫島さんがあんな強いなんて知りませんでしたよ」  
等々力が言った。

「いや、あの時は無我夢中だったからな。実のところ良く覚えていないんだ」

「でも僕の事は覚えているよね？」

ベッドからひよっこり飛び起きた紅が鮫島の下へ来た。

「戦いやゲノムを忘れる事はあっても、お前を忘れる事など有り得ない」

「良かった、鬼三は元気？」

「とても元気とは言えんな・・・って相変わらず無邪気なヤツだ」  
「アハハ！！何事も楽しくだよ」

一通り治療を終え、一同は病院の外に出た。

各自包帯を取る事は出来ないが、歩けないほどではなかった。

外に出るとすっかり朝日が昇っていた。どうやら夜が明けてしまっ  
たらしい。

「終わったな」

魔矢が言う。

「うん。これで魔界は元通りね」

由佳がそう言った。

「まさか魔界に来て早々こんな目に合うとは思わなかったけどな」

「ホントだよ。俺たちってどうしていつもこうなんだろう」

パイフーと鬼武が言った。

「依頼は果たし、ゲノムも撃破した。これで完全に終わりだ」  
鮫島が続く。

「刺激ありすぎですよ、魔界は」

苦笑いの等々力。

「これから魔界はどうなるんや？ウルはその・・・」

「ウル無き後も魔界は魔界だ。なんら変わる事は無い」

魔矢が羅刹にそう言った。

「ゲノムは死んだ。これでウルが居てくれたら、どんなに良かったか・・・」

紅の呟きで一同に静寂が訪れた。

「さて、んじゃ帰るか」

「そうしますか」

パイフーと鬼武が口を開いた。

「二人とも魔界で生きるのか？」

「リアル世界で強い連中がいるならぶっ倒しに行くが、とりあえず俺らのアジトに戻るぜ」

魔矢の質問にパイフーが答えた。

「疲れたしな」

鬼武が呟いた。

「おい、鮫島」

パイフーが鮫島を見た。

「てめえとのケリは次までお預けだ。それまで死ぬんじゃねえぞ」

「貴様こそな」

「フン！じゃあな。行こうぜ、鬼武」

「ああ。それじゃまた」

「気をつけてな」

「バイバーイ」

パイフー・鬼武は寄り添い合う様に振り返る事無く去って行った。

「聖よ、我々も行くとするか」

「そうだな」

「ちゃんとリアル世界まで送りますよ」

等々力が言った。

「行っちゃうの？鮫島のお兄さん」

「ああ。依頼主に仕事が完了した事を伝えに行かなきゃならん」

「その後はず」



「さあな。気の向くままだ」

「そっか」

「パイフーとのケリもそうだが、矢吹紅、お前とはもう一度戦ってみたいと思っている」

「僕もだよ。ただ愛刀が折れちゃったから、次までに新しい刀用意しておかなきゃいけないけど」

「ああ。今度は本気でな」

「勿論」

「いろいろ世話になったな、鮫島はん。感謝しとるで」

「良い経験が出来た。上には上がいるとな」

「足はあるのか？」

「一度魔界処理場に戻って車を取ってから帰ります」

魔矢の質問に等々力が答えた。

「等々力さん、あの約束どうしよっか？」

由佳がそう言った。当然デートの件である。

「約束？」

魔矢が由佳を見る。

「あ、いや・・アハハハ・・そ、そんな話しましたっけね」

「それだけはワイがさせへんぞ!!」

「ひい! さ、鮫島さん、早く行きましょう」

「やれやれ・・それじゃ、また会おう」

「元気だね」

「いろいろありがとう」

紅と由佳が言った。

鮫島、鬼三、等々力の三人は車を取りに魔界処理場へと足を向けた。そしてその場に残ったのは羅刹、紅、魔矢、由佳の4人になった。

「さて、ワイもそろそろ行くさかい」

「お前もどこかに行くのか？」

「ワイはそもそもウルの首を取るために魔界に来たんや。そのウルがもつおらへんのやったら狙う意味もないからのう。」

しばらくこの魔界を旅してみよう思ってるんや」

「魔界をか。魔界は広い。俺たちのいる場所は広い魔界の一角に過ぎんからな」

「せやろ？だからどっかにメツチャ強いヤツがおるかも知れへん」

「死んじやったりしてね」

「勝手に死なすな！ワレ！」

「アハハハ！」

「どれくらい流れるんだ？」

「せやな。3年くらいは流れるさかい」

「そうか」

「なんや？そない残念そうなツラして」

魔矢は紅と由佳を見た。その表情は「話してみようか？」と言う様子である。

「実はリアル世界に探偵事務所を開こうと思っていてな」

「探偵事務所！？なんや、もう魔界はええんかいな」

「この身体で戦うのはもう無理だ。今のところ俺たち3人がメンバーなんだが、お前もどうかと思ってるな」

「良かったら一緒にやらない？きつと楽しい事務所になると思うの」

「やろつよ、関西人」

「だから羅刹言うてるやる！！おもしろい話やと思うし、せつかくの誘いやけど、遠慮しておくわ。」

魔界の旅をしてみたいんや」

「そうか」

「なんだよ、つまんない」

「ツマラン言っな！このヴォケ！」

「それじゃ旅が終わってその気になっていたらいつでも来てくれ」

「せやな。そんな時は世話になるさかい」

羅刹は簡単な荷物を背負った。

「それじゃ、もう行くわ」

「ああ。気をつけてな」

「ちゃんと帰って来いよ！関西人」

「せやから羅刹や！！」

由佳は羅刹の前に出ると右手を差し出した。

「おろ？」

「貴方がいたから魔矢は助かった。そして私も。ありがとね」

「ええ女やな」由佳ちゃんは・・・これで旅から戻って魔矢のガキがおったらワイショクやで」

「フフフ・・・十分ありえる話よ」

「ハハハ！ほな、幸せにな」

「ありがとう」

羅刹は由佳と握手を交わし、歩き出した。

地平線から朝日が昇り、魔界を明るく照らす。それぞれの明日を描きながら今日と言う日が始まる・・・。

魔界における激動の時代は終わりを告げた。

1年後・・・。

今は海だけとなった場所。

そこにはかつて「忘れられた孤島、煉獄」と言う島があった。

傷付いた身体で塩水を泳ぐのは苦痛だったが

男はそれほどの痛みは感じていなかった。

平泳ぎで岸边に辿り着くと、男は短い髪の毛をかき上げ、周囲を見渡した。

「やれやれ、相変わらず変わらんな、魔界は」

男の風貌には懐かしさが感じられた。

黒髪でスポーツ刈り、黒皮のジャケットに長身の身体。ジャケットの中には無数の凶器・・・

そして男は静かに言った。

「魔界・・・俺の帰るべき場所だ」

T  
h  
e  
  
E  
N  
D

「アナザー・ストーリー」 エピソード1「神殺しウル、誕生秘話」

神殺しウル・・・今ではこの言葉を魔界で知らぬものは誰一人いない。

文字通り神さえも殺しかねない殺人鬼。魔界でNo.1の実力を持つ者のみが与えられる最高の栄誉である。

しかし、その神殺しウルの素性は未だ不明であり、その過去を知るものもまた存在しない。

ここで語られる物語は、そんな神殺しウルの過去の物語。

神殺しはいかにして神殺しと成り得たのか・・・。

そしてどのようにしてこの世に生を受けたのか・・・。

凄惨且つ、惨たらしい過去の扉が開かれる・・・。

「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

凄まじい心拍数が跳ね上がる中、可憐かれんは軀となった夫の亡骸を見下した。

「お前が悪いんだよ・・・全部ワタシのせいにするから、こんな事になったのさ・・・」

ドップリと返り血を浴びた可憐は、右手に鉋を持ったままそう言った。

「お前も嬉しいだろ、麗。お母さんの復讐が全て終わったんだ。お前も喜んで生まれ来るといい。」

必ずしも望まれた子供じゃないけどね」

可憐はそう言いながら自分の下腹部を擦った。

今現在子宮の中には麗（うるは、後のウル）と名付けた我が子が宿っている。

可憐はずっと麗の妊娠を恨みながら今日の復讐劇を迎えたのだ。麗の命を喜べるはずも無い。

何故なら麗はこの憎き夫の血を受け継いでいるのだから。

そんな子供を子供として受け入れられるはずもなく、可憐の中では「忌み子」としてその役目を背負わされていたのだ。

「ワタシがどれだけ苦労したか、お前に分かるか？ 麗……」  
可憐は静かに目を閉じ、過去を振り返った。

幼い頃に両親を亡くした可憐は、その後の人生全てを親戚の元で過ごした。

だが必ずしも可憐を快く引き取る親戚だけではない。そのほとんどが邪険にされながら引き取られていた。

「とろい子だよ、あんたって子はっ！」

たらい回しにされた先々で可憐は親戚による執拗なまでの虐待に合った。

殴る蹴るは日常茶飯事。食事制限などもはや常識だ。何も食べさせてもらえなかった日もあった。

それでも可憐は文句を言う事など許されなかった。自分には帰る場所など無い。親はもう居ないのだ。

少なくとも成人するまでは何処かで養ってもらわないと、人生破滅である。

可憐は果てしなく続く暴力の嵐の中、ずっと息を潜めるように耐えてきた。

「メスブタ」「淫乱」など、まったく身に覚えの無い言葉まで浴びせられる頃になると

引き取り先の男たちの格好の性処理機として扱われた。

夜になると親戚の主人たちが可憐の部屋に忍び寄り、口を塞ぎ、裸にして暴力を振るう。

「所詮お前はメスブタだ。誰にでもやらせるんだろ？」

中学から高校に上がると、親戚たちによる言葉の攻撃で可憐の精神はもはや限界ギリギリだった。

嫌がる可憐を無理矢理押し付け、気が済むまで犯し続けた。

後に残ったのは身体の中、外問わず放出された男たちの白い欲望の

み。

いつしか可憐の心は壊れ、そして今の夫の子供を孕んでしまったのだ。

今しがた殺害した夫、一輝が可憐と一緒になった理由は至って簡単。可憐が我が子、麗を宿したため仕方なく籍を入れた。決して望んだ結婚ではなかった。

一輝も可憐の親戚一同の一人であり、別に親戚同士が結婚する事に問題は無いのだが

相手が親無しの可憐だと、いろいろと都合の悪い事例が出てくる。メスブタ呼ばわりされた女が自分の妻である事を知られたら、他の親戚たちに何を言われるか分かったもんじゃない。

そのため一輝は可憐の存在を隠しながら、偽りの夫婦生活を続けてきた。

「お前なんかカスだ。俺はお前を嫁として認めないからな」  
もはや慣れきった言葉だったが、既に麗を身籠っていた可憐にはキツイ言葉であった。

それ以後も一輝、そして他の親戚たちからの嫌がらせは続いた。  
会えば意味も無く唾を吐きかけられる。頭を叩かれ、振り向いた瞬間、凄まじい威力持った拳が顔面に打ち込まれる。

痛みで悶絶していると今度は腹を蹴られ、のた打ち回る可憐に冷たい水が浴びせられる。

そして最後に裸にされ、強姦されると言うのがいつものパターンだった。

当然ながら避妊具など無い。真っ白な欲望は下半身の奥深くに注ぎ込まれる。

もはや限界など超えていた。そしてその頃から「殺してやる」と言う確固たる憎しみが可憐の心に巣を作っていたのだ。

我に返った可憐はまたもや下腹部を擦っていた。

殺害した夫の首は切断し、身体は工事用の切断機に放り込み、粉々に砕いて海に捨てた。

そしてその半年後、可憐は本格的な陣痛を向かえ、麗が誕生した・・。

「言っておくけどお前はワタシにとって邪魔以外の何者でもないんだからね。」

その辺勘違いしないでよね！」

「・・・・・」

「まったく何言っても無言かい！このバカ子がつ！？」

「・・・・・」

幼い頃からそう言われ続けて麗は育った。学校から家に帰っても可憐はおらず

夕食の支度も自分でしなければならなかった。

麗は何も言わず黙って生活を続けた。心の中に絶対的な殺意を育てながら・・。

「やゝい、お前んち貧乏家！みすばらしい世捨て人ゝ！」

「お前汚いんだよ、寄るな！」

「死んだ目してんな、いつそ殺してやろうか？」

「お前んちの母親ヤリマンだろ？いつもホテルから男と出てくるんだぜ」

「毎回男が違うんだよな。そんなにモテる顔じゃないってのにな、お前の母さん」

小学、中学、高校と麗は他の生徒たちから差別され続けていた。

それでも麗は何も言わなかった・・。

だがそれは言葉で何も言わなかったただけだ。何も行動まで起こさなかった・・・と言うわけではない。

この頃から麗の通う学校では生徒たちが次々と行方不明になるという奇怪な事件が多発し始めた。

警察も本腰を入れて動き出したが、依然として犯人は見つからず、



生徒たちも見つからない。

警察の捜査の手は当然同じ学校に通う麗にも及んだが、麗が学校でいじめられている事実を知り

そのいじめに対し抵抗しなかった事実を見つけると、警察は麗のマークを外してしまった。

警察では「復讐などするようなタイプではない」と踏んだのだろう。しかし警察の読みは浅かったのだ。幼い頃から憎しみによって育てられた麗にとって

自分の感情を消し去る術など、当に身に付けていたのだから。

こうなってしまうはもはや麗の独壇場である。

言葉による抵抗は皆無だった。だがしかし、行動による抵抗は確かに、そして静かに続けられていたのだ。

行方不明になった生徒たちは、行動を起こした麗によって惨殺されていたと言う事実は、もはや言うまでも無いだろう……。

「お前、人を殺したね？」

「……………」

「黙つてても分かるんだよ。殺つただろ？ええ？そうなんだろ！」  
家に帰った麗を可憐は執拗に責め始めた。

「お前の学校の生徒たちが行方不明になっているって、今日警察どもが来たんだよ！」

「……………」

「お前だろ！？お前が殺したんだろっ！？」

「だったらなんだって言うんだ？」

このとき、可憐は初めて我が子の声を聞いた。産まれた時の産声意外で声を聞くのは初めてのことだった。

「この人でなしがつ！！人様に迷惑掛けるんじゃないよ」

可憐の容赦ない平手が飛んでくる。

「人の事どうこう言える立場なのか、お前は」

「お前・・・お前だとっ！！！！母親に向かってお前とは何様だっ！！」

「俺様だよ。お前が母親だなんて俺は思っていない。ただのメスブタに過ぎん」

「な、なんだつてえ・・・この人殺しがっ！！」

「お前だつて人殺しだろ？あの男を殺したじゃないか」  
「っ！！」

麗は知っているのだ。まだ母体に居たときに可憐が殺した夫の事を。常識的に考えてそれは不可能である。だが、どういうわけか麗はそれを知っている。

「やっぱり・・・やっぱりお前は生まれてくるべきじゃなかったんだよ、麗！？」

「今頃言つても遅いだろ。頭の悪い女だ」

「このガキッ！！死ね！！」

可憐は我が子麗に飛び掛った。だが高校生になった麗に力で勝てるほど強くはない。

可憐は呆気なく麗に首を掴まれてしまった。

「お前がな」

「えっ・・・！？」

次の瞬間、「ゴキッ！」と言う鈍い音を立てて可憐の首があらぬ方向へと曲がった。

「あああ・・・ああああ・・・ああ・・・」

可憐の口からヒューヒューという空気の音が漏れる。

「メスブタには相応しい最後だな」

可憐の口から大量の溢れる。ごばごばと言う音を立てながら床でのた打ち回る可憐。

「これで済むと思うなよ、親不孝者・・・いつか、いつかお前を殺してやるからな」

「死んでどうやって俺を殺そうってんだ。バカ女がつ！？」  
そして可憐は一切の動きを止め、絶命した……。

翌日、麗の通っていた学校でまたもや行方不明者が出た。

今回、行方不明になったのは鉄 麗と言う生徒で、他の生徒たちから執拗ないじめを受けていた生徒であることが分かった。

また彼の家で何者かによって殺された彼の母親が発見されている事から

鉄麗が何らかの事情を知っているとして警察は捜査しているという情報が流れた。

行方不明になる前日、彼を最後に目撃した近所に住む大学生の話によると

彼は全身血塗れになりながら夜の闇の中に消えて行ったと証言している。

麗は表の世界から完全に姿を消したのである……。

「ひいい！！だ、誰なんだお、お前は……」

ゴトンと転がった死体を余所に、男は自分の目の前で立ち尽くす人物にそう言った。

「鉄 麗……魔界か、なかなか良い場所だな。気に入った」

この日、麗は魔界に降り立った。

それから14年後、麗は魔界で凄惨な殺戮を続け、ついに魔界No.1である「神殺し」の異名を会得した。

更にその2年後、仲間の紅、魔矢と共に「神殺し」と言う物語の幕が開かれるのである……。

END

## アナザー・ストーリー〜エピソード2「紅の真実」

「ウザいんだよ、お前！」

もはや聞き飽きた言葉だったが、今日もそんな言葉と共に紅葉は左頬に平手打ちを食らった。

「ちよつと可愛いからって調子に乗んなよ」

他の生徒は手加減と言うもの知らない。今度は別の女性の蹴りが紅葉の腹を抉った。

「うぐう……」

紅葉は痛みで表情を歪めながら、身体を前かがみに折り曲げた。

「良い？今週の金曜までに20万持って来るんだよ。持ってこなかったらどうなるか分かってるわよね？」

「……」

紅葉は何も言わずに蹴られた腹を擦っていた。勿論「うん」なんて言える訳が無かった。

何処にでも居る単なる女子高生が20万なんていう大金をそう易々と持ち合わせているはずも無い。

彼女をいじめていた女子高生たちはその場を後にした。

「あの子意味分かんない。何やっても無表情で、痛めつけられても笑ってるんだから」

「キモイだけよ、殴られて笑ってんだから。ひょっとしてマゾなんじゃね？」

「アハハハハ！」

生徒たちの言葉は紅葉に届いていた。だが当の紅葉は心を痛めることなどなかった。

気にしないのが一番……。いちいち反応すると余計に殴られるから……。

笑っていればキモイの一言で済む。余分に殴られる必要も無い。だから嫌なときでも笑ってれば良い……。例えこの心を壊す事

になっても・・・。

「おかえり、紅葉」

「お母さん、駄目よまだ寝てなきや」

「大丈夫よ、今日は気分が良いの。体調も良くなっている気がするし」

「だけど・・・」

「良いのよ、ゴメンネ。紅葉には苦勞ばかり掛けて・・・」

「そんなこと気にしなくて良いよ。私は平気だから」

そう言っていると紅葉は病弱な母に向かってニツコリと微笑んだ。その笑顔はまるで天使のような笑顔だった。

「そのアザどうしたんだい？」

「えっ・・・ああ、これはね、ちょっと転んじゃってさ」

「ちゃんと消毒しなきゃ駄目よ」

「分かってるって」

そう言っていると紅葉は救急箱の中から絆創膏を取り出し、アザの部分に貼り付けた。

紅葉の母、矢吹洋子は3年前に夫と離婚して以来ずっと身体の調子が悪かった。

あまりにも不調が長引くので病院へ行ったところ、慢性の気管支炎だと診断された。

元々病弱だった洋子の回復力は小学生並に遅く、もはや完全に治る事は難しいだろうと宣告された。

そんな理由から務めていた会社も辞める羽目になり、今は無職である。

生活の生計など立つはずも無く、今では紅葉のアルバイトだけが唯一の希望だった。

しかし、女子高生のアルバイト代と言うのもたかが知れている。

女と言う理由だけで肉体的な仕事は雇ってくれず、低給料の接客しか雇ってもらえないのが現状だ。

おまけに洋子は明日から入院しなければならない。そうすると頼みに綱は洋子の貯金だけである。

幸いな事に洋子の預金はそれなりに入っており、入院費はしばらくまかなえる。

しかし食いつぶすという現状に変化は無く、金はいつか消えてしまうものだ。

無くなってしまうえば入院費を払う事もできない。当然この家賃だって払えないだろう。

そうなってしまう前に何とかしなければならぬのだが、今の現状ではどうにもならなかった。

離婚した洋子の夫は、まさにロクデナシと言う言葉を絵に書いたような男だった。

そのため養育費など送られてくるはずも無く、紅葉は全て自分のアルバイト代から学費を払っている。

2つのバイトを掛け持ちして、どうにかして食いつないでいるが、それもそろそろ限界だった。

いくら接客とは言え疲労もある。それに加えて学校での陰湿ないじめが紅葉の精神を蝕んだ。

「紅葉、良いのよ。私がやるから」

「良いから寝ててよ。これが終わったら私バイト行くからさ。今日は給料日なんだ、楽しみ」

紅葉の笑顔は屈託の無い笑顔だった。

彼女は全ての用事を済ませると、母に「寝ているように」と言い聞かせ家を出た。

矢吹紅葉。今年で高校2年生になる女子高生。

紅葉と言う名前はもはや説明するまでもないと思うが、彼女が生まれた時期は紅葉の綺麗な時期で

それに因んで紅葉と名付けられた。父も母も紅葉の誕生に胸躍らせ、

やがて来る未来に将来の希望を夢見ていた。

だがそんな幸福は10年ほどしか続かなかった。

夫の仕事に暗雲が立ち込め始めると、生活は一気にみすばらしいものへと変化した。

それでも夫は懸命に働き続け、家族のために努力を続けた。だがそれでも不運は確実に彼らを襲った。

夫の同僚が会社の債権を廻り、自分の分だけを奪って姿を暗ましたのだ。

それによつて夫の勤めていた会社は多大なダメージを受け、当時幹部クラスだった夫は責任問題を追求され次々と金を吸収され、とうとう文無しになってしまった。

これが幹部ではなく、他のクラスだったらこれほどの打撃は受けなかったのだろう。

夫は幹部の重要人物だったために巨大な責任を問われてしまった。これによつて夫は会社を去ることを余儀なくされ、事実上のリストラが彼を襲った。

夫は再起を掛け、その後も懸命に動いたが、不運は不運を呼ぶもので、とある人物の保証人となつてしまい

2億と言つ借金を負う羽目になつてしまった。

生きる希望を失つた夫は酒びたりとなり、母の洋子も彼を見かねて離婚を決意。

そして今現在の生活があると言つわけだ。

父親を失つた紅葉だったが、悲しんでいる暇など無かった。それと同時に洋子が体調不良に見舞われたのだから。

自分が働かなければ母は満足に入院すら出来ない。それ即ち「救える命も救えない」と言つ状況だった。

だが今日は給料日だ。学校でいじめられ今週末までに20万持つて来いと言われてはいるが

無いものは無いのだ。どうあつても揃えられる金額ではない。

また笑って殴られて、蹴られて、罵られればそれで終わる。ちよつと痛いけど我慢さえすればそれで済む。

今日貰える給料の半分を予め貯めておいた預金と合計すると、洋子が入院する際に必要な金額を

洋子の預金から引き出す事無く払う事ができる。預金さえ引き出さずに入院までこぎ付けられれば

後は紅葉の頑張り次第でどうにかなるのだ。

これまでほとんど休日無しで働いてきた金だ。大切に扱わなきゃならない。

母のために……。自分をここまで育ててくれた母親のために……。

紅葉は仕事が終わりに、受け取った給料をバッグに入れると、勤務先のコンビニを後にした。

「給料日なんだってね、今日」

自転車を止めていた駐輪所で突然声を掛けられた。驚いた紅葉の両肩に手が置かれる。

見るとそこには学校のクラスメイト……。紅葉をいじめているグループ数名が立っていた。

「な、なに……。何か用？」

「何か用だって、ずいぶん素っ気無いじゃん。貰ったんでしょ？ 給料」

「だからなんなの……」

「よこしな」

「ふ、ふざけないで！！どうしてあんたたちに上げなきゃならないのよ」

「言ったでしょ？ 20万持って来いって」

そう言った女性徒の隣に、いかにもタチの悪そうな男子生徒3人が姿を現した。手には金属バッドを持っている。

「あんたたちに上げるお金はない……。っ！」

一瞬何が起こったのか分からなかった。だがどういわけか紅葉は



地面に這い蹲っている。

頭から生温い液体が流れるのが分かった。男子生徒の持っていた金屬バッドが頭に命中したのである。

女生徒は紅葉からバグを取り上げると、封筒に入った給料を掴み取った。

「やめて……か、返して……お願いだから……それが無いとお母さんが……」

「ああ？お母さんがどうしたって？」

「お母さん……入院できなくなっちゃう……お願いだから……返して……」

「うるせえんだよ、このアマ！？」

「やっちゃって」

女生徒の言葉が合図となり、紅葉は3人の男たちから殴られた。

3人も男たちから殴られたとあつては、もはやどうしようもない。こっちはただの女。どう考えても非力な女なのだ。太刀打ちできるはずが無かった。

「うう……ぐう……」

「惨めねーこんなに汚れちゃって。可愛そうに」

リーダー格の女が紅葉の顎を掴んでそう言った。

「あんたのお母さんって病気なんでしょ？良かったじゃない。これでお母さんは入院できない。」

厄介者の母親が死ねば、あんたも苦労しなくて済むじゃないの」

「返して……お金……返して……」

「ダメーあんたのものは私の物。私はジャイアンであんたはのび太なのよ」

ギャハハハと言う歓声が上がった。これ以上に無いほどの屈辱だった。

「じゃあね、子猫ちゃん」

そう言々と紅葉の給料を奪い、一同は去って行く。

「返して……お金返して……返してえ！！！！！！！！！！」

もはや紅葉の言葉など、連中には届いていなかった・・・。

紅葉は自分を呪った。もし自分が男だったら、こんな惨めな姿にはなっていなかったはずだ。

もつと力だつて強かっただろうし、あの連中にだつて負けてなかったはずだ。

自分が男で強ければ、お母さんだつて守れたはずなのに・・・。

「いつか・・・いつか見てるよ・・・殺してやる・・・殺してやるからな!!!」

この瞬間、紅葉の中に鬼が生まれた。

殺し屋と言う存在は知らなかったわけではない。

その言葉が存在するという事は実在するという何よりの証拠だ。想像も付かない人物だが殺し屋は確実に居る。

紅葉はそう信じていた。自分が手を下せないのなら誰かに頼めば良い。

紅葉はこの世の中に「裏社会」と言う世界があり、更にその裏側に「魔界」と呼ばれる世界がある事を知った。

魔界では殺しなど日常茶飯事のように起きているらしい。人が人を殺すことなど当たり前のような世界。

そう言った魔の世界がある事を紅葉は知った。

そしてその世界に「殺し屋」が存在する事も彼女は知り得た。彼女はその殺し屋を雇う事を考えた。

だが、得た情報によると殺し屋を雇うためには膨大な金が必要になるらしい。

金額までは分からないが、何十万と言う世界ではない事は確かだ。動くとしたら何百、いや何千万クラスかもしれない。

そんな金を紅葉が用意できるはずが無い。

しかし、紅葉が得た情報には、殺し屋は最初から金額を提示するわけではなく

殺し屋が依頼主に実際に会ってから金額を決めるというシステムのようだった。

紅葉は悩んだ。いくらになるか検討も付かない。だが奪われた金を取り戻さなきゃお母さんは入院できない。

そうなれば命に関わってくる。もはや一刻の猶予も無かった。

そして紅葉は決断し、受話器を手にした。

「もしもし……」

待ち合わせ場所に現れたのは長身で黒髪に短髪。黒のジャケットを着た、いかにも強そうな男だった。

男は「鉄 麗」と名乗った。どうやら彼は魔界ではかなりの有名人らしく、その手のプロだと言う。

確かに外見を見る限り、凄まじい風格と威厳が感じられる。見つめられるだけで殺されそうな雰囲気だった。

無論、この時点ではこの男が魔界で「神殺しのウル」と言う人物である事を知る善しも無いのだが……。

紅葉は事情を話した。依頼できるほどの金は持ち合わせていないが、どうしても奪われた金を取り戻さなきゃならない。

母の病の事。そして、何より奪い取った連中が憎いと言う事を……。

「一つ聞いて言いか？」

鉄麗が言った。

「なんですか？」

「どうしてあんたはいつもそうやって笑いながら話すんだ？」

「えっ……」

紅葉は自分では気付いていなかった。余計な攻撃を受けまいと常に笑っている仕草がここでも出てしまったようだ。

「えっ……あの……そうですか……アハハ……良く分からないけど……そうなのかな……」

「……………」

「ごめんさない……そ、その……えつと……気持ち悪いですよ  
ね……ごめんなさい……」

「いじめられて感情を無くしたか……それとも余計な打撃を受け  
まいとすると防衛本能か」

「ア、アハハ……どうでしょうね……そ、その……良く分  
からないです……」

鉄麗の指摘は的確だった。まだ今日会ったばかりである。にも拘ら  
ずこの男は紅葉の心の悲鳴を聞き取ったのである。

「で？誰を殺して欲しいんだ？」

「えっ……あ、あの、でもお金が……」

「その事なら後で話そう、俺はあんたが気に入った。この依頼受け  
てやる」

ウルも何かしら感じる事があったのだろう。彼は無条件で紅葉の依  
頼を受けたのだった。

「自分を苦しめた、いじめに加わった連中から奪われたお金を取り  
戻して欲しい。

そしてその連中を皆殺しにして欲しい」

それが紅葉からの依頼だった。ウルに取ってはまさに朝飯前の仕事  
だった。

紅葉はわざと連中をおびき出した。連中からすれば紅葉は金ズルだ。  
何の疑いも無くノコノコと現れた。

そこに登場したのがウルだった。もうその後は地獄絵図と言えるだ  
ろう。

紅葉の依頼どおり、ウルはこれ以上に無いほどの残忍な手口で次々  
と血祭りに上げた。

それを見ていた紅葉も、気付けば凶器を手にし、もはや亡骸と化し  
た死体に向かつて何度も凶器を振り下ろした。

顔面が潰れ、眼球が飛び出し、口が裂け耳がもぎ取れるまで。何度

も何度も……。

これで紅葉は立派な殺人鬼となった。

事が済んだ二人は近くにある空き地にいた。奪われた金は全額戻った。これでお母さんを入院させる事ができる。

「あ、あの……お金は……その……ど、どうすれば……私、払えるお金が、その……なくて……」

「誰も金をよこせなんて言っていないぞ」

「えっ……で、でも殺しにはお金が掛かるって……」

ウルは何も言わず持っていたバッグを紅葉の前に投げた。

「これは……」

「開けてみる」

言われるがまま、紅葉はバッグを開けた。

「こ、これって……」

驚いた事にそこにはいくつもの札束が納まっていた。ざっと見た限りでも3億近くはあるだろう。

「母親の入院費は高く付く。だがそれだけの金があれば死ぬまで面倒が見れるだろ。」

お前さえ良ければその金はくれてやる。ただし、条件がある」

「じよ、条件……?……」

紅葉は生唾を飲み込んだ。

「確かに俺は本来依頼主からそれなりの報酬を貰う事で殺し屋を続けている。今回お前から金は取らず

逆にこうして3億もの金を提供している。それにはそれなりの条件がある」

紅葉はもはや驚かなかった。何故なら紅葉はもう人殺しなのだ。母親に合わせる顔などない。

後は自分の犯行が警察に見つかり、逮捕されるのを待つだけなのだ。失うものなど何も無い。

だから紅葉は怖くなかった。

「条件とはなんですか？」

「簡単だ。俺と一緒に魔界に来い」

あまりにも突飛な話に逆に拍子抜けを食らった。

「魔界に・・・」

「そうだ。お前なら俺の次に強くなれる」

「私が・・・強く？」

「ああ。魔界に男女は関係ないからな」

紅葉の前に一筋の希望が見えた気がした。

「分かった。私、魔界に行きます」

「そうか、それじゃ2日後、ここでまた会おう。いろいろとやることがあるだろう。全て済ませておけ」

「うん、分かった」

それから紅葉は母を入院させ、その費用は3億が納まっている銀行の口座から自動で引き落とされる手続きを取った。

そして今まで育ててくれた母に「また来るから」と言って病院を後にした。

もう二度と戻らない事は紅葉にも分かっていた。

自分はもうこの世界の人間ではない。これから魔界の住人として生きることになるのだから。

紅葉はウルとの約束の場所へ向かった。

「ずいぶん風変わりしたな。髪切ったのか」

「うん。似合うでしょ？」

少々おどけた紅葉がそう言った。

「さて、じゃあ行こうか、紅葉」

「私は・・・いや、僕はもう紅葉じゃないよ」

「？」

「僕の名前は矢吹 紅。これからよろしくね、ウル」

「ああ」

ウルはニヤリと笑いそう言った。

「ねえ、僕本当に強くなれるかな？」

「なれるさ。お前なら魔界No.2になれる」

「楽しみだな」

その後、ウルという言葉は現実のものとなる。

紅は成長を続け、4年後に見事魔界No.2の座を手にする事になる。

そして、ここに「処刑の紅」が誕生したのである……。

END

### アナザー・ストーリー／エピソード3「魔矢の十字架」

「刑事さん、煙草は持ってるか？」

男の問い掛けに俺は何も言わずに首を振った。

「なんだ持つてないのか、元々吸わないのかい？」

「煙草は吸わん。身体に悪いからな」

「フハハハハ、あんた面白い事言うな」

「そうか？」

「ああ。俺からしたら煙草なんかよりも、刑事なんて仕事している方がよっぽど身体に悪いと思うがね」

なかなか説得力のある事を言いやがる。確かに刑事なんてやるよりも、ヘビースモーカーの方が健康だろう。

こちらら年中神経を尖らせ、コイツのような悪党を逮捕している。

命がいくつあっても足りやしない。

「刑事さん、あんたは今の日本をどう思う？」

男は何の前触れもなく、そう尋ねた。

俺の名前は音羽麻矢。ここ東京の湾岸署に勤務する刑事。担当は刑事課。主に殺人や違法物を担当している。

今俺がいるのは都内の某刑務所にある面会室だ。

面会室に来ている用事が今日の前にいるこの男だった。

男の名前はジャン。中国人の母親と日本の父親との間に生まれたハーフ。

国籍は日本のため、こうして日本の刑務所に居るわけだ。

無論、刑務所に居るという事は犯罪を犯した罪があるわけで、とりわけジャンはその中でも重罪を犯した死刑囚だ。

数年前から日本と中国の間で麻薬売買が盛んになり、日本の麻薬組織と中国のマフィアたちが手を組んでいた。

扱われる品のほとんどはドラッグ。それもかなり純度の高い代物ばかりだ。



元々中学ではドラッグの取引が横行しており、その広域範囲は年々拡大の経緯を辿っている。

そのターゲットに日本がカウントされていても何らおかしいことではない。

日本の組織と中国のマフィアが組んだ新たな組織「フューネラル」のボスが他ならぬジャンだった。

日本警察は中国政府と合同で捜査に当たり、ようやくフューネラルの頭であるジャンを逮捕できたのだ。

ジャン逮捕の経緯には犠牲者も出た。一般市民を含め合計14人も人間が死亡し、そのうち8人の刑事が殉職している。

これ以上の犠牲者を出すわけには行かない・・・そう思っていた矢先、連中の取引先に潜入捜査として送り込まれていた俺が

やっとの思いでジャンを確保。それから援護部隊に連絡を取り、こうして無事に逮捕に至っている。

裁判でジャンは多くの麻薬を売買した事、それに殺人の容疑で立件され、死刑判決が下った。

だが例えジャンが死刑になっても、フューネラルと言う組織を壊滅した事にはならない。

未だフューネラルは存在しており、俺たちは今その壊滅を目指し、捜査している。

その最重要化課題が「フューネラルのボス、ジャンの面会」だった。「なかなか気に入っている。近代化するテクノロジーには少々着いて行けないけどな」

「そうかい、あんたまだ若そうだな。歳いくつだい？」

「今年で26だ」

「若いね、その若さで他の刑事たちの指揮を取るんだろ？異例の昇格ってヤツだな」

「それはどうも」

ジャンの言っていることは的を得ている。入所当時から射撃の腕前を買われていた俺は、湾岸署初の最年少昇格を果たした。

それも潜入捜査によりジャンを逮捕した事が大きく影響している。

「俺は死刑囚だ。後はもう死を待っただけだ。だが気をつけることだ、誰もがいつでも死刑になり得る」

「どういう意味だ？」

「例えば俺が死んでも組織は存続する。あんた、気を付けた方がいいぜ。俺を捕まえたのがあんただって事は

組織の連中は皆テレビを通して知っているからな」

「つまりお前の仲間が復讐に來ると言う事か」

「へへへ、それで済んだらまだマシだろうがな。特に俺の死刑執行日は気をつけるんだな」

「話にならん」

俺はそう言つと取調室を出た。

「復讐はいつだって遠回しにやって来る。へへ、刑事さん良く覚えときな」

気に止めるような言葉ではなかった。俺を殺しに來るなら返つて好都合と言つもの。返り討ちにして連中のアジトを聞き出してやる。その時の俺はそう思つていた。

「お帰り」

「ただいま。郁子はもう寝たかい？」

「ええ、ついさっきまで起きてたんだけどね。パパにチューするんだつて言つて」

家に歸つた俺に、妻の香織が微笑んだ。

「そうか、もうちょっと早く歸つて来れば良かったな」

「フフ、代わりに私がしてあげようか？」

「ああ、是非頼むよ」

そう言つと香織は俺の唇にキスをした。

香織とは学生時代からの付き合いだ。高校生の頃に同じサークルで会つた。その後俺は警察官になるべく警察学校へ入学。

香織は大学には行かず、母親の店である花屋の後を継いだ。

俺が警察学校を卒業し、刑事になった頃には、既に香織の花屋は店舗を持つまでに大きくなり、ここ最近その店舗の数を増やしつつあった。

その香織との間に生まれたのが娘の郁子だ。今年で3歳になった。俺は郁子のためなら何で出来る。目に入れても痛くない可愛さとはよく言ったもんだが、まさにその通りだ。

郁子が将来結婚するかと思うと、考えただけで泣けてくる。「冗談じゃない。手放してなるものか。

親ばかりと言われるかも知れないが、父親は子供を溺愛するものだ。それが娘なら余計に。

「仕事、忙しいの？」

「ああ、例の事件がまだ解決していないからね。明日からまた家を開ける事になりそうだ」

「そう、あまり無理だけはしないでね。郁子のためにも」

「分かってる。すまんが俺の居ない間、家を頼む」

「うん」

幸せだった。仕事は大変だが家に帰れば美人の妻が出迎え、娘の郁子がいる。

娘の成長を見守るのがどれだけ楽しいか。家庭を、子供の居る親なら誰もが思う至福の一時だ。

その傍らに妻の香織がいる。これこそが本当の幸せと言うものなのだろう。俺はそれを信じて疑わなかった。

ましてやその幸福が無惨に引き裂かれる事など、想像もしなかった。  
・・。

ジャン逮捕後、フューネラルに関する捜査は暗礁に乗り上げた。様々な情報が錯綜する中、最も有力視されている情報の一つが

「フューネラルは魔界と言う世界に住む殺人鬼の手によって皆殺しにされた」と言う情報だった。

まだ未確認だが、闇世界をうろつくゴロツキどもが、フューネラル

のアジトに乗り込んでいく二人組みを見たと言う。

一人は長身で大柄の男で、髪の毛は短髪で皮のジャケットを着ておりもう一人は女と見間違えてしまうほどの美少年だったと言う。

魔界と言う世界がこの日本に存在する事は知っていた。魔界には法がない。よって警察も介入できない禁断の世界。

裏社会、闇世界をも超越した殺戮のみの世界、それが魔界だ。

（この二人組みが後のウルと紅であるが、この時の麻矢は知る善しも無い）

だがあくまで未確認の情報だ。鵜呑みにする事は出来ない。捜査本部は動き様が無い状況にシビレを切らし始めていた。

そしてあの日……

俺に取っては運命とも呼べるジャンの死刑執行日がやって来たのだ。

「こうして人生最後の日を、まさかあんと迎えるとは思わなかったな」

「すまん、むさくるしい男で」

「良いつて事よ。むしろ俺は心配してんだぜ、あんたの事をな」

「未確認だがフューネラルは壊滅に陥ったと言う情報がある。となると幹部の連中はもうこの世にはいない。

つまり俺を憎むのはお前くらいなものだ」

死刑執行当日、俺はジャン発つての要望で執行まで行動を共にする事となった。

「へへへ、魔界か」

「そつだ。どうやら知っているようだな」

「俺も伊達に裏社会で生きてないぜ。それくらい知ってる。実は俺も魔界に行く予定だったんでね」

「ほう、それは初耳だ。お前如きが生き延びられる世界だとは思えんがな」

「ハハハ！刑事さん、言うね」

「音羽警部」

その時、フューネラル壊滅に関して調べさせていた刑事たちが俺の元へやって来た。

「どうだった？」

「はい、情報通りフューネラルは壊滅している事実が取れました。やったのは二人組みの男。」

未確認だった情報通りの風貌だそうです」

「そうか。ジャン、聞いただろ？お前の組織はご臨終だ。そしてお前ももうすぐそうなる」

俺がそう言つと死刑執行の指示を取る検察官がジャンの元に現れた。いよいよ死刑実行のときが来たのだ。

そしてジャンは言った。

「刑事さん、あんた綺麗な奥さんが居るよな。それに可愛い娘がよ」  
「っ！！！」

俺は自分の耳を疑った。ジャンが俺の家族について知るはずが無いのだ。

「俺だつて一人で魔界へ行こうなんて思ってたぜ。実は知り合いが魔界に住んでてね。」

そいつは俺の友人でさ、俺が逮捕された事に相当腹を立ててるんだよ」

ジャンが何を言わんとしているのか理解できなかった。

「そいつはまだ生きてるぜ。なんだつて魔界で生きてんだからな。」

今頃何処に居るかな？ああ、そうか、刑事さん、あんたの家に向かったんだっけ」

「なっ、なに！！！」

「クケケケ！！言っただろ？刑事さん。復讐はいつだって遠回しにやってくる。」

何もあんたを殺すことが復讐だとは限らないんだぜ！！」

ジャンがそういつた時には既に俺の身体は動いていた。家族が、香織が、そして郁子が危ない！

「ククク・・・俺はちゃんと言ったぜ、あんたが心配だってな!!」  
それがジャンの最後の言葉だった。

激しく息を切らせながら、俺は家に辿り着いた。

家のドアを開けるまでもなかった。刑事の勘が危険を知らせている。  
家から漂う雰囲気がいづとも違っていったのだ。

禍々しい殺意の渦。そして血の匂い。俺は我を忘れて家に飛び込んだ。

そして・・・

「香織・・・郁子・・・ああああ・・・」

そこで俺は地獄を見た。変わり果てた妻と郁子の姿。

辺り一面血の海。二人の肉体はバラバラにされており、どれが誰の部分なのか判別が付かなかった。

「嘘だろ・・・こんな・・・こんな事があって良いのか・・・」

その時、俺の背後で物音がした。誰かがいる事は明らかだった。

もはや迷いはなかった。ただ頭に浮かんだのは「殺してやる」と言う憎悪だけ。

俺は振り向きざまに持っていた銃を構えた。

相手はやはり男だった。それが魔界の住人である事は一目瞭然だった。

あの目は普通の人間の目ではない。血と殺戮に溺れ、我を忘れた殺人マシーン。

俺はヤツの頭目掛けて何度も発砲した。幸い俺の射撃の腕前が活かされ、相手はほぼ即死。

（麻矢の家族を殺した殺人鬼のランクは最下級クラス）

それでも俺は持っている全ての弾丸をヤツに食らわせた。

全ての弾奏が終わると、俺は跪いた。

俺は守れなかったのだ。家族を、娘を・・・。  
光り輝く二人の尊い命を守れなかったのだ。

「うわああああああああっ！！！！」

その後、俺がどうやって朝を迎えたのかについては、明確に覚えていない。

人体改造を仕事としている店のマスターは

その男がやってきた時、目を疑った。男の顔からは生気が失われ、その代わりとして鬼が宿っていた。

そして男はマスターにこう言った。

「自分の腕を改造して欲しい」と。

男は改造に当たつての細かい詳細をメモしており、それ通りに作つて欲しいと言った。

「別に構わないが、凄まじい激痛を伴う事になるが」

「構わん。遠慮なくやってくれ」

マスターの言葉に男はそう答えた。まるで激痛を甘んじて受け入れるように。

手術は19時間にも及び、ようやく完成の日の目を見た。

「あんたの要望通り出来たぞ、オリハルコン・オロチだ」

「手間を取らせたな」

そう言つと男は提示された金を置き、店を出た。

「あんた、何処行くんだ？」

そして男は力無く、鬼の形相でこう答えた。

「魔界へ・・・。」と。

E  
N  
D



## アナザー・ストーリー／エピソード4「魅惑、由佳の狂気」

その入り口はポツカリを口を開いた魔物のようだった。

入り口から奥は真つ暗闇、物音さえしない真の暗みだ。

とても女一人で足を向けるような場所ではない。にも関わらず、この入り口の二人の女が立っていた。

「本当に行くの？」

「ええ」

「私には分からないよ。どうしてこんな事に・・・」

「それは私だって同じだよ。ありがとう、真奈美。付き合ってくれて」

「ねえ、由佳。もう一度考え直そうよ。無謀過ぎるって女のあんたが魔界に行くなんて」

「そうだけでもう手遅れだよ。私は人を殺した。しかも最愛の人を・・・」

「あの男は結局由佳を騙していたんじゃない。それはくらい分かるでしょ？」

「分かってる。けどこの手に掛けたのは事実だから。私はもうこの世界に居られない」

「警察行こう。自首して罪を償って、それが終わったらもう一度やり直せば良いじゃない」

「真奈美、私は捕まるのが嫌で魔界に行くんじゃないよ」

「だったら余計・・・」

「また人を殺しそうだから魔界へ行くの」

「由佳・・・」

「私はもう人を殺す快楽を覚えてしまった。この手がね、私に言うの。殺せって」

「・・・」

「私はもう人間じゃない。人を殺めた。後戻りは出来ないの」

「だけど、だからって何も魔界へ行く必要は無いでしょ」

「あるわ。魔界へ行けば私は人を殺さない」

「どうして？」

「魔界には殺人鬼しかいないんだよ。女の私じゃとても闘えない。だから私は人を殺さない。」

「けどこのままこの世界に居たら、私は間違いなく人を殺す」

「自分を止めるために魔界へ？」

「そう。それしかないの」

そう言う由佳は真奈美の方へ振り返った。

「真奈美、今まで本当にありがとう。私が信用できるのは貴方だけ。けどこのまま真奈美と一緒に居ると、取り返しの付かない事になりそうだから、私行くよ」

「由佳」

「それじゃ、またね」

そう言い残し、魔界の闇へ消えて行った由佳は、二度と振り向かなかった。

事の発端は数ヶ月前に遡る。

由佳には結婚を約束した彼が居た。彼の名前は雪城 ゆきしろ 裕也 ゆづや

由佳が18歳だったのに対し、裕也は24歳で一流企業に勤務するエリートだった。

裕也との出会いは出来心で参加した合コンがきっかけだった。

二人の共通の知人が、他数名をカップリングし行なわれた合コンで席が隣同士になった。

そのため二人は自然と話をするようになり、気付けば意気投合を果たしていたのだ。

付き合いようになったのも極自然の成り行きで、気持ちを伝える前に既に身体の関係を持っていた。

今思うと明確な告白は無かったような気がした。由佳も面と向かって気持ちを伝えた事はなかったし

裕也も無かったはずだ。例え愛の告白がなかったとしても、二人の未来は輝いていたのだ。

幼い頃から愛情に飢えていた由佳は極度の寂しがり屋。自分一人で生きて行けるようなタイプではない。

一方の裕也もどちらかと言えば寂しがり屋で、少々頼りない一面もあったが、由佳はそんな裕也が好きだった。

表面的には気持ちは一致しているはずだった。

少なくとも由佳は裕也との結婚を考えていたし、その後の人生も共にするつもりでいたのだ。

だが裕也はそうではなかった。

元々親の七光りで世間に出た裕也は我慢と言うものを知らない。

おまけに性格は甘ったれで、親の敷いたレールを歩いてきた世間知らずの男。

由佳との初めての性交でその快楽を覚えた裕也は、その後は避妊せずに行為に走った。

受け入れる由佳としては、避妊しなければ子を宿すという事は知っていたが

裕也がそれでも良い。あるいはその気があつてしているものだと解釈していたため

避妊せずのセックスを拒む事はしなかったのだ。それが仇となった。避妊せずに一ヶ月が経過した時、由佳は子を宿した。

医者からは「おめでたですよ」と言われ、由佳自身も大いに喜んだ。共働きで、尚且つ由佳が中学生の頃に交通事故で両親は一度に他界。親の愛情などほとんど与えられなかった由佳にとって、最愛の人の子を宿す事はこれ以上に無いほどの喜びだった。

だが妊娠した事実を裕也に伝えると、裕也は顔を真っ青にしてこう言った。

「堕ろしてくれないか？」

それは由佳にとって「死の宣告」と同じ破壊力を持っていた。

結婚の約束をしていたのは事実だが、裕也は明らかに由佳の妊娠についてビビっていた。

突如として突き付けられた現実を拒否したのだ。元々親の七光りで社会に出たような男だ。

当然の反応といえば当然でもあるが、まだ無垢だった由佳にとって、それはにわかには信じがたい態度だった。

妊娠した事実を告げた翌日から連絡する回数が減った。

「どうして電話に出ないの？」と問い掛けても「仕事が忙しいんだ」としか言わない。

やがて連絡は来なくなり、毎日のように送っていたメールも、由佳が送らなければ返事が来ない状況になった。

妊娠する前は裕也のほうから五月蠅いほどメールが来たというのに、その後しばらくすると今度は電話が通じなくなった。掛けても「おかけになった電話番号は現在使われておりません」と言う冷たいアナウンスが流れるだけ。

更に関係を切る行為はエスカレートし、裕也の勤め先に電話しても彼には繋がらなかった。

電話を受けた相手の反応から見て、おそらく裕也から「いないと伝えてくれ」と言われているであろう事は明白だった。

自分は捨てられる。宿した子供と一緒に……。

まだ18の小娘である。頼るべき存在に捨てられてはどうしたら良いか分からなくなって当然だ。

シビレを切らした由佳はとうとう彼の会社と自宅を訪れた。

だがそこに彼は居なかった。会社の上司が現れ「裕也は2日前に退職した」と由佳に告げたのである。

上司の話しぶりから察するに、嘘を言っているようには見えなかった。どうやら本当に辞めた様である。

その足で自宅にも向かったが、もはやもぬけの殻だった。とっくに引越した後であり、自宅は空室になっていた。

逃げられた……。この時まで心の片隅にわずかな希望を持っていた由佳だったが  
もはや現実は変わらなかった。由佳は子供と一緒に捨てられたのである。

その後由佳は子供を墮ろした。

親の居ない由佳はたった一人で子供を墮ろすという背徳行為をやつてのけた。

勿論、こんな事はしなくなかった。だがまだ二十歳にもならない親の居ない女に、どうやって子供を育てると言うのだ。

人間的にも経済的にも、由佳自身が食べるだけで精一杯なのだ。

由佳は自分の本当の気持ちを押し殺し、泣きながら我が子を墮ろした。

「次は別のお母さんの身体に宿つてね」

「こんなママでごめんね」

「魂だけになって、いつか私を殺しに来てね。その時、私は喜んで貴方に殺されるから」

幾度と無く繰り返された自責の念に、由佳の心は大きく傷付き、もはや修復は不可能な状況に陥っていた。

子供を墮ろした由佳にはやるべき事があった。

それは最愛の人、裕也を抹殺する事だった。

犠牲は私たちだけで十分。彼が生きていたら同じ苦しみを味わう人が必ず出てくるだろう。

それだけはなんとしても阻止せねばならなかった。

由佳は興信所に裕也の行方を調べるようお願いした。

すると呆気なく裕也は見つかった。驚いたことは裕也は以前住んでいた場所の隣の地区に住んでいたのだ。

しかも、新しい女と一緒に……。

鬼畜とはまさにこの事だった。由佳は自宅からありったけの凶器（

包丁やカッターナイフなど）をバッグに詰め夜を待った。

興信所からの情報によると、夜は新しい女と一緒に過ごしているようだった。

由佳は裕也の家に忍び寄り、深い深夜を待ち、行動に移した。

案の定、裕也の家から女の喘ぎ声が漏れている。どうやらよろしくやっているらしい。

季節が夏だったせいもあり、裕也の家に窓ガラスは網戸になっていた。

気付かれないようにベランダに侵入すると、由佳は渾身の力を込めて網戸を包丁で引き裂いた。

「きゃああああっ！！」

裕也の下で両足を広げていた女が叫んだときにはもう遅かった。

由佳の振り上げた包丁は、女の上に重なっている裕也の背中から、下にいる女の腹部に突き刺さった。

包丁の柄の半分までが裕也の身体に突き刺さっている。相当深く刺さっている証拠だ。

刺さった場所も悪かった。刃はちょうど裕也の心臓を突き破っていたのだ。

ほとんど即死だったが、由佳はそれで手を休める事はしなかった。

由佳は何も言わず、ずっと黙ったまま何度も包丁を裕也と女に突き立てた。

血肉が飛び散り、内臓が露になる。口から大量の血が流れ、二人の喉がゴボゴボと嫌な音を立てる。

夜が開け、日差しが部屋に差し込む頃には、もはやそれが人間の原型とは思えないほど、無惨な姿と化していた。

この事件は警察でも大きく取り上げられ、メディアにも伝えられたが、未だに犯人は捕まっていない。

自分の元から去って行く由佳を見つめたが、真奈美は涙を流さなかった。

「こうするしかない」と言う諦めは真奈美も分かっていたのだから。

魔界の闇に包まれた由佳は、目を閉じ静かに歩いた。  
そして思う。

「もう二度と戻らない。私を愛してくれる人なんていないから」

この3年後、由佳は魔界で魔矢と出会う事になる・・・。

E N D

「ぐはっ!!」

「上村道場も話にならへんな〜こんなザコばかりが門下生じゃその名が廃るで」

大阪府にある有名道場「上村道場」に突如として現れた「道場破り」は

この道場の主である上村を意図も簡単にねじ伏せた。

「き、貴様……」

「なんや、まだやるんか？止めたほうがええで。ワイが本気になったらあんさんの首、チョイや」

焰 羅刹、この道場破りの名は大阪では有名だった。関西に存在する8つを道場が羅刹の手によって破壊され

その看板を持って行かれている。いずれの主は皆大怪我を負わされた拳句に金目のものは強奪されていた。

羅刹は上村を見下しながら首を搔つ切るポーズを取った。

「ほんなら看板持つて行くさかいな。ケケケ、これで9つ目や」

上村は黙って見ているしかなかった。師範代である自分が負けたのである。目の前には門下生が何人も居る。

そんな場で見苦しい事など出来るはずもなかった。

「それからこの刀貰って行くで。道場には必ずある言う真剣 もうワイご機嫌や」

主の座っている椅子の後ろに日本刀が携えてある。羅刹はそれを手にとると鞘を抜いた。

「お前は刀狂か？」

上村が言った。

「ワイ？そうやで。刀がごつつ好きやねん。人を斬るのはもっと好きやねんけど」

羅刹がそういった瞬間、門下生たちが身を引いた。



「これで真剣は9つめや。見てみい、この美しさ。最高やな」

「刀ごときで満足するために道場破りか。なるほどな」

「な〜んや、その言い方。ごつつム力つくな」

羅刹は真剣を持ったまま上村に詰め寄った。そして左手で胸倉を掴み、軽々と持ち上げた。

「お前、負けといて何抜かすねん。偉そうやないか」

「ふ、ふん！所詮人を斬って楽しむだけの狂人なのだろう？」

「せやから何が言いたいねん。あんまナメた事抜かすようならコラスで！」

「お前は確かに強い。だが刀だけに魅了された人間など所詮それまで。いくらお前のような男でもあの刀は手に負えないだろうと思つてな」

「あの刀？なんやそれ」

「聖魔刀……」

「セイマトウ？」

「日本古来より伝わる鋼鉄と、西洋より伝わった聖剣の素材になっているオリハルコンを融合させた聖なる刀。」

かのナポレオンやルイ14世ですら扱う事のできなかった伝説の名刀だ」

「ほほう」

「その切れ味は日本刀を軽く凌駕する。だが同時に魔を秘めた魔剣でもある」

「興味ある話やな〜何処にあんねん」

「ここ関西にある籠手ヶ裏山脈の奥深く。魔の岩と呼ばれる岩ノ下に、聖魔刀へと続く洞窟がある」

「ほうほう、そうかい」

「うわ！」

羅刹は上村を手放すと歩き出した。どうやら興味を引いたようだ。

「せや、忘れとったで」

羅刹はそう言うのと引き返した。そして上村の頭上で刀を大きく振り

上げた。

「ええ事教えてもらうたお礼や、その身を持ってじっくり味わえ」  
「や、止める！ーくはああっ！ー！」

刀は垂直に振り下ろされ、上村の身体を縦に切り裂き、真つ二つに割れた。

夥しい鮮血が飛び散る。

「ひ、人殺しだ！ー！」

「うわああああっ！」

門下生たちが逃げ惑う。

「ケケケ、聖魔刀か。待ってろ、今ワイが取りに行くさかい」

箆手ヶ裏山脈、通称「天狗山」

その昔天狗が舞い降りた山脈として崇められ、今でも多くの登山家たちが訪れている。

山頂には天狗の銅像が立てられており、周囲の美しい情景を見守っている。

敏捷性に長けている羅刹にとって登る事は容易だった。だが魔の岩を破壊し、洞窟を発見するまではかなりの時間を要した。

何せ魔の岩が思いのほか丈夫で、羅刹の抜刀を持っとしても破壊する事ができなかったのだ。

仕方なく羅刹は抜刀の際に巻き起こる衝撃で徐々に岩を移動させた。そして上村が言ったとおり、岩の下から洞窟が現れた。

「けったいな場所や。汚れてまうやないか」

ブツブツと愚痴をこぼしながら羅刹は最下層まで降りた。

地上から約30メートル。ようやく下まで降り立つと羅刹は異様な魔の妖気を感じ取った。

洞窟はまさにトラップの山だった。至るところに罠が仕掛けられており侵入者を拒んでいる。

それでも羅刹はなんとか行き止まりの場所まで辿り着くと、その場で目を見張った。

「こりや・・・天狗やんけ」

そこには氷漬けにされた天狗が立っていた。一体どのようにして凍っているのかは不明だが

腐敗せずにそのままの形で残っている。その天狗の手に禍々しい刀が握られていた。

「あれやな、聖魔刀とか言う刀は」

そう言うとき羅刹は持参した日本刀を勢い良く振り上げ、氷ごと斬り裁いた。

氷漬けになっていた天狗が嫌な音を立て地面に倒れると「カラン」

と言う音が響き、羅刹の足元に聖魔刀が転がった。

「ん？なんやこれ」

そこには一枚の紙切れがあつた。

「古より伝わりし魔剣。扱えるものなら扱ってみる・・・やと？偉そうなこつちや」

まるで馬鹿にしたように聖魔刀を拾い上げ、鞘を抜いたときだった。

「なんや・・・」

抜き取った刀と共に、封印されていた闇の力が解放された。

「うおおおっ！！」

天を舞った闇の力は結集し、頭上から羅刹の身体に入り込む。

「うがあああああつ！！な、なんやこの疼きは・・・」

闇の力が侵入すると、羅刹の身体は変化を始めた。

全身に至る筋肉が膨張し、体格が一回り大きくなる。白目は真っ赤に染まり、自分でも抑えの利かない力が溢れ出る。

「これが、闇の・・・魔剣の本性か・・・！！」

聖魔刀とは文字通り魔を秘めた聖なる刀。その魔こそがバーサーカーの力であり

バーサーカーの力を取り込むことの出来ない人間は、魔の力に圧死してしまうのだ。

刀はあくまで表面的な武器に過ぎず、その本性は刀ではなくバーサーカーの力に有る。それが聖魔刀の全てである。

「か、かあああああつ！！ぐががが・・・」  
凄まじい激痛とドス黒い闇が心に広がる。

羅刹は倒れ、地面でのた打ち回った。

激痛と闇はその後四ヶ月続き、羅刹はたった一人で四ヶ月の間、この洞窟で際悩まされたのである・・・。

助けてくれるものなど誰も居ない。孤独な洞窟で。

一年後・・・。

「ここが魔界の入り口やな。あの組長、けつたいな説明しかせえへんから迷ったやないか」

羅刹の腰には聖魔刀が携えられている。

「ワイの実力、それに聖魔刀の威力を試すには打ってつけの場所や。神殺しのウル、その首はワイが取る！？」

この年、羅刹は魔界に侵入。そしてその魔界でウルたちと出会いゲノムとの壮絶な死闘を繰り広げる運命が待っていた。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9783g/>

---

神殺し

2010年10月9日22時10分発行